

山姫 (しばし無言の後) 何うしてか、今日は私は気が重い。蒸々して、可厭な心地になつて来たは、可憎らしい、あの水の精が、然う言つた、暑い夜が来る前兆か知ら。

あ、其處らの雪の野に往つて、寒い岩窟の中へ涼んで、緑の色の透通る、冷さは氷のやうな雪の水を飲んだほどなら、嘸清々して、可からうねえ——お、ほんに心地も悪い筈、私は今日、うっかり蛇を踏んだもの——然う、然う、蛇が彼處の山の上の、ごろくした石の中の、緑の斑のある、硫黄岩の上へ出て、日向ぼつこをして居た處を、つい踏んだものだから、咬まれてさ、可厭な心地と言つては無いよ。

あれ、跫音が——來るのは誰?

僧 (山入りの扮装效々しきが、太く心身を勞せるため、逆上したる風情なり、息も止る、と喘ぎ喘ぎ、此の硝子製造所の、や、戸に近く辿り着く。) え、くやつとこしよ、此處ぢや此處ぢや。未だ見えぬが村長どの、村長どの、早く後に追續かれませ。

さて早や茲まで來ると云ふが、些やそつとの事ぢやらうか。したが先づ、何はしかれ、無事で丁と怒う此の處へ身體を運んで來て立たせました、はつあ、やれく。

我がおん神の御爲なりやこそ、恚やうな難行も爲ると云ふもの、何は措いて、牧者が小羊の走りものを取り戻すやうに、私が力で、理非衛殿が再び娑婆へさへ歸つてくれれば、如何ほどな

難行苦行も、百倍ましに報はれると申すものぢや。いざふれ、おん神、勇猛精進、ずつと入らう。(と小屋に踏込み、)

誰ぞ、いざざるか、いざざるか。

(姫を一目) や、や、是は。汝は其處に……いや、御許は其處に、ござりましたか。尤も、是にござらうとは、豫て思つて居た事ぢや。

山姫 (氣色勝れず色沈みて、氣味わるげに) お前、何しに?

僧 お尋ね無うても、唯今、唯今其の仔細聞かせます。さて、私が證人とならせらるゝは、忝くも我がおん神にておはするぞ。え、直ぐにも申聞けべきなれど、今少々息を休めて、

今少々汗を拭いて、なう。其處でぢや娘御、これにござるは、御許一人ばかりかの?

山姫 そんなこと、私に問はれるお前かえ。

僧 如何様なう、はて、可い。結構ぢや。今の其のもの云ひぶり、言つきで、化けぬ御許の顔が見えた。お、お底を以て、物も問はいで埒が明くぞよ、これ、御身の。……

山姫 (屹と見て) 用心おし! 人間。

僧 (はたと合掌して姫に向ひて衝と寄り) 露聊も化轉はせぬぞよ。法師が心は不退轉、堅固ぢやわ。世の中に此と云ふ恐怖は持たぬ大和尚ぢや。

これ見よ。此の、なう、老さらぼひ、瘦衰へた手脚にさへ、怒る嶮しき峰を攀ちて、御身達が巢の中まで搔探す、勇猛心をたまはります、おん神が、法師の蔭身に附いてござる。

あはれ、悪魔の子、なう御許、御許が逆らふ心を抱いて、私を惑はし、たぶらかさうといたいても、そりや叶はぬ、とても無益ぢや。變化自在な悪魔の術も法師の身には旭日に霜ぢや、消えて失せい、棄てて了やれ。

さあ何とぢや、御身は御身の山奥へ、あの者を誘ひ込んだに相違あるまい。

山姫 誰を？

僧 誰を？とか。あらためて言ふに及ばぬ、名人ぢや、殖生理非衛を措いて誰があらうぞ。

御身は、これ、理非衛どのが、小犬のやうに、御身が言ひなり次第の虚氣に成るまで、さまざまの魔法を用ゐた、魅入つたわ、剩へ、悪魔が乳房の甘露を含めて、一口名人に嘗めさしたぢや。

さても、思へば、おん神よ。理非衛のやうな信心深い、心の底の底までも金鐵に等しい金剛信者、またそれ一軒の家の父親として、村の龜鑑ともなんぬる人物——無念や、其をば、渡りもこの淫婦奴が手にかゝり、前垂のふはつく中へ、手脚も丸う、くるくると捲込まれて、何處までも其の勝手な處へ、おびき出されて了うたは、如何に、如何に、おん神にも、我が、基督教

の、大恥辱とは思し召さぬか。

山姫 お構ひでない、私がたとひ盗人だつて、お前のものを盗りはせぬもの。

僧 何と？法師のものは盗まぬとか、たはけた事をお云やるな。恥知らずめが、これ、能う聞けよ。御身はの、此の法師をはじめとして、當人理非衛の女房、又其の二人の子供たちのもののみか、ありとあらゆる人間から、大切な漢を奪うたのぢや。

山姫 (時に顔色の變るまで、忽ち勝誇れるとりなりにて) あい、あい、あれ、向うを御覽。お前の前から、今其處へ歩行いて見えるは誰さんえ。それあの琵琶、調子の可いあの響が、お前にも聞えよう。

坊さんや、お前の賤しい悪口は、いつでも人が喝采る内に、裏が蹴へるのを知つてかい。あの神々しい目の光を、坊さんは見得まいね、あの目はね、楽しい舞踊の時のやうに、坊さんの手足なぞは痺れさして了ひますよ。あの方には踏まれては、踏まれる草さへ喜びますよ。山の王様還御だよ、乞食の坊さん嬉しくないの？ あいや、ゆふはいや。

名人の、私の情人がお歸りなのよう。(走り迎へて人目も厭はず、姫、理非衛の腕を抱く。)

鑄鐘師 (繪の如き美しき仕事衣着て、手に一挺の鎧を持ち、姫と手に手を取りつゝ來て、やがて近き、僧を視めて) 是は。能うこそ、能くおいでなさいました。

僧 やれ、懐しや、なう名人殿。扱こそ扱こそおん神の御名は、愈々讃へねば相成らぬ。全く不思議千萬ぢや。

現に私が知つた、過日は、生死も分らぬ怪我人の、疲れ果て、弱り果て、血の氣も失せて蒼ざめて、迎も生られう望みは無しに、臥床に倒れて呻吟いてござつた、あの其の男が、我折れ、何うぞい。

樞の木を見るやうに、脊もすらり立ち、腰が極り、身體と言へば、力で張切れもしさうな様子、然も強さうにそれ、其處に、はて、居るわ、さても立つたわ。不思議ぢやよなう。

人間業では、よもあるまい。いつれはおん神の御力ぢや。大慈大悲、全智全能のおん神が、ふつと一呼吸、あなたの身を、暖めたまへる御慈悲ゆゑに、まッ其の通り、立處に、兩脚で病の床から一足飛び。古の英雄の、ダヴィドのやうに躍廻り、太鼓鳴らいて、おん神を讃美して歌ひ狂ひもして居るげに見ゆるぢやて、なう。

鑄鐘師 仰の通りでございませう、はい。

僧 こなたは其のまゝの奇蹟ぢやよ、不可思議といふのでござる。

鑄鐘師 お上人、けれども又、こゝに慙う云ふことも事實なのでございまして——私は、私のあらゆる感覺を通じて、自分みづから、奇蹟不可思議を行ふことが出来るやうに思はる、——事

でございます。

あ、姫、喉が渴いて在らつしやるであらうと思ふ。お上人に葡萄酒を持つて来て上げますやうに、な。

僧 難有い、がなう、今日はよ、今はさ、其處どころではないのぢやて。

鑄鐘師 何、早く往つて、持つておいで。いや、私が保証ひます。其は其は、結構な葡萄酒でございます。が、然し召飲らぬとならば御心ませ。さあまあ、何うぞお樂に——さて、何からお話を申して可いか。然やう、あの大恥搔きの病氣から、漸う身を免れまして以來、今日の夕方、お上人と慙うして又お目にかゝることに、神様の御心で、兼々お定め置きのやうにも考へられます。

しかし實は、如何はしいこんな仕事場へ、先づ第一番のお客として、貴僧をお迎へ申さうとは、弗に思ひがけない事で、猶更らお出が喜ばしい。

今にはじめぬ事、貴僧が御職掌と、力と、愛とを、御有ちになつて在らつしやるのが、此の御訪問によつて、逾々明かに解りましたから難有いので。私は、貴僧が其の強い腕をお奮ひなさつて、おどかして人を束縛しようとする俗世間の綱をお破りになり、其の上、又神様をお求めなさらう爲に、超然として人間の俗務から脱離なすつたのを認めて居ります。

僧 私も嬉しい。いや其を聞けば、こなたは、相變らず、差支へのない理非衛殿ぢや。山下の麓をめぐつて、喚き立てて居る徒輩は、思ふに違はず虚偽を叫んだ。なう、——こなたが、まるで別の人の様になつたと申して騒ぐが。

鑄鐘師 依然として舊の埴生でございます。しかしお上人、又全く生れかはつた人間のやうでもございます。お聞き下さい。

先づ窓が開く、と神と光明が入り来る。

僧 ほ、う、金玉の言ぢやなう。

鑄鐘師 然やう、私が存じて居ります言葉の中で、極上の金言でございます。

僧 私は最う一等、其上越した名言を知らぬでもなければ、いや、こなたの其も結構ぢやで。

鑄鐘師 處で握手がいたしたい。は、は、は、失禮でございますが。私は鶏と、鶴と、馬の頭に誓ひまして、向後、お上人、貴僧を、神以て私の友人として、私の心にある、春に向うて参る扉を、貴下に廣々と開いて差上げます。

僧 それは何とも可いやうに。何も今にはじまつた事ではないが、なう。是までに度々握手もしたなり、こなた、能く私と云ふものを知抜いてござる筈ぢやが。

鑄鐘師 其は最う、能く貴僧を存じて居ります。恐らく上人を知るものは私と申して宜しい。と

申すのが、既に私が貴僧を知らないので、實は貴僧は友人の假面を冠つて、何か陋劣な心を持つておいでなさるとする、した處で、一向構はん。私には、相變らず、他人に物を恵みたいと思ふ心は失せないのです。

畢竟するに、黄金は何時でも、何處でも、どんな處でも黄金、陋劣な者の心の塵埃の中に於ても、黄金は黄金でございますから。

僧 まあ、宜し。時に名工、理非衛どの、こなた、今耳障りな異變な誓を申されたが、あれは何でござつたか、最う一度聞かして下さい。

鑄鐘師 鶏と、鶴、とでございました。

僧 ふん、次は馬の頭で、あつたぢやの。

鑄鐘師 お待ち下さい、はてな、何うしてあんな考へが私の頭に浮んだらう。今更自分にも解りません。が、歴々と見えますな、恚う——貴僧のお寺の屋根に、それ日の光に輝いて、一番絶頂に鶏の形の風見が立つて居りますのが、また麓の、私の隣の權藏が家の破風の上に、馬の頭が彫つてございますな。是は可しと。それから鶴——は、あ、こりや何でございます、空を飛ぶ鳥の鶴から、ふと思ひついたものと見えます。それや是やが一所になつて、胸へ出た儘を申上げた筈の様に存せられます、は、は、は、いや、そんな事は何うでも宜しい。——さあ、

さあ、葡萄酒が参りました。「健康を祝す」と申す言葉の、就中甚深なる意味を以て、私は、唯今、「我と御僧との健康を祝す」と遣ります。

僧 私は即ち、僧越に感謝の意を表し、且つは又、御病氣全快の健康を、あらためて祝うてなう、御答禮を申上げるぢや。

鑄鐘師 (ふらくと歩行きまはりつ) 然やう、私は全快しました。新に生れかほりました。何を見ても、然う思ひ、然う感ずる。

先づ胸だ。此の胸は、強い、愉快な呼吸をするために、ふつくりと前の方へ膨れて出て、月なら五月、初夏の、強い力が、心の中へ壓迫し來るやに思はれる。

又腕だ。鐵の如くになつた此の腕を見ても、自分の生れかほつたのが感じられる。手だ、此の手が又、鷹の爪にも譬へつべしで、ものない、空中へ、ぬつと是を擲つて見ると、遮るものなさの徒力、他愛なさ、張合なさに、其まゝ、うむと握り返して、何等か創作の力を示す事業を求むること、恰も渴したるが如しである。

お上人、貴僧は私の此園の中の、宮殿を御覽になつたか。

僧 何の事ぢやい、宮殿とは。

鑄鐘師 彼處であります、彼處、それ、是が貴僧、又私自身とともに第二の奇蹟だ。彼方をま

あ見て下さい。

僧 どれか、どれか、何も、私には見えはせぬが、なう。

鑄鐘師 見えぬとおつしやる？ はゝゝゝ、では見せませう。宮殿とは、彼處に在ります、あの樹の事を申すので。

花の咲き満ちたやうな夕雲にもたとへたい、あれなる一樹を申すので。其の昔、日の神フライルが、一度天降つて、梢を宿としたまひしと云ふ。貴僧、彼處へ行つて樹陰に立つて御覽なさい。

快い爽な、深山の風が吹き降す。かと思ふと、ぶんぐと數萬の蜂が、酔へるが如く、あれに咲いた花の、芳ばしい香を吸はうとて群り集ふ。

私は、自分を、丁ど、あの樹と同じものだ、と思ふのであります。曾て其の枝に太陽の神が天降らせたまひし如くに、今また、神フライルは、我が此の靈に宿らせおはして、我が心は一時に、恰も花が開くやうだ。さあ、此の心に花が咲けば、香も匂ふ、其の薫に憧れて、定めて蜂群り來よう……

沈 鐘

僧 さ、さ、もそつと續けて、其の話を、なう、私は喜んで聞いて居るぢやて。はあ、成る程、こなたと不思議な花の咲く樹と同一ぢやの、其處で、可し、思ふ狀誇らつしやい。威張らつし

やいとも、なう。

けれどちや、理非衛どの、花も咲かう、香も薫らうが、其の樹に實が生るか、生るまいかは、おん神の御力でなうては、なう。

鑄鐘師 有仰る通りだ、如何にも其は神の力でございます。

何事も一つとして神の力ではないはない。

二十尋ばかりの谷底へ、私を投げ込んだも神。再び花の咲くやうに、私を起したのも神。其の花の是から實の生る、生らないも、盡く、神の力でありますとも。

貴僧何うぞ、神の力で、此の夏が、平和であるやうお祈り下さい。私の此の心中に生えて居るものは、何しろ、兎に角、枝葉榮える價値があります。實の熟するだけ價はあります。確にある。

實際の處、お上人、今度私の作るものは、それこそ、今まで思ひもつかなかつた、えんぶだごとんと申して可い、最も貴い金屬で鑄ます。自から動き、自から鳴る、古今の靈鐘でございましてな。貝殻のやうな掌を開いて耳の上に當てて居ても、此の鐘だけは音が聞える。眼を閉ちても、此の鐘だけは一つ一つ、龍頭の微細な點々まで、判然と皆見える。眼を閉ちても、お心に留めて、能くお聞き下さい、お上人。

今私が、神の賜物として受けたものは、以前貴僧が、過つて、名人よ、上手よ、と私をお賞め下さつた當時、私自分では、何とも名状しがたいほど煩悶し苦痛して捜し求めた、其の、それ、其のものでございますわ。

今こそ申せ、其の時分は、此奴、名人でも上手でもなく、又幸福でもございませんかつたに、唯今の私こそ、其は二つを兼ねました、幸福なものでございますわ。適れ、名人でございますわ。

僧 他の口で、こなたの事を、名人名工と申すのを、私は喜んで聞いたのぢやが、なう、御自分から、名人と名告らつしやるは珍しい、不思議ぢやて、なう――まあ可い、さて更めて鐘を作ると言はれたが、何處寺の鐘でござるの。

鑄鐘師 否、御寺のために作るのではない。

僧 はあ、すると何、誰に頼まれて作らつしやるの。

鑄鐘師 誰が頼んだ？ 然やうな、彼處の、あの崖の上に轟立した樅の樹に、汝速に崖下へ參つて、勇しく勢よく生え直せ、と命令した其の人から、其の御方から。は、は、は、お上人解りましたか。

いや、眞面目々々。冗談はよして、お上人、貴僧の御建てなされた御寺は、其の一部は腐朽し、

其の一部焼亡したでございませう。で、私は此の山の上に、新なる礎を立てて、然やう、其處で新しい殿堂伽藍を營むために、先づ新なる地盤を造つて、それから、

僧 あゝ、名人、名譽の名工、こなた、私は、なう、こなたと争ひはいたさぬが、一寸念のため、前もつて申して置く。

こなたの言はるゝことと云ふものは、私には聊も解せぬのぢやで。こりや、お互に何か思ひ違へをいたいて居るぢや。他でもない、齒に衣きせず、私の思ふ腹の中をかつさばいて言はうなら、こなたが言ふ、其の鐘は、些とこなたには高價過ぎまいかの、費用が懸り過ぎはせまいかの。

鑄鐘師 そりや貴僧、高價い、尊いは當前。

僧 當前? そんな、其の自鳴鐘が、なう……? 鑄鐘師 え、何とでも勝手な名をおつけなさいさ。

僧 はて、たつた今、御自分口から、自から動き、自から鳴る、とりもなほさず自鳴鐘と言はれたやうに心得るがの。

鑄鐘師 然やう、名は實の賓とか言ひます。二ツ名のあると云ふことはありません。で、然やうなければならぬ名を、私はつけました。正銘まがひのない、唯一不二の名を申し上げた。

僧 其處ぢやが、なう、一體其の高い費用は、誰が手で支拂ひますか。

鑄鐘師 誰が私に費用を拂ふ? 何をおつしやる。お、お上人、お住持。仕事さへ出来すれば、最う其で私は費用を受取つたも同一事、既にした、かな所得でございませう。

幸福に幸福を與へ、報酬に報酬することが出来ますものか。考へても御覽なさい。今度私を作る鐘は、俗世間の所謂報酬や費用を云々するやうな、そんな淺はかなものでないので。

唯今、申した如く、現在も將來も、何時までも自鳴鐘と名告り上げます。ひとりでに鳴る鐘の音は、人の力で撞鳴らすより、音が低いなどと思召すな。お上人、昔から在來りの、如何なる大伽藍の鐘樓に於ても見ることもならぬ、大音響の力を保つて、其の廣大なことを云つば、恰も盛春の雷の轟く如く、霹靂して、雲を敲く、其の餘波は、牧場といはず、原といはず、田といはず野も山も震撼させる。爾く、天地に鳴渡る喇叭の大號令は、ありとあらゆる寺々の提灯鐘を沈黙せしめて、我と歡呼の聲を放つて、新しき光明の誕生したことを、宇宙を透して喧傳するんだ。

さあ然やうなると、あゝ、森羅萬象の母上たる大日輪よ。貴下の子と、我が子とは、共に貴下の乳房に因りて、其の乳酪に育まれる。然れば一旦朽ちて果てる者までも、母上よ、日輪よ、貴下の情の、いや熱き雨露の無盡藏の流

れに誘ひ出されて、新に此處に降誕した貴下の子と、はた我が子とは、其の時よりして、永へに貴下が清き道を歩み進ませたまふを打仰いで、おほみ空をかけて且つ祝ひ、且つ壽くに違ひない。

然も又、青々と今貴下の前に廣く展開せる此の灰色の地球が、嘗て貴下の犠牲となつたと同様、貴下は終には、我が此の身體をも供物となしてお焼きたつた。何を惜まう、我は我が生存の一切を擧げて、うつし身の此の身をば貴下の犠牲に捧げ奉る。——お、光明の太陽よ、赫耀たる日輪よ。

我が花の館の、大理石の室の中から、我が眼を覺すべく始めて叫ばせたまへる雷も貴下なり、

冬枯れの幾月を寂寞として覆ひ包める雲の中から、寶玉の驟雨を降らせたまへるも齊しく貴下の力でおはする。雨の、雨の其の寶玉を拾はうとして千人萬人、人は皆兩の手を差伸ばし、珠玉の魔力に魅せられて、得難き大富貴を身に荷うて各々雀躍して家々に立歸る。……家に歸るや、門々に翻りて其の主人の歸り来るを待侘び居る、絹の旗を手に取つて、日輪の祭早や來よと——渠等日輪の巡拜者は其の祭の日に巡禮せうと——如何に待遠く、待侘びよう。——や、御存じではなかつたかな、お上人、日輪の祭とは、どんな祭だと思ひなされる？ 御僧は

定めし彼の「失はれたる兒」と申す話を御存じだらう。母君にておはす日輪は、某月某日、「失はれたる兒」のために祝の祭を催ほし給ふ。某の月某の日、「失はれたる兒」等は皆、手に手に絹の旗を捧げ持ち、ひらくと風に吹かせつ、我が住む館、花館、此の宮殿をさして、四方から参り集ふと御承知ありたい。摩訶不可思議なる我が自鳴鐘、大靈鐘は、其の時こそ婆々々美妙の音楽を奏で初むる、其の音凄々切々として、聞く者の胸は、一種言ふべからざる、悲しき快樂のために歎歎く、寂しき嬉涙に暮れる。

我が靈鐘は、愈々歌ふ。歌や、夢の如く、幻の如く、いつか忘れられた歌ながら、聞けば、人の故郷の歌、小兒等の愛の歌、仙郷の泉の底より汲まれた歌、何人も知らざるなうして、然も何人も聞いたことのない歌、母親の胎内で聞いた微妙な子守歌のやうな歌であるから、其の歌が始まると、あはれに、なつかしく、悲しく、尊く、時には驚の歎くやう、時には鳩の笑ふやう——聞くものどもの胸の氷は、融然としてはじめてとけて、憎悪も忿懣も、狂暴も悲哀も苦痛も、たゞ、熱い熱い熱い涙となつて、はら／＼と融けて流れる。

其の時こそは、お上人、吾々は走つて、十字架に攀ぢ昇つて、雲雀に並んで、歡泣きに、わつと泣く。

唯見れば十字架の其上には、一度死せる救世主の、大日輪の力に救はれたまひ、手足少々、

動き出でて、やがて永久の若きに還つて、光明赫耀、まばゆく、まばゆく、微笑みながら、五月の中に下り来る。

理非衛、益々熱心の度を高め、やがて、大歡喜をなして語りつけるが、茲に於て感激のあまり、もの言ふ能はず、唯ぐる／＼と廻り歩く。

姫は聞きつゝ、其の言に、酔はされて、偏に其の人戀しさの心迫りて、わな／＼き居たるが、堪へず涙を目に湛へて、鑄鐘師の身近に跪き、矢庭に腕に吻を接くる。

僧は、恐怖の念の益々高まれる態度にて鑄鐘師の物語るを聞きつゝ、言や、終らむとする頃、急に心付いて然も落着きたる様子になり、霎時あつて、鑄鐘師に向ひて説出す。始強ひて爲せる沈着も、平氣も、直ちに破れて、語し、まり、情昂る。

僧 扱こそ、扱こそ、名人殿。こなたが言はれた今の言葉で、目のある村の人達が、安からず申したことに、卵の毛ほども間違ひのないのが今相わかつた。はて困つた、なう。人は知らず、こなたに限つて、然やうな事はよもやと思つた、自鳴鐘……でござるかの、早や其の儀は實さうな、さて困つた。

私が残念さ遺憾さは、兎ても兎ても、口に出しては能う言へぬわ。理非衛どの、なう、高尚らしい理窟は措いて見さつしやい。此の通り、此處に立つて居る、私

はなう、漸との思ひで山奥くんだり参つたぢや。さ、何のために來たと思ふよ。これ、私は何も、こなたが自負の不思議を見よう、奇蹟を聞かうで、物好に参りはせぬぞ。他ならぬ一大事、さし迫つたこなたの厄難、其を救ひたさなればこそぢや。

鑄鐘師 厄難とおつしやいますか、は、あ、私は厄難を持つ身でございませうか知らん。

僧 一廉の男なら、これ目を覺したが可からう、なう、目を、目を。何と、こなた夢を見て居るのぢやが。夢も夢も一通の夢でない、恐しい夢ぢや。

さめての後は、長に盡きぬ苦痛を知らねばならぬ恐しい夢なのぢや。

あ、あ、おん神の御言葉にても、こなたの、其の、目は覺めぬのか！ 既う駄目か、永遠に夢見る人に成り果てたか、淺ましや、埴生、淺ましや、理非衛。

鑄鐘師 そんな事は藥にしたくも考へませんな。

僧 御經には何とある、聖書の御言葉は何と曰ふ、「亡滅びなん人をば、あらかじめ神は盲目となし給ふ。」

鑄鐘師 宜しい。神に於て、然やうな御計畫をなさいますなら、貴僧お制めなさらぬが可い。

沈 鐘 私は寧ろ、盲目と、自分と呼んで見たいくらゐなことだ。は、は、は、天人の歌の如く、清らかな靈氣に充ち、曙の涼しい雲の上にくろりと寢て、解脫

した眼を以て、遙に天上極樂を二呑みにして居るのが、目下の殖生だ。

そりや神様が腹を立つて、私を盲目にする、永遠の暗黒界に投入れたまふくらるの、價値はあります、ありますとも！

僧 先づ、先づ、名人理非衛どの。こなたの其のやうに、雲の上へ飛上つては、私のやうなものには見る目に餘り高過ぎる。

私はたゞの人間ぢや。可いかの、地球をふまへて生きとるものぢや。餘りに高い、幽玄なことは分りやせぬ、そりや分りはせぬよ。

けれどもぢや、なう、早や怒うなつた今のこなたが、知らぬことを、一ツ此の僧が存じて居るぢや。別でもない、正邪善悪は何ぞ、と云ふ辨別、さそぢやが、何ぢや。

鑄鐘師 極樂では、アダムがそんなことは知らないと言つて居ましたつけ。

僧 それは利口と申すもので、意味もない、雑言ぢや。そんな事では、なか／＼何うして、こなたの其の破廉恥が、掩ひ隠される事ではない。あ、困つた、なう。此の様子では氣の毒ぢやが、言ふまいことも言はねばならぬぞ。いや、理非衛どの、御名人、こなた女房持ぢや、子供も有るぞ、確乎さつしやい。

鑄鐘師 其れがどうかしましたかな。

僧 こなたはおん神の御寺を避けて、妖魔の山へ入つたわ。月日の立つは早いもの雪が降つても家へは歸らぬ。内方は憧れ暮らして、こなたの身のみ案じ煩ひ、袖の時雨に濡れぬ日は無く、子供たち二人は、母様の涙を飲んで、生きて居るのを存せぬか。

鑄鐘師 (とばかり長く沈黙して、これに動かされたかの趣なりしが) お上人、其の子供の涙を、乾かして遣りますことが私に出来さへすれば、喜んでしませうけれども、唯今の處私には、其が出来ないのでございます。

女房子供の、憂を忘れさせます事は、私の柄にはないのでございます。

はい、全身凡てが愛となり、愛に因つて活返つて居る私、溢る、ばかりの富があつても、これを女房の空虚の杯に注いで遣ることは致し悪い。

何故なら、お上人、私の持つてる酒は、女房に取つて酔になります。苦味くなり、また毒になる。

およそ、此の、人間づれの指のかはりに、鷹の、爪を有つものが、病める兒等の涙の流れる頬邊を撫でることが出来ませうか。私の此の鋭い立派な鷹の爪で、是非がない、あ、仕方がない。

僧 それ／＼其が狂氣ぢや、と云ふ事ぢや、ぢやに因つて言はねばならぬ。狂氣も狂氣、破廉恥

狂ぢやの、言語道斷。そこな名人、法師は茲に立つて居るぞよ。こなたの心の恐しさ、慘酷らしさに、震へながら立つて居るぞよ。

こゝな悪魔めが！ なう、勿體なや、我が、おん神の御相をば、おのれが其の醜い顔で作りをる、したゝかな悪戯をしはじめたのが、不思議にも因業にも、地獄流に成就したのぢや。前代未聞の曲事。

こなたが得意顔に饒舌らつしやる、其の自鳴鐘とやら申すものこそ、——あはれ神も照覽あれ、——天魔の所爲に相違ないとは、理非衛よ、こなたは心付かぬか。

恐しや、實に、此の度の悪業こそは、古今に聞かぬ一大事、悪魔世にあつて以來、渠等の頭が工夫した最も大なる、罪惡の第一ぢや。

私は、これ、悪魔の殿堂が、今此の時に、成就されむする勢を見ようよりは、一層の事、其の昔、埃及の神が人間に下し給ひしと傳へ説ふ、疫癘悪病業病の目のあたり基督教徒の上へ降りかゝつて来る方が、未だしも増しぢやと思ふぞなう。

理非衛どの、何うぢや今一度、正氣に返つて、基督の信者とならぬか。唯今なれば未だ遅うない。え、此の淫婦の、あばずれの、魔女を追ひ出さつしやい。こな、妖婦を放逐さつしやい！

する時んば、従うて、諸々の妖怪變化は、唯一撃の下に消滅するぢや、こなたは救はれようぞよ。

鑄鐘師 以ての外な！ 私が大怪我で打倒れて、死にかゝつて居る處を、此の姫がおいであつて、扶起して、病も熱もすつかりなくして下さつたんだ。

僧 かやうなものに、なほして貰ふほどならば、なう、死んだ方が遙に増ぢやが。

鑄鐘師 そりや貴僧の御考へ。はて、何と御考へなされうと、其は御隨意。

が、私は、其のお庇で新生活をはじめました。其新しい生命を、慫うして生きて居ます。だから、私の生ある中は、命あらむ限り、呼吸ある限り、此の女を大事にして、難有がるのでございませよ。

僧 然うか、ふむ然うか、——これまでぢや、最う此の上は何も云ふまい、言はぬぞよ。こなたは首まで悪魔の中へ突込んだわ。こなたの地獄は、魅せられた目に天國の如く飾られて、なう、淺ましや其の詐りの天國が、こなたを迷はし抜いて居る。——最う言ふまい、何も申さぬ。

が唯一ツ、およそ、悪魔あつて住む處には、邪宗信徒の住む處と齊しく、其の死骸を焼き亡ぼすため積んだ薪木が山のやうぢや、大繁昌ぢや、今日となく明日となく、いつくまでも大繁

昌ぢや、事を、なう、是だけを能く覺えて置つしやい、忘れなよ。

理非衛どの古の羅馬の人の格言を覚えてござるか。「民の聲は神の聲なり。」

祕密的で邪宗的な、こなたの舉動、行ふ業は、最早や隠しおほせぬわ。噂は風に擴がつて、誰とて知らぬものはなく、人々は戦き恐れて、遂にはこなたを憎まぬものは、一人も天下に無くなる。さする時は、其の勢、恐しい一揆の騒動、遠からず起らうする、のみならずぢや、我々のおん神を、こなたの爲に汚されたと云ふ思から、おん神の仇許すまじ、と徒黨を結んで、こねなる自鳴鐘の工場を襲撃つて、微塵容赦も會釋もない、狂ひ暴れるは必定ぢやぞよ。

鑄鐘師

(少時緘黙の後泰然として口を開き)

フム、私の言ふことも、お聞きなさい、お上人、お

言ではあるが、びくともしはせん。

早い話が、私が冷酒の罎を提げて、飢ゑ渴ゑた奴の前へ出向くとする。時に飢ゑたる奴が、矢庭に私の手から冷酒の其の罎、杯までも叩き落す。落したところで、其の飢ゑたのは、皆渠等の心からからだ、意志に因つてだ、また恐らく渠等の運命。私の關り知つた事ぢや固より無い。私は飢ゑては居らん、十分に飲み且つ啖うて居る。で、構はない。

しかし自から己を欺ける輩が、何等罪のない酌人、——其の場合私はまさしく酌人——に對して、無暗に、怒を含んで、盲目滅法に暴れ廻る。丁ど暗黒な泥濘が、私の心の光明に向つ

て、抵抗したり、其の泥で汚しなどするやうな場合には、殖生理非衛之に在りだ。お上人、容赦なく、我は我が欲する處、能くする處、爲得る處を、上段に振冠つて、渠等の頭上へ打下す。從來私は、度々鐘を破壊したことがある、腕に覺えの鐵鎚だ。

まッ其の通り凡俗どもが寄つて集つて、傲慢、増長、片意地頑愚、ありとあらゆる悪性、胸くそで捏ち上げて、叩けば愚と云ふ音が出る、渠等の其の鐘を見かけ、大鐵鎚を額にかざして、名にし負ふ此の名家の一撃、微塵に碎いて御覽に入れよう。

僧 まゝにさつしやい、最うおさらばぢや。餘りの事に、言ひたい事も早や得申さぬ。

こなたの罪の、狂人草の根を斷つことは、如何なる人にも最う叶はぬぞ。

おん神よ、あはれ理非衛の身に、此の上ともに恙あらせ給ふなよ。

待て、今、別れに、なほ一ツ申したへる、餘の儀でない、後悔と言ふ事ぢや。後悔……な。時は何時ぞ、某の月、某の日、其の方が夢に酔へる只中に、後悔の矢一ツ來つて、其の方が心の臓を、まさしく射貫く事があらう。

其の時に、其の方は、生きもやらず、死にもやらず、其の方の身と、世界と、神と、はた、其の方の作れる鐘と、其の他一切のものを、其の方は必ず呪詛ふであらう、然るほどならば、其の方、此の僧を思ひ浮べよ。

鑄鐘師 和尚さん、和尚さん、そんな威嚇を言つて可恐しがらせようたつて、何だつて此方は上は手だ。所詮あなたの思ふやうにはなりはしません。

今おつしやつたやうな事が眞個にありますものか。お好みの矢も飛んで来い。私は私で十分身體を守護して居る。そんな矢は此の身體に、擦り傷だつて負はせやしない。あの谷底を懐しがつて、今も湖水の——深みに沈んで居る、古鐘が、再び鳴響きなんぞ、しない事、するもんか、あつは、は、は、は。

僧 否、否、名人、其の鐘こそ、必ず再び鳴り響くぞ。其の時忘れず法師が言に思ひ當れよ。

第四齣

山中、荒廢したる硝子製造所、小屋のかゝり第三齣に同一。水晶を削れる如き右手の岩壁に洞の入口ありて、山の洞窟に通ずる間、青苔滑なる室となる。これを直ちに使用したる細工場の左の隅に、鞆あり。上に煙突を備へたる、暗き中に、鍛冶の吹鞆場、嚴かに顯れたるに、赤き火ひらくと燃えつゝあり。火爐の傍に、大なる鐵砧を据う。鑄鐘師「理非衛」時に、目覺しき鉗子を構へて、件の鐵砧にのせたる熱鐵、打たば正に火の逆らむする、火の玉の如きを無手と扱む。

一寸法師六個、山童の奇しき装して、漂々として渠の周圍を取巻く。

一番の侏儒は、鑄鐘師に手を添へて、影の形に添へる如く、ともに鉗子を扱ふ。

二番の侏儒は、向うに大鐵鎚を差上げて、鐵砧なる其の熱鐵を打たんす身構。

三番の侏儒は、鞆の火を吹き、たゝらを揺る。

四番の侏儒は、棒立になり、固唾をのんで、他のものどもの所業を凝視む。

五番の侏儒は、驚破と言はばの氣構へなり。棍棒を手にして待つ體。

六番の侏儒一個、一段高き岩の座に、のつと坐る、これは頭に輝ける冠被たり。

鍊れる、鑄たる、鐵材のあまた、嚴窟の内に神祕なる蜘蛛の巢かと横はる。

鑄鐘師 ウ、撃て、撃てい。やあ腕ツ節の萎えるまで撃てと云ふに、何を此奴等、めそく泣面をかけばとて、びくともするやうな俺ぢやない。いけするい畜生めら。丁と吩咐けた鎚の數を撃ちをらんと、見ろ、此の鞆の火で、山猫の髯、焼消すぞ。

二の侏儒 (其のまゝ、鐵鎚をトカリと投出す。)

鑄鐘師 あれだ、案の定、言はぬ事か。待て、此の小僧、何うするか、見ろ、俺が今怒鳴つたのを、洒落や串戲だと思ふんだな。

ものも言はせず、引捕へて、爐の上に無手と釣る。釣られて二の侏儒跳き叫ぶ。これを見た

る三の侏儒は、吃驚敗亡慌しく、働きはじむ。

一の侏儒 親方さま、此の通り、己が手は木の棒に成りえして、何とも、はあ働けぬでえ。

鑄鐘師 今におのれの番だぞ、此奴、(二の侏儒に打向ひ)もう一度働か。さあ、小僧、どうだ。

二の侏儒 (手の裏かへして、夥度畏り、急ぎ鐵鎚を拾ひ上げて、懸命に撃ちはじむる。)

鑄鐘師 ちよッ、手のかゝる、痲癩づら、些ども目の離せない畜生どもだ。(鉗子の柄を取直し

て)例ひ天下の名鍛冶でも、こんな厄難弟子を會釋して使つた段には、鐵で圓い丸一個も製作

へられない。漸つと一撃向う鎚を打つたわ、可いわで、黙つて待てば、二撃目は日が暮れる怠

け方をする。

恁の如き、名譽一代の傑作には、必ず件うてなければならん、百千の大仕事に、一ツ一ツ信仰

信心を持たせようなどとは、此奴等に向つて思ひも寄らない事だから。

撃たんのか、撃て、撃てい。撃てと言へば。鐵と云ふものはな、焔つてる内曲るんだ、冷えた

鐵は動きが取れん。何をして居る。

一の侏儒 (ファイと手を出し、熱鐵を取つて手以て引曲げむと試みつ)己はよ、一層のくされ、

此の手で埒をあげえして、鐵どもさ、勝手な形にしたいたあ。

鑄鐘師 膽の潰れた馬鹿を言ふ。其の手を灰にしたいのか。然う俺の命を肯かないで、此の仕事

は何時出来る。

今此の處に制作するは、天にも轟く大建築。遮るものなき霄の只中に、日輪近く、其の柱を建

てようと云ふ、大願を成就するには、實際、お前達の力を借りなければ成らんぢやないか、

こゝを熟く考へろ。

一の侏儒 鐵さあの型は、手で出来て、使つた手は息災でえ、そんだがえ、些んばあかり、もの

疲れて、手の何處やらが死にくさつた。いや、はあ、其も最う大丈夫でえ。

鑄鐘師 愚圖々々言はず池へ飛込め。あの肉蝦魔が、緑の藻で、其の指を冷してくれう。(第二の

侏儒に)最う、可い、怠惰ものめ、難有い御苦勞様を食ふが可い。俺は俺で、出来上つたもの

に對して、熟く鑑賞された上、頭として受けべき報酬を、唯一人で享取るまでよ。

どつかと腰掛け、其處に新に鍛はれたる鐵材を取つて、熟と見て、

出来た、申分のない出来たわ。思へば苦しい時間の結果が、天の深切な力に因つて、勝利の冠

と成つて、自分に授けてくれたんだ。あ、嬉しい、また、喜んで可い譯だ。海鼠の中から眞

珠が生れ、混沌たる境よりして吾等が爲に無ければならない寶石が生れるんだ、喜ばずに居ら

れるものか。さあ、これから、此の、俯して眞直に、仰いで眞直に、上と下と圓滿具足して、

共に正しきものを取つて、作全體の末だ足りん處を鑄合せよう。

時に第四の侏儒、低き椅子に飛乗りながら、何事やらむ鑄鐘師の耳に囁き言ふ。
黙れ、魔物。もう一度言つて見ろ、手も足も打縛つて、口から鐵棒を詰め込むから、汝。

侏儒ちやつと遁げる。

どんな斷片だつて、全體に取れば、用に立たん僕ぢやない、其を、何が氣に入らん、氣に入らんよ。おい、物を聞かれたら返事をしろ。俺は今、唯た今ほど嬉しいことはつひに覺えん。此の手と、心と、慙くまで調和したことは曾てない。

それに汝は、何を不足で文句を言ふ。これ、俺は棟梁だ、誰だと思ふ。不作法極まる。此の上何うしろと吐す。さ、此處へ來い、ずつと來て、汝の考へて居ることを明白に饒舌つて見ろ。明白に。

侏儒、寄り來り、又囁く。

鑄鐘師（吐息して、蒼くなるまで憤りつ、身を起し行きて、其の鍊りたる鐵を、憂然と鐵砧の上に置き、）

と、どうするものが、仕事は惡魔にくれツ了へ。所詮、俺は、馬鈴薯を作つて、蕪菁を植ゑて、食つて、飲んで、寝て、死ぬまでだ。

五の侏儒

うそく鐵砧にうかッひ寄る。

あ、あ、退けく、來ては成らん、觸つちや不可ん、何を、猿眼で何を見詰める。氣味の悪い、其の面はよ、青と赤と染分だ。え、頭の髪が逆立つて目には破壊の星が光る。あ、堪らな。汝に呪はれて、勝ち得ぬもの、汝を攫み挫ぐことを仕得ないものは——汝——人捕鬼——汝に向つて爲すべき事唯一つ。則ち此のま、頭を下げて、汝の手にする棍棒の情の一撃を待つより他仕方がないと聞いて居る、あ、忌はしい。

第五の侏儒、殺氣を示して、かの携へたる棍棒以て、鐵砧にのせたる鐵の細工を、めつたやたらに打つ。

鑄鐘師

切齒して、

止せ、止せ。作るも砕くも、今夜は最う是切だ。最う休止だ。何も彼も仕事は措いて、一寸法師等、往つ了へ、往つ了へ。

朝が來て新しい力を與へてくれたら——朝の力をくれれば可いが——更めて汝等を又呼ぼう。往つ了へ、用は無い、厭々される仕事は御免だ、眞平だ。其處の輔番の火吹木菟、汝も然うだ、今日は新しい鐵を焔しても無駄だから、一所に歸れ。

頭に冠の輝く侏儒のみ残りて、あとの小魔、岩の門を皆消ゆる。

さあ、汝、これ、冠、今朝から唯た一度口を利いた畜生、何故其處に居坐つて、何を待つて行かないか。今日は固より、明日になつても物を言ふな、決して饒舌る事を許さんぞ。可いか、此の命令を背くが萬一、立處に罰を當る。然う思へ。忘れるな。

あ、何にしろ、此の大作は成就しようか。何時になつたら完成しよう。疲れた、俺は疲れたよ。時も丁ど夕暮だ。あ、夕暮め、厭な奴だ、汝と云ふものは、晝からも夜からも眞中へ推詰められて、夜でもなし晝でもない。其處で汝は俺の手から鐵鎚を奪去つた。ぢやあ、休息に肝心な、睡らせてくれるかと思へば、其もさせない。餘裕の無い一圖な心は、偏に唯、時の來るのを待ちに待つ。待ちながら然もどうして待たうと言ふ方角もなく、茫平待つより術はない。此の通り、堪へ難い胸の苦痛を抱きながら、向うから來る新しい日待つて居る外はないと見える。あ、それ、太陽は紅紫の夕雲で其身の周圍を包み隠して、次第に、次第に、何かの底へ沈んで行く。吾等を此處に棄て置いて……吾等、光明に馴れた身は、唯々あとに震へるばかり、戦く外は仕方がない。仕方がない見すばらしい者に成つて、暗黒な夜の手に、わが此の身體を委せねばならないのである。何故ではない、吾等は朝の王にして夜の乞食に相違はないから、言ふまでもなく、眠る我が身の蒲團は襪襪だ。

鑄鐘師は臥床の上に仰ぎ倒れて、其の雙の目を睜きながら、現に夢見て横はる。眞白き霧、開きたる戸口を推入る。

其の霧の消ゆると共に、池の精水槽の縁の上に現れ出づ。

池の精　くおらつくす、ぶれけけつきす。蛆先生、鐵屑名人、沼草べつたりの屋の内に就眠りけつかつた。こな又侏儒の妖物類は、う、鼠色な雲となつて、山の其處等を匍匐廻るか。孰もうむとも口へは出さないで、拳を舉げて、狀で、威嚇す、又物凄う兩腕組むが、這奴には知れまい。聞えませまい。

丈低な樅の樹めが、びよろ／＼歎息する聲も聞かぬ。な、大古の松の翁の、針の葉尖がぶるぶるして、魔婦が舌なめする恐しい口笛めいた、幽な聲、——牡鷄女郎が羽鼓き同然、翁が枝で翁を打つては、其針の葉の身震ひする、物恐しい聲さへが寢聲には聞えぬぢや。おう／＼、此奴、早や寒さがこたへて、びく／＼と顫へてけつがる、ふん、早や冬の恐しさを骨の髓に感じてけちがる——で、けつがりながら、眠り乍ら、不便や、一呼吸も吐き得ずに、びく／＼びくびく晝の仕事に跳き居るがい。くわつ、まくり措け。徒骨折だ。う、何故と吐かせ、これ、汝は神と角力をとるわ。神は、さ一番來い、と汝をお呼出しなされたものが、今は早やお見限り遊ばされた。お見限りに預りをつたが。誰も怨むな、汝が所爲だ、皆早や汝が弱いたためだ。

う、あの状はよ、其の體は。

鑄鐘師、轉輓反側し、且つ呻吟く。

げらげらげら、汝が命懸けの仕事をも、思切りものになつた。可愍や、汝は、禍を福に、御罰をお賞にでんぐりかへす幸福を、神から引奪り損ねた餓鬼ぢやが。それ見い、汝が身は汚點斑、うは、蝦蟇疣の鮫膚見をれ、其の又衣服は血で光る。血で光るがいや。泣けばとて、吠えればとて、其の血を洗ふ洗濯婦は神代以來來はせぬが。洗濯婦の來ぬかはりに、見をれ、色の黒い魔の者等が、岨ともいはず、谷とも言はず、汝を獵つてくりよ、と支度を調べ、犇々と集うたぞ。寄せ合うたぞ。何も知らぬか、知らぬか、知らずに居くされ。今に見ろ、獵犬の吠える聲が汝の耳を抉らうにな。また獵犬の連中が、悪く此の獸知り居るわ。そればかりか、霧の入道大入道は、透通つた空の中に、黒雲の城を裝上げ、恐ろしげな塔、凄まじい大きな壁を、築立て、築立て、高く留まつた、汝の此の頂目懸けて、づづづ推し來る、寄せて來る。うう——汝と汝の其の仕事と、あらゆるものを壓殺しに。

鑄鐘師

惡魔が責める、助けてくれ、う、む、朗。

池の精 姫は、汝の聲を聞かう、來もせうが、け、ら、け、ら、け、ら、汝を能う助けはせぬが。姫は古のフライヤで、汝古のバルデルでもな、たとひ汝が汝の箭筒に、太陽の矢を満たいて持たう

か、其の矢放いて、一矢も狙をはづすまいが、汝は結局斃死る運ぢや、何と肉蝦蟇の御經を聴くか。

一つの鐘かの、湖に、

大石小石の真中に。

其の鐘、上にと登る、

天の光の照すを望んで。

鱗めらが泳いで出入る。

髪が緑の、我が末の娘は、

恐々、遠くを弓形に、鐘の外を廻つて、

悲しや、つらや、と時々泣くぢや。

世にも希有な聲出して、其鐘がぐづるに因つてぢや。

宛然よ、血が、鐘の口填めた工合に。

鐘は動く、鐘揺る、段々に鐘、地底を離る、。

お、聴て、其鐘の音、耳に、あ、響けば汝は、……

びん、ぼうん！

神は汝の夢を醒すわ。

びん、ぼうん！

苦しく、重く、

無常は鐘に籠ると思へ。

びん、ぼうん！

コナ奴の夢覺せや、おん神。

池の精。

水に沈み、姿を消す。

鑄鐘師 助ける。助けて、夢の悪魔が責めます。助けてくれ。(目を覺して)何處に、俺は、何處に私は、……(頻に目を招り、うろくあたりを見廻し)誰か居る。此處に、居るか。

山姫 (戸の中に姿立出づる) 私？ 呼びましたか？

鑄鐘師 呼んだとも、来て、傍へ来て、手を此の額に載せておくれ、お、然うだ。

お前の髪、お前の胸……お前を感じないぢや片時居られん。此方へ、此方へ、然う……もつと、もつと傍へ寄つて。

お前は爽快な森の氣と、萬年草の香を持つて来てくれる。さあ、接吻を、接吻を。

山姫 まあ、何うかしたの、貴郎、私の愛人。

鑄鐘師 何、何うもしない……何だか譯は知らんがね。多分此處に寝て凍えたらしい——其の蒲團をお着せ。——何故か氣落がして、力が抜けて、動悸も疲れるまで、ぐつたりしたなあ。其處へ憑込んで黒鬼が襲つて来た。其の鬼どもの犠牲になつた。衆鬼私を苦めて、絞殺さうとするではないか……が、最う治つた、最う何ともない。最愛兒、俺は又確乎した！ いまに来るぞ！ 畜生ども。

山姫 何が、ねえ？

鑄鐘師 敵よ！

山姫 敵つて、——どんな？

鑄鐘師 いや、もう沙汰の限りの奴等が、競つて来る、擧つて来る、うよく来る。が、私は平時の通り、此の脚で堅固に立つ。たとひ、渠等、狼のやうな臆病ものが、此の寝首を搔かうとしたつて、決してびくともするんではない。

山姫 熱が出たやうね、貴郎。

鑄鐘師 然う言へば少し寒氣がする。それだつて高が知れてる、一つ抱いて、緊めつけてくれると可いな。

山姫 お、私の愛人、私の愛人！

鑄鐘師 時に、唯一つ返事をして下さい、お嬢や、貴女は私を信じて居るかね。

山姫 バルデル、太陽の益良雄、青い人！此の純緑色の目の上に、弓形になつて居る、白い眉毛を接吻するほど、私は貴郎に、……私は貴郎に、……

——無言——

鑄鐘師 諾……果して私は、それだらうかね、古英雄バルデルの如しであらうか。何うぞ、自分に、それを確に然うだ、と思へるやうにして貰ひたいなあ。自分に、其が知れるやうにして欲しい。姫、願はくは私の心に崇高なる藝術の陶酔を——仕事をすることに、必ずなくてはならんと思ふ——陶酔心地にして欲しい。

何故だつて、私の此の手が、鉗子や鋏を取つて、撓まず倦まず、働かねばならない時、鑿を使ふ時、大理石を砕く時、あれにも躓き、これにも轉ぶ時、折角の努力ととも、水の泡ともなればなる、そんな時には其陶酔も覺め、自信も失せて、胸は切る、目は疲れる、ト心に描いて手に取るやうな、大切な模型は、幾度となく、何處かへ消える。

天上界の贈物——絶えず太陽の香を放つて、絞釘一本ない、天衣無縫の贈物を、たゞき大工の日傭仕事と墮落させぬやう勤め勵むは、一方ならぬ困苦の業よ。

さればこそ、得て時々は、信仰さへも一所に遁げて捕まらん。時には自ら、自分が欺かれた思ひがする、此の立場に踏張つて、成就するための苦痛を、投出してしまひたくなる。誘惑に従ひたくなる。——成就する苦痛は、勝利の凱歌と相並んで、一日、清く朗なる神の日に産まれるやうに、私の腹に宿つて居ながら、産むに産まれず墮胎もならん。

が、——まだ、まだ、私の此一身の犠牲から、天をさして立登る、一條、細いが眞直な煙は消えない。處が、怪い手が出て来ては、上から、其の煙を壓潰し、壓潰さうとする、爲せじと擗く、が怪しい手の方が遣附けさうだ。其の時々は、情なくも、尊い法衣が、此肩を迂り落ちる——脱けて落ちる、ね、私が自分で脱ぐのぢやない——あ、天が下に於て、比類なく高い所に置かれた自分は、其の時こそ斷念めて、聖の山から、とぼくと降りねばならない。

ま、ま、まあ可い。そんな事は、まあ可い。可いから松明を持つておいで、光明をお寄越し。なあ、魔界のお嬢、お前技倆を見せないか。お前の酒が貰ひたい。ま、よ、世間で言ふ通り、一寸前は暗と行れ。果報は寝て待てだ。二人で凡俗の眞似をして、一時の幸福を、大膽な勇氣で掴まうよ。引摺んで、無理算段の暢氣で以て、死ぬまで暮すとしようぢやないか。

爲ようことなしの怠惰だが、まさか折助根性の其の日暮しの棄ばちよりは、増だらう。ずつともつと、愉快な生命と生活と、遙に偉大なる權利で以て、二人の閑を無駄なしに樂まう。先づ

何より音楽だね、何か、お歌ひ。

山姫 お聞きなさい、私はね、山を越え、峰を飛んで、駈け廻る。風の中では飜々と蜘蛛の園のやうに狂ふ。またあの土蜂を見るやうに、ふらく／＼ふらく／＼蔓から蔓を憧れ行く。そして皆樹、皆、花、皆、草、皆、苔、石竹から、白頭翁草から、釣鐘草から、皆から、堅い誓を取つて置いたの。其の誓は、あの、貴郎には決して悪いことしないかね、然う言つて誓はせました。あ、然う然う、黒鬼ね、あの意地の悪い黒い悪魔、貴郎とは一番一番仲の悪い、あの魔性だつて——貴郎は白い人、貴郎は白い人、——其の貴郎には、決して死の矢は放せませんよ。鑄鐘師 死の矢、無常の弓を切つて放す死の矢とはどんな矢だね？ あ、待てよ、私は其の化物を知つて居る。然うだ、然うだ、何時だつて、法衣を着た其の化物が此處へ来たよ。此處へ来て、威嚇すやうな手つきをして、此の心臓の下を射貫く矢の話をした奴があつた——誰が、誰が、其の矢を弓から放す？

山姫 誰も放しはしませんよ。私の愛人、誰が、まあ？ 貴郎は矢なんか立たない方よ、——私は言ひます、——矢が立たない。貴下はね、而してね、唯あの、目で合圖をなされば可いの、額いてさへ在らつしやれば、其で可いの。然うするとね、優しい、種々の物の音が、煙のやうに流れて出て、貴郎をふうはり包みますよ。あの、丁ど、音を調べる壁のやうに、貴郎の身體

を取り巻きます。人間が呼ぶ聲、鐘の響き、火の神ロキイの意地悪な魔法だつて、其の壁から抜けては出られない。貴郎はね、唯一寸手で以て、私に合圖をして御覽なさい。瞬をする間に、高い、高い、岩の大廣間に圓い天井まで附いて出来るの。ね、一寸法師、山男は、唯々と行列して来て、お膳立やら、壁床の飾をするやら。……でもね、山育ちのおばけたちの、亂暴が蔓つて、此處等充滿目に餘つたら、可いわ、二人して、すぐあの巨怪物の霜のやうな息の來ない、地の裡へ遁げるから。穴藏のお座敷つたら、其は其は、千の、萬の、蠟燭で照されて、綺麗つたら、……

鑄鐘師 お待ち、其は今は見合せよう。何うして宴會やお祭りどころの騒ぎなものか。私の作品が差當り、大不祭に、沈黙に、城址同様な有様で、やがて作其の物が、自ら歡呼の聲を放つて祭の中の祭らしい實を擧げる時を待構へて居る間は、眞個の處、宴會や祭は私には用がない。恙う言ふ内にも、山の上へ登らんければならん、ぐん／＼登つて、切つても切れない縁の深い、建築物を観なけりやならん。然うだ、松明を取つてくれ、さあ、行く先を照しておくれ。急ぐ、早く!! 心が急ぐ。今にも名状すべからざる無数の敵が、切尖揃へて、押寄せさうな其處等の氣勢だ! 其に又、あの建物、其の基礎が一個所、自分でも出來なために、氣が怯ける大事の場合だ。名工の私よ、やあ確乎行れ。酒に耽るかはりに大努力をしなけりやならん。何故

と言へ、凡そ成就なるものは、名人が經營慘憺の結實であるんだから。制作成就の曉を見い。それ、鑛に、石に、鐵に、象牙に、消行く終の幽な音にまでも、神祕の奇蹟が、歴然と顯れ、聞え、一齊に勝利の凱歌を奏でて、久遠の世までも中空に聳え立つ。其ほどのものであるだけ、其の未成品たるに當つては、呪詛はれる事も亦夥しい。尤も今の私等に呪詛は何の力もない、が嘲笑をされるが癪だ。呪詛が效なく、嘲笑になつたのも決して快いものではないから、然うだ。(づか／＼と往かむとして戸の口にて立留まり)お嬢、まあ、何だつて立つて居る。此方へおいで、此方へおいで。然う、茫乎して居るものではない。は、あ、分つた、私はお前を泣かせたんかな。

山姫 否え、否えし

鑄鐘師 何うしたと言ふのだらう。

山姫 可いの。私何うもしませんよ。

鑄鐘師 あ、お前は氣の毒だな。其のお前のすねる譯は、私にちやんと分つて居る。ね、子供心の心と言ふものは、自分の兩手で、五色の蝶々を捕へる、捕へて置いて、自分の其の可愛い者を、莞爾しい／＼殺してしまふ、と同一事、今の私は、其のあはれな蝶々以上の果敢なさんだ。山姫 まあ、私？ ぢや私は、其の子供より上のものには見えませんか。

鑄鐘師 あやまつた。いや、確にお前は夫れ以上の者だつた。若しか其を忘れたら、私は、生存の意義と光榮を一所になくすると同然だなあ、は、は、は、。此處へおいで、お前の目の艶、其の光の中に露ふ露は、やあ今與へた悲哀を、お、歴々と示せて居る。悪かつた、泣かせたのは此の憎い口よ、私ではない、私ぢやないよ。何の私の内心は、愛より外に何を又知つて居よう。まあ、おいで、そんなに、むづかるものではない。お前は豪いのではないか、新しい遊戯(新事業)に私を鍛へ上げた人ではないか。空つぽな私の手も、お陰で、黄金を以て充たされたんだよ。ならこそ慙うやつて骰子を投げて、神と手柄を争ふばかりの大勇猛を感じたのだ。今でさへ、私は猶ほお前の賜物の實に天地無盡藏である事を感じて居る。お前の謎見るが如き美を感じ得る事の出来得るまでには、お庇で成つた。が驚きながらも、其の美しさの不可解を會得しようと思ふ時、自分は、苦痛にも近い身體、歡樂にも遠からざる身體らしく思はれる。いや、まあ、先へ立つて、前途を燦と照して下さい。

森の精 (戸の外にて叫ぶ) ほるとりお!!

のんぼり來う、昇つて來う。御連中、何を愚圖々々。「村人等をさして云ふなり」お太陽の御殿「鑄鐘師の建物を云ふ」はな、ぼう／＼火事で、めら焼けて、追つけ灰ぢや、はいさほうぢや。進め、和尚殿、進め、石齷玉御先生「床屋」。藁から瀝青から焚附束まで、放火の支度、此の通

り。さつさと来て焼け、焼きに來い。焼いて了やれ、御一統。扱て早や棟梁の理非衛事は、魔もの娘と口押つけて、しだらごさなく眠つたわぢや、風の吹くも御存じない。さて時節到來、此の期を脱るな、脱るなやあ。

鑄鐘師 何だ、喰意地の張つた杜鵑が大きな櫻の實を貪り呑んで、咽喉に詰らせた時の聲、其のまゝと云ふ聲だ。夜中とも言はず、霧の中から、汝、何を吠えてる、馬鹿々々しい。妖物、用心をしないで見る……

森の精 ほう、ほう、用心と御意あるは、きこうの前を憚れとかな。

鑄鐘師 うむ、固よりぢや、俺を憚れ、殖生の前を謹めと言ふんだ。

薄汚い山羊骨親仁、嚙、嚙言の音を止めないと、鼻端の鬚を掴むぞ。何のおのれら、取片附けるに隙が入るか。しかし、汝にも、俺の名人である事が分つた上、飼馴らされて髯でも剃つて發心するなら、人間の慈悲ぢや、まさか汝を今の其の淺ましい身體にはして置くまい。何の道何時か一度は、腹のふくれた山羊の先生、俺の工夫にならねばならん。——何、厭だ、うむ、不承知かして嘶き居る。澤山吠えろ。それ茲に組ほどな鐵砧があるのが見えんか、此の俺の鐵鎚が一寸でも動くが最後、き様の身體は胴からはじめて、襦袢のやうに、ぐしやぐしと挫けるぞ。

森の精 (ぐるりと背を向け、鑄鐘師に臀を叩いて) ばあ、あかんべい。天に御座ある、山羊明神も照覽あれ、其の手を頂く髯ではない。來るか來せい。それ、腕伸いて撲つて見い。今はじまつた事ではないわ。これまでも、つひぞある事、一概ものの狂者どもが、信心のとんがり刃、ヒヤリとする鋭い劍が、幾度も此の髯をお見舞なされた。曳！と打つわ、ト應へるわい。頸筋がむすくして、擦癢いと此の方が思ふ時は、疾く早や先方様の劍の方が、折へし折れて、カラリ寸断。何と聞いたか、聞えたか、ほう。きこうが鐵砧の上とても先づ御多分には漏申さず、右同断にござの候。分つたか、分らぬか。早い處、きこうの鍊に鍊り鍛へた鐵が、粘土同然と云ふ事ぢや。おつと撲はすか、髯を撲るか。いや、此の方を打つきこう御吹聴の鐵鎚かな、一寸此の身體に觸ると思へ、と見る間に、何と、されば其の事、雌牛の腫物と御同様、ぶしゆ、ぶしゆツと崩れて、其處等一面、赤錆の錆だらけぢや。

鑄鐘師 お、覺えて居れ、瘤癩癩、憎くき妖怪。おのれ、例ひ、年を古る西の森ほど劫を経た怪物にもせよ、おのれ例ひ、其の力が、其の口ほどに強くもあれ、俺が鐵鎖に繋がれば、否應あるか。木拾ひ、水汲み、山小家の拭掃除、大きな石まで轉がし居るんだ。それでもし怠けて見ろ、山羊の尻へ一鞭だ、畜生、頂かさずに措くものか。

山姫 堪忍して、殖生理非衛、あれは貴郎を勵ますためよ。

森の精 なんのと言ふかい、さても可笑や面白や。御連中が押寄せて、懐も同然、きこうを火あぶりの串に突通し、裏表廻焼に、ぶすくと料理る鹽梅、又と見られぬ見世物よ。此の方其時待構へて、大桶に油を湛へ、小桶に硫黄と瀝青を装り、曳！ぐわらくと引いて来て、きこうを焚く火を、ぶうくばつく、ぼうくぼうく、其の火の空へ登るを見やれの、朗かな晝も暗となる。烟の黒雲、冥々濛々……

と消え失する。

此の時しも谷ぞと覺しく、喧々と多人數の言り叫ぶ聲聞ゆ。

山姫 あれ、あれ聞いて。理非衛。人間、人間の聲よ、あれ、氣味の悪い、恐い聲——厭な、貴郎目がけて喚くのよ。

トタンに石一つ丁と飛び来て、かはす隙なく姫に中る。

お姥さん、来て下さい。

鑄鐘師 やあ、是だな。夢に私を追廻す獵犬の群を見た。其聲を今聞か。畜生め、獵犬ども、何が俺を狩出せよう。ふん、都合よく吠えてくれる。百合の花を前兆に、天降ります天の使が、蜜のやうな微妙な御聲で、心を堅固に、耐へよ、忍べ、と勵まさる、其よりも、この獵犬の恐しい、忌はしい吠聲が、どんなにか強く、我が爲す仕事の眞の價値と貫目とを、我自らをして

確信せしめる。うむ、それだもの。何が、何を。

いざ、來れ、汝等のものは汝等に返し得させむ。予は予を追害せむとする汝等に相反して、汝等を守護して取らす。さ、これが殖生の託宣だ。

鐵鎚押取り、衝と出で行く。

山姫 (後に唯獨り、はらくしつ、一心に) お姥さん、助けて頂戴！ あの方を助けて頂戴！

よう、肉蝦魔！ 肉蝦魔！

池の精のさくと池を這ひ登る。

あ、小父さん、まあ、懐しい事、なつかしいわねえ。肉蝦魔！ あのお願だからね、あれさ、あの、岩の中から、水柱を吹上げて頂戴な、ね、瀧のやうに、瀧のやうに。あの、獵犬たちを追ひ遣つて、追散らして、よ、早く、早くよ。

池の精 ぶ、ぶれけけつきす。何が、何うかせいと云ふが。

山姫 あら、あのね、洪水をどつと出して、登つて來ようとするものを、谿底へ突落すの、よ、然うして頂戴な！ 後生、後生。

沈 池の精 そな事は、成らんが。鐘 山姫 後生よ、おくれつてば、肉蝦魔、池の小父さんだもの、出來なくつて、出來なくつてさ。

池の精 されば、然れば其の事だが、たとへが、其を爲たと言つて、己の器量が上るでないが、ぢやで先づ措いた。

其につけても、早や幾度も同じだが、おのれやれ憎むべきは、名人男だ。這奴、口があるに任せて、神と、人間雙方かけて、司に成ると吐き居るが。其の大馬鹿には馬鹿が對手、大白癡な村の奴等が、うぢや〜と登り来て、あな者の頭打缺いて殺して退けたら、己は其の方が勝手が可いが。すりや、此膨れた胸が透くが。

山姫 往つて、まあ、何でも行つて、助けてあげて下さいな、ねえ、ねえ、早くしないと、遅れるのよ。

池の精 何か、禮をくれるかか。

山姫 私から。

池の精 應、然う、然う。

山姫 好きなものを、まあ、何が可いの、お言ひなさいな。

池の精 あいうえお、かきくけこ、己の欲しいは、然う言ふお主だ、ぶれけけけつきます。

やあ、これ、何と、其の見たくでもない赤い靴な、上衣に襦袢をつべり突脱ぎ、こなた素質の柔膚の、焼黄金色した白裸になるまいか。喃、ありのまゝの身體へ戻つて、己と一緒にすつと

来ぬか、千里も遠い、遠い處へ連れて走るが、うゝ、何と可かるが。

山姫 えゝ、頼みはしない。もう、此の水かけ面、耳を憊うやつて能くお聞き。あれどんなに立派に、私——の人が、皆を對手にしておいでだか、お前にも聞えよう。

何だつて、又、妙なことを言つて居るよ。そんな、あの、そんな非望は、お前の其の顛にためた水皿から、拭いて取つてお了ひなさいな。まつたくよ。私がね、もしか一寸でもお前の言ふことを肯いて御覽、厭な事、いまに、あのお姥さんほど年取つて、それから、それから、あの、もつと、お姥さんの三倍、三倍ほどな年寄になつて見たが可い、始中終、何は、私を、あの牡蠣の殻の中に推籠めて、日の目も見せないに極つて居ます。欺さうたつて、然うはいかない。

池の精 構はんが、そちこちする内、彼奴もう寂滅せう。

山姫 虚偽よ。私の愛人が死にますか、あの、聲をお聞きなさいよ。ね、お前たちの聞馴れた、矢張、勇ましい、元氣の好い聲。それ御覽、お前、口では然ういつても、身體はがた〜顛へてさ、其を私が知らないと思つて居るの。

池の精 ドンと沈む。

鑄鐘師 引返す、多勢を相手の戦闘のために、氣昂り心激しながら、呵々と勝利の高笑ひして、鑄鐘師 畜生對手だ、いや犬のやうに攻め寄せた——俺も亦犬同様に逐拂つた。何、花崗石の石

塊を投飛ばしたら、澤山だった。手に應じてはたしく死んだ。死なないのは逃げて了つた。さあ酒だ、祝つて一杯。

はて！ 快い。何が、戦は胸を新に、勝利は人を鍛へ成す。熱血稻妻の如く迸り、全身の脈は、爽快に跳ねる、飛ぶ。實に、實に、戦は草臥れさせるものではない、戦は十人力——愛と憎との中に、新に生れた十人力を授けるんだ。

山姫 さあ、召つて頂戴。

鑄鐘師 どれ頂かう。あ、今の此の身は、酒に渴し、愛に渴し、光に渴し、又、お前にも渴して居る。(と満引して)一ツ獻さうよ、掌にも舞ふと云ふ風より軽い魔界の姫。いで此の酒で改めて結婚する。制作の人たる私は、片時お前と離れたら、其のまゝ塵塚に墮落の他なく、従つて、浮世の重い苦痛に打勝つ事が出来なくなる。——見棄るなよ、お前は私の心の翼だ。見棄てないやう。

山姫 貴郎さへ、見棄てなければ、私はもう……

鑄鐘師 誰が、お前を。思ひも寄らない！——さあ、聞かう、音楽、音楽！

山姫

此方へ、此方へ。

お坊やお嬢や小な人達！ 谷から穴から隙間から！

凱旋祭祝ふため、一所になり、此處へ此處へ！

衆で樂器を鳴しておくれ、琴よ、笛よ。

音楽聞ゆ。

奏でよ、弾けよ、音を入れよ、廻つて、踊つて、

一寸慙う屈んで!!

くるく廻つて、躓かないで、螢や、螢を頭髮に、

此の髪の毛にすらりと入れて、

光る簪、翳せば挿せば、

何の、フライヤ何の其の、其の頸飾羨まじ。

鑄鐘師 靜に、黙つて、はてな、何だか……

山姫 何うかして？

鑄鐘師 それ、あれがお前には聞えんかな。

沈

山姫 何う云ふ聲？

鑄鐘師 偶した何か歎きの聲……埋木の枝に鳴る聲、土に埋まつて長い間響かずに沈んで居た聲

……
はてな、最う何でも構はん、こゝへ来て、其のお前の唇の眞紅の杯を私に。おゝ、飲めども飲めども盡きる期ない無盡藏の杯、杯。私が、此れなりすつと消えるほどな、しびれ酒の杯を、さあ。

二人長時唯恍惚する——恍惚しながら相抱き、茫然としつゝ、門なる石階を下るにつれて、次第に展開し行く壮大なる深山の景に心を移す。

あの景色。あゝ、空間は深く大に且つ冷かに、人類が屋根を並べる麓の谷まで、月光に霧が擴がる。姫にはあれが解るかな。あれなる下界に住む者は、いづれも旅の空かけて他國に漂泊ふやうなもので、其の癖故郷に住むが如し——此の山の上も、また其の通り、他國の如く故郷のやうだ。姫、この意が解つたか。

山姫 (低聲にて) あゝ。

鑄鐘師 今の返事は、まるで平時の容子とは違つて居る。

山姫 何故か、胸騒がしますもの。

鑄鐘師 何が怖い？ 何を恐れる？

山姫 私にも、分らないの、何の所爲か。

鑄鐘師 何でもない、まあ、此方で休むが可い。

姫を伴ひて、窟の口まで引返して、フト立停りて、あとを視め、

しばらく、空に懸つた眞白な顔の月でさへ、其の動かない目の光で、森羅萬象あらゆる宇宙を限なく照すことは出来ない。現に私が遁げて来た、あの下界を、今明かに照しちや居らん。況て私は、谷の底まで目を通らん。

聞け！——はてな、いや、然うでもないか！——姫、別に何も聞えはしないか。

山姫 何も——貴郎、何を言つて在らつしやるの？

鑄鐘師 矢張、何にも聞えないか。

山姫 何を聞けつて、貴郎は言ふの。秋風が、草の上を、颯と吹くのが聞えます。月夜鳥(鳶)が、かやつくく鳴いて居るのが聞えます。それからね、あの、外々しい、耳慣れなあい、變な言を、變に被仰る貴郎を聞いて居りますよ。

鑄鐘師 すつと、すつと遙の下に、月の光が血のやうに水の中に映つて居る、あれから、彼處から出て来る聲だ。それ見えよう！

鐘 沈

山姫 私には何にも見えない。

鑄鐘師 其の白鷹の目で、見えんと言ふかね。盲目にはなるまいに？……おゝ、大儀らしく、段

段、あれ、上へ引摺り上げられるやうに、それく、何か来るのが見える、はて、何だらう、なあ。

山姫 迷よ、皆迷ひなの。

鑄鐘師 迷では決してない。静と、静とせい。お、確に迷でない。神も眞と認める程事實なんだ。それ、岩の上を、平い岩の上を、道中へ横はつた、百疊岩の上を来る。登る。

山姫 下を見ては不可ません。もう、私戸を閉めますよ、私の手で貴郎を助ける。

鑄鐘師 止せ、止せといふに、待たんのか！ あれを見ずに居られるものか、又見たくツてく。

山姫 御覽なさい、あれ、眞白な雲の花が、渦巻いて、岩の薬研の中に廻つて居るのに、貴郎のやうな弱い方は、あの花の中へ入れはしない。

鑄鐘師 弱いものか。うむ、何、ありや何でもなかつた。もう見えなくなつて了つた。

山姫 お、私の愛人になつた。貴郎は又私の殿様、私の名人……迷は貴郎の力を失くする、貴郎の其の鎧を振つて、迷の、そんな、幽霊を追遣つて了つて頂戴。

鑄鐘師 しかし、しかし、しかし、お前には見えんかな、あ、それ、次第に其處へ登つて来るのが……

山姫 何處にねえ？

鑄鐘師 彼處、それ、此の指の。岩道の狭まる處、上の方へ。お、然も肌着を着たばかりで……

山姫 誰が、え、？

鑄鐘師 素跣足の子供たちだが。お、兩方で、瓶を一つ引摺つてる。重いさうな、む、重い。や、右の膝を、や、左の膝を。あ、く、あの、跣足の、あの小さな膝が折れさうだ。

山姫 おつかさん、助けて頂戴、理非衛が、不可い！

鑄鐘師 天窓の周圍に、子供に、子供に後光が射す。

山姫 否、否、迷の光り物が、貴郎をおもちやにして弄るのよ。

鑄鐘師 何の、何の、其の掌を合せろ。今、それ今、其處に、見え、見えたらう、お、来た、来た。

どつかりと跪く。二人の小兒、姿影の如くなるが、水を裝りたる一個の瓶を抱きつ、とぼ

とぼと辿り着く。肌には單肌着のみなり。

第一兒 (消え往くばかり、細き聲して) 父さん。

鑄鐘師 坊か、お。

第一兒 母さんが、父さんに、よ、ろ、し、く、ツて。

鑄鐘師 難有うよ、難有うよ。坊、母さんは、病氣をしはせんかな。

第一兒 (弱々と、徐ろに、且つ悲しげに、一ツ一ツ語の中に力籠りて) 然、何うも、しないの。

下なる谷の深みより、響き来る鐘の聲。

鑄鐘師 で、何か、二人して、何を持って来たんだな。

第二兒 瓶なの。

鑄鐘師 父さんのに持つて来たのか。

第二兒 え、然うなの、父さん。

鑄鐘師 お、重いものをなあ。お前たち、瓶には何が入つて居るな。

第二兒 鹽ツぱいや。

第一兒 苦いもの。

第二兒 母さんの、涙なの。

鑄鐘師 や、や、やあ。

山姫 あの、何を、見詰めて在らつしやる。

鑄鐘師 二人を見、見、二人を——

山姫 誰を、ねえ？

鑄鐘師 え、目を持たんか、二人を、二人を——

何か、それで、母さんは何處に居るの、話して聞かせ——

第一兒 母さんかい？

鑄鐘師 お、母さん——母さん、何處に？

第二兒 茨の下に、水茨の。

淵よりして強き聲す、鐘の響。

鑄鐘師 鐘が……鐘か……

山姫 何んな鐘え？

鑄鐘師 嘗て埋められ、沈める鐘だ……其、其の鐘が鳴る、やあ、鳴つて来た。誰が鳴らす、お、聞えるな、聞きたくない。堪、堪らん、聞える、助、助けて、助けてくれ……

山姫 しつかりして、しつかりよう、理非衛、理非衛。

鑄鐘師 鐘が、鐘が、鳴り、響く。助けたまへ、我が、おん神。やあ、誰が鳴らすぞ。あれ、あ

れ、あの聲、あの響、轟々張る雷の音——今まで埋まつた、其、其の音、其の聲。一脈々々、汐の満干、干れば幽かに、満つれば倍の強さとなつて、血のさしひくやう五體に響いて、此の腸を駈廻る。(山姫を屹と見つ、) 汝、憎し、かつ、唾吐くぞ、退りをれ。撃挫ぐぞ、汝、汝、

魔女めが。去つ了へ、去つ了へ。呪詛ふに堪へた怪物だ。去つ了え。俺は呪詛ふ、汝を呪詛ふ、俺を呪詛ふ、俺は俺の事業を呪詛ふ、一切を呪詛ふ——見ろ、こゝに、今、こゝに居る！こゝに！……立處に俺は行く……往つ了ふんだ、神よ、神、殖生理非衛を憫みたまはれ。突立つ、倒るゝ、又奮ひ起ち、力なき身を引摺る如く、夢中に山を下らむとす。

山姫　しつかりして、理非衛、こゝに居て、往つては不厭、こゝに居て！ あゝ、あゝ、去つて了ふ、去つて了ふ、あれ、去つて了ふ。

第五齣

山の奥なる浅茅生に、山姥が住居の孤家、すべて第一齣の時に同じ。
時正に三更。
池の周圍に三個の魔女坐す。

一の魔女　火がぼう／＼、火がぼう／＼。

二の魔女　贅を焼くそな赤い風が、彼方々々の山々から、此方々々の谷々かけて、どう／＼と吹くぞいの。

三の魔女　黒い烟は雲となつて、山の樅の樹の梢を捲いて、底の奈落へ飛んで行く。

一の魔女　白い烟が、其の奈落で、むら／＼立つわよ。軟かな霧の湖に、小牛が立つて首まで沈んで、麻戀しと泣くわいの。

二の魔女　又山樺の樹の谿間には、鶯が歌ひます、此の眞夜中にも——歌ふなう、泣くなう、あれ、あの聲を聞く時は、つい悲しさに誘はれて、露の木の葉に身を投げて、貫泣きをしますよなう。

三の魔女　世にも變つた話があるえ。

私はなう、蜘蛛の囿に枕して、とろ／＼と寝つたわなう、燈心草から燈心草へ紅紫の織絲で織り懸けた、巢の衾は、貴い姫君の御圍にも無い好い寝心地。うと／＼と寝て見れば、美しい夕日に照添ふ、浅茅生の露の火の粉が、綺麗な炎を、ばら／＼私に投げるわの。重い眼瞼の目を細う恍惚となつて睡つたよ。やがて、目が覺めて見た時には、廣い廣い天地の光は皆消えて、私の寢床は灰色の、東の方の空にばかり、朧な焰が一條立つて、段々に段々に、空さして、高う登ると見たれば、お月様がよ、輝く金屬の塊をの、石山の背にお据ゑ遊ばす。やがて血の色、物凄、光で颯アと照されたれば、不思議や、此處の草原は動くやう。あれ動くよの、と思へばな、ひそ／＼聲、悲む聲、呻唸く聲さへ生え交つて、泣くし歎くし幽な聲、其の氣味の悪い事、わな／＼顫へて居た事よ。丁どな、青い燈を點して來た甲蟲を、呼んだけれど、蟲は

言ふこと背かないで、私の前をふうと遁げた。爲うこともなし其まんま、床の上に突臥して、生きた心地もなくなつて、頻と悲しくなつて来て、しくしくと泣いて居た。其處へとの、私の情人——雄魔の中にも好いた雄魔——それなう、水蜻蛉の羽根のある私の情人——戀しい男の飛ぶのが聞える。何で其の聲を聞きはづさう。遠い處から、心時めく、早や其の翼の音を聞き分けたいの——やがて其の情人が私の閨へ飛んで来て、ひつたりと傍へ下りた。お、それから二人が二人、兩方床を分け合つて、戀の味を語らうて、花と翼とならべた中へと、男の涙が流れ込む、ほろ／＼落ちたではないかいの。それから、はあと泣きはじめて、しつかり私を抱寄せて、此の柔かな胸がまあ其の涙で浮くほど泣いて、言ふ事には、バルデル様がの……バルデル様が、お亡くなりなされた、と言つては泣き、言つては泣き……

一の魔女（ふつと立ち）火がぼう／＼、火がぼう／＼。

二の魔女（おなじく立ち上り）バルデル様の、お體を焚く堆木よなう。

三の魔女（しづ／＼と森の前まで歩み出でて）バルデル様が死なんした、凍えるやうに寒いぞなう。（と消え失す。）

一の魔女 やれ、此の地へ、呪詛が降つて来たぞいの、バルデル様の死骸を焚す、烟が落ちると同じに、え。

霧一面に降りかゝりて、山の淺茅生を蔽ひ隠す。しばらくして、再び霧の霽る、と見れば、何處へか、魔女の姿皆あらず。

山姫、此處へ、惱める、疲れたる風情にて、頂の方より下り来る。太く弱りたる面色にて、一度は岩に腰掛け、やがて身を起して池に近き、やゝありて歌唱ふ。其の聲世にある人ならず、幽靈の如く、亡者の如く、

山姫

私は何うしよう、何處へ往た、酒宴の座に連つた。
土男等が、岩の廣間で、結婚式だとして舞ひ跳ねた。
皆が私に杯を、無理に飲めとて持つて来た。
其杯は酒でなし、鮮紅の血なりしが、
それを私は飲まされた。

鐘 沈

式の杯飲んだ時、
其時に、胸がせまつて、切なくて、
其時に、氷のやうな鐵の手が、心の中を搔裂いて——

其時に、肝のたばねは焼盡されて
あゝ、心臓を冷したい。

冠が、結婚式の卓子の上に、一つあつた、あつた、
紅の珊瑚の中に、銀の魚の留まつた。――
其の冠を手にとつて、髪に頭に、戴いたれば、
今は免れぬ、水の魔の、其の花嫁よ。
私は胸を冷さにやらぬ。

林檎が落ちた、私の膝に、落ちた林檎の数が三個。
黄金色のと、白いのと、薔薇の色の紅いのと――
お婿さんから、私への、お婿さんから贈物。
其の白いのを食べたたら顔の、私の顔の色青く、
黄金色のを食べたら富を、私は持った黄金と富を。
第一しまひに、紅いのを。

白う、青う、又紅う、

花嫁は針の筵に、色が變つて、其の花嫁は死んだもの。
水の妖魔よ、いざ、戸をあけよ。

死骸になつた、其花嫁御、私お前に身を任せ。

銀の魚と、蛸蛸と石と、蟲と巖と魚との間の、

深い、冷たい、暗い許。

おゝ、燃ゆる、焼かるゝ、我が胸よ。

山姫、悄乎として池に隠るゝ。森の精、樅の林を顯れ出で、のこゝと池に寄り、水の中におとづるゝ。

森の精 えッへ！ ほるどりお！ 蝦蟇王猊下出さしませ。ほるどりお。へ、びちやゝと水音
立てる厭味な奴、や、まだ出て来をらぬ、聞えませぬかの。これはしたり、青ぶくれの君眠ら
せたまふか。へえ？ 出て来いと言ふのぢやわ。ものがたとへ、藻の三つ蒲團に、水別嬪の上
代物添臥で、や、其の、鬚髻を撫でたり、捻つたり、一寸抜いて見たりで居らうと、思切つて、
ざぶりつ、床離れをよく這面浮かせる。女を振つて、水を切れ。な、これ出をらぬと後悔せう。

今此の方が聞さう談話は、其の面白さ、面白さ。汝が浮氣の水の夜、十晩と釣替に出来うと思へ。

池の精 (水の中より、姿いまだ見えすして) ぶれけけつきます。

森の精 ぶれもけつも構はず登れ、何を愚圖る。

池の精 黙らぬがか、黙らぬがか、宿なしの對手する暇はないが、這奴面倒な、邪魔怪な。

森の精 あい、あい、何とやら仰せあつた、相手になる暇がないと? や、蝌蚪よ。其の蝦蟇

腹を肥やさうなら、時構はずに十分ぢや。うまい話を聞かそ、と言ふに、此の方のお慈悲が知

れんかい。救世主の此の方、唯た今豫言して置く。大事出来ぢや。これ、尋常事ではない。例

物が、姫を見棄てて了うた哩! 何とぢや蝦蟇、吃驚せまいぞ、腹を潰すな。それ、時節到来、

此の期を逸すな、今の間ぢや。汝が敏速く引抱くと、天下無類な美麗い蝶々は、汝の水掻へ

べたり附着く。何と、又其の蝶坊はよ、少と惱んで、姿、悄乎。が惱みや、疲勞は、池に肉蝦

蟇、森に虞修羅ともあらうお互、卵の毛ほどもお構ひないぢや。な、それ、爺様、くれくれも

御馳走したい。一寸姫を手に入れて見よ、可愛い、最惜いの、嬉しいの段ではない。う、

う、恚う言ふ間も、堪らん、堪らん。

池の精 (悪狡猶しき瞬目しつ、先づ面より浮ぶ) 何か、あの奴が姫を見棄てた? 知れた事ぢ

やが。其が何が珍しい。其について、俺に姫を追掛ける、と恚う吐すか。かつ、思ひも寄らん、
がく、がく、がく。

森の精 ほうい、ほうい。承つた、は、然やうなら、汝既う姫に未練はないな。然らば此の許
へ頂かう、此の方のものにするまでよ。處で、少々もの問ふべし、實は姫の在所が知れんわ。

池の精 捜すが可か、がツ、がツ、がツ、捜すが可か、森の親仁。

森の精 其の儀を汝に聞かうかい。や、捜したほどのに、捜したほどのに、夜すがら、すがら、

霧の中を駈摺り、跳摺り、己が身で身を呪詛ふまで、捜すほどのに、捜すほどのに、羚羊さへ

行き得ない、崕路構はず攀上つた。エエ、朗姫は何處にぢやと、山揆鼠と云ふ山揆鼠には、一

ツ一つ訊いて見た、と先づ思へ。鳶に訊く、鷹に訊く、山鼠に訊く、鳶に訊く、のたくりもの

の蛇にも訊いたが、知らん、と何奴もけろりてえす。

途方に暮れた處での、樵夫奴が大勢居て、焚火で休む處へ出逢うた。したりぢや、こそく、

木の燃えさしを一本ものして、ト松明にする、火を吹く。煙を先立て、捜し〜て、とつばぐ

るぐるする内に、あのそれ、頂邊の鍛冶小屋、な彼へと出た。扱て誰も居らん、主はない、姫

も見えん。が、肉蝦蟇、其のかはりに可い事見た。鍛冶場は何と、其の眞夜中に犠牲の煙が上

つて、火がぼう〜、炎がめら〜、ばち〜〜鋭い音。や椽が折れる、びしり〜柱が倒

れる。ぐわら／＼と偉大い響。もはや是にて、あの勢の凄じかつた、人間奴「埴生理非衛」の、名人たる品、位、其の崇高さも偉大さも、瞬く間に、煙となり、煙の片が霜にも得ならず、現未來世、永劫に寂滅し終んぬ、何と面白い話でないか。

池の精 知つとるが、知つとるが、そな事は見通しの掌。何か、其れほどの話をせうすで、池の底から呼び上げたか。はて怪體、これ俺が知る事は、何の、其のくらなるものぢやらうか。話さうか。先づ、それ、時ならぬ鐘が鳴つたらう、何で鳴つた、こなた知るまい、俺は承知。扱て何ものが、鐘の舌を動かいた、其も承知だ。まだ、まだ、まだある。彼方の谿でな、俺が見た事知るまいが、湖の中の出來事だ、是こそ、前代未聞の珍事。

くたばつた、死にさらした、死んだ、婦人の硬い手が、件の鐘を青う搜いて、水の中で鐘に觸つた、それ、見つけたわ。婦人の其の手が巨鐘の肌に觸る、と、見たれば、天に、奈落に、轟と轟く大雷鳴、どん／＼と鳴出した、息吐く間もない、呻吟るわ、咆えるわ。やあく／＼其の聲、獅子王の哮る同然。呻つて、咆えて、谷を動かし、森を震ひ、峰を越え、山又山を響き渡つて、此の巨鐘を鑄た、あの名人埴生理非衛の名を呼ぶだ。何と、俺は又、溺れて死んだ其の婦人を熟と見たが、死姿の丈長髪は、堪へに堪へて苦み死した辛抱者、「妻」の顔の廻りを、或は廣く或は軽く、ざわ／＼と泳いで廻る、ト見る内にな、婦人の骨が鐘を撫でると、そりや

恐しい響とこそ言へ、二倍の強さに鳴り狂ふ。

俺が此の——まづ俺も年は年、大概の世の珍しい事と云ふも、見も見た、聞きも聞いたれど、恚くまでの事は早や、生れて出でてはじめてで——此の髪の毛が、物凄さ、恐怖しさに、一本立ちに逆に立つた。俺が俺なら、同伴のものも、わあ、一なだれに皆遁けた。

何が、汝とても其の通り、あの谿の湖の恐しさ、一目なりと見ようには、何が、何が、姫のこなど彼是とし居られう。姫か、姫か、往きたい處へ往かせて置け。花の傍でも葉の傍でも勝手放題。飛ばして置け。ふん、姫か、何が姫だ。俺は早や色にも戀にも飽果てたが。

森の精 カンラカラ、憚りながら山羊大明神も御覽下され、此の方は戀には飽かぬ。や、こな蝦蟇腹承れ。一切我と言ふ者は、我と言ふ者の好勝手、仕たい三昧する外に活きる效はないものよ。こなたは湖の婦が怖いか、其處で戀には飽きたとほざく。俺は、へ、へ、美しやの甘やの、蜜のやうにとろりとさせる女人の身を抱くに於ては、湖の女亡者の事などは、ぶつけ、ほつけ、はいさほ、と恚う仰せられるが、何うだ。

池の精 くおらつくす、ぶれけけけつきす。さうさう、ほほう、ほほう、念のため断るが、其のやうな料簡の蚤が汝を囓んで居るなら、其の蚤一思ひに殺して退けい、と恚う断るが、分つたが。

捜さば捜せ、迷はば迷へ、主が十年足掻いても、な、主の手に姫は入らぬ。慌てまい、これ、實を言ふが、虞修羅大人、姫は、此の俺に、ほの字れの字で、早や此の方の枕添だ。分つたか、姫君さまには、羊の面は、すかたらしと御意召さる、なんまいだぶ、俺は沈むが、分つたか。

汝は汝だ、貴公の道を大手振つてお通りやる。俺は又、今まで汝に邪魔された水の殿様。以來は、水若い姫君の下僕となつて、仰せのまゝに事へるばかりだ。あば、あば、あば、さアらばだあ。

森の精 (あとより呼びかけ) やあ、天に星の光るが眞實、俺は此の臀と角とで強いが眞實、魚は泳ぐ、鳥は飛ぶ、是も眞實。まつ其の通り、あはれ、汝遠からず人間の小兒一匹設けて、搖籃の中で、ちやうちあは、をするのも眞實、眞實、眞實。おめでたや、めでたい。然らば然らば、静と寝い。其方で寝れば、此方だとぶ、ほるどりおぢや、エイやつと、へつツへつツ、雜木を飛越え、荊棘を跳ね越え、して来いな、ほう、蚤は死んだわ、未練はない。

道化たる身振、踊るが如く、森の精やがて飛去る。

小屋の山姥、立出でて、おもての窓の戸を外す。

山姥 刻限ぞ、刻限ぞ、早や起出でる刻限ぞいの。クン、朝朝の香がする。何ぢや知らねど、

今宵は夜が夜、がやくと耳喧しい晩でござつた。

鶏鳴く。

お道理、お道理、きつけりき、き、き、き……かいの、御無理はござらぬ。が、其のやうに息精張つて、私の前できつけらすとも事い。年寄は目敏いに、邪魔な和郎めな。時刻の移り過ぐることを鶏に聞いてから知らうものか、昔から御存じぢや、ふ、。雌鶏が卵生む事よ。あ、や、東の空が、しらみ渡る。次第々に明るうなる——こや、其處な小さなお鷲よ、鷲鳥よ。歌唄へ、歌唄へ、新しい日が来たがいなう。

得體、何やら、變なものが、向うにぼうと燃えるがや。どれ、身の周圍を照して見よう、——それ、紅玉で輝かせれば可い事に、お婆々どの、氣のつかぬ、(山姥、懷を搔搜りて、紅く光る、一顆の寶石を取出し) それよ、これ、これ此處にあらしやる。

鑄鐘師 (姿見えず、聲のみして) ラウテンデライン! (朗姫)

山姥 けた、ましい、何事ぢや。何に、姫に用か。呼ばつしやれ、呼んで見さしやれ、呼んで来るものは、呼んだら来ようず。

鑄鐘師 朗、朗、私だ、こゝに居る、聞えないか。私だ。

山姥 はて、姫は、ついた事には来はせまい。何ぢややら、来さうにもござらぬ。

鑄鐘師 (村人に追廻されしが、逃れ来て、孤家近き岩の頭に立ち現る。顔色青ざめ、着たる衣服も寸々に引裂れつ。右手に高く石を取つて、うしろの谷に投げ落さん身構へして) 来い、さあ、立派に来い。和尚だらうが、床屋だらうが、校長が納所でも紙屑買でも誰でも構はん、来て見ろ、汝、汝。其れから上へ、一步でも踏出す奴等は、砂を詰めた囊のやうに崖下へ轉がつて落ちるまでだ。

俺が女房を湖へ突溺めたは、汝等だ。俺ではない。悪黨、悪人、聾の胡桃め、乞食め、襤褸め、鏢一文遺失しても、朔日から晦日まで三十晩も、「天にまします神様よ」の連中だ。止してくれ。そんな時ばかり大事に拜んで、時と場合には身勝手な理窟をつけて、其の神の久遠の愛を、金子で以つて賣買して恥とも思はん破廉恥漢等。虚偽もの、偽善家、これ、巨木大石の堤防を築いて、乾き切つた窪地の地獄を造つて、極樂の流、神の海、幸多き其の其等の波を堰き止めるのは誰だと思ふ、誰でもない、皆汝等の爲す業だ。え、其の堤防を突崩す大偉人は何時来るのか。

い、いつ来るか、あ、しかし實に……私は其の偉人ではない。
石を投げすて、此方に来る。

山姥 待たう。それから此方へ出て来てはならぬ、ならぬぞの。止まらされ、脚早めてはならぬ

ぞよ。

鑄鐘師 お、お年寄、彼の崖上に、火が見える、燃ゆるものは何であらう。

山姥 然ればいの、あれこそは、何處かの人間が建立さした、半分は寺、半分は殿様の城の状した、日の神の御殿でござつた、それは、見事な物の。が、其の建立さつた人が山を遁げて去んだればな、あれ直様と燃えたぢやよ、眞最中焼けるわいの。

埴生理非衛、絶望の思に沈みながら、慌しく崖を抱いて攀ちんとす。

山姥 や、や、言ふ事がある、聞かつしやれ。今、上らうする目の前に、峻しい岩壁が削立つ。

其の壁を越さうとて、こな人、肌を翼があるか。翼なうては、迎も叶はぬ、叶はぬぞの——以前はとまれ、お身が翼は、コナ人間よ、最う破れた。

鑄鐘師 む、破れても破れんでも、是非とも登る。登らないで。燃、燃える、燃える、彼處の、あれは、私々、私が作つて立てたのだ。え、分つたか、建てたのは私だ、私が私で、其の私の一切で、何事か仕出来したら、其の出来たもの一切を、あの建物に、注ぎ入れる心願だつたに……あ、駄目だ、最早や、最早や、私は何も出来やしない。

沈 鐘
山姥 コナ人、少と呼吸吐かしやれ、ま、ま、休まされ。見さい、それ、まだ道が暗い。石の床几が其處にそれ、なう、腰落いて、呼吸吐かさいよ。

鑄鐘師 何、休め、休めと言ふか？ 否、否、たとひ、絨毛、絹布の臥床を出して、其に休めと言つてくれても、私は矢張、あの焼崩る、建物に、崖へ登れ、と誘はれる。あ、思へば、母の接吻——あ、熱を病む冷い額に下すつた、私の母の、難有かつた接吻は、早や何時の間にか、塵に成つて了つたか。思へば、あ、其の接吻こそ、一度は平和と幸福を與へて置いて、終には人を亡ぼす、全然黄蜂の刺傷のやうなものか。

山姥 かの、然なものでござらうかの。まづ然なものであらうぞの。ま、ま、待たされ、私が下の窠には、二三杯まだ、葡萄酒があるほどに、コナ人、主に一口進じよう。

鑄鐘師 え、待つちや居られん——水だ、水を！

山姥 池は水ぢや、ちやつと行つて、汲んで飲まいの。

鑄鐘師 (走り行き、池のへりにどつかと坐して、且つ汲み且つ飲む。)
時に、幽なる、甘き聲、池の中より、歎くが如く訴ふるが如く歌ふ。

聲

最愛しなつかし、私の貴郎、ハインリヒ、
貴郎は坐つた水の上に、私は下に居るものを、
情に、起つて、早や、去つて。

見るのは、悲しい、情ない、
さらばよ、さらばよ。

——少時無言——

鑄鐘師 お年寄、今のは、あれは、返事をして下さい、お年寄。今私の名を呼びました。悲しげなあの聲は何だらう、理非衛と言つた、確に言つた。此、此處の底から聞えました。聞えてから、それから、幽に、然やうなら、然やうならと、言つたんだ。

お年寄、一體誰だ。刀自は。私は恚うして、まあ、何處に居るんだらう。やあ、これは、目が覺めたやうな氣持がする。それ、此だ。此の岩、此の小屋、お姥さん、皆能く識つてる。識つては居るが、些とも見馴れちや居らんやうだ。して見ると、可笑い、これまで私が歴て來た一生の凡ての事は、一切何かの響の一時の呼吸に過ぎなかつたか。其の響の呼吸は、現にあつて、もう消えた、か、それとも以前からも無かつたものか。

一體、お姥さん、お前は何だ。

山姥 私が事を何者。然う言ふは何者ぢや。

鑄鐘師 何、又、私に問返すか。然う、え、と私は誰だらう、何だらう私は。お姥さん、其の事だ。まあ、幾度其を、私自から、天に向つて訊ねたらう、私と云ふはどんなものか、と。が其

鐘 沈

の答は受取れなかつた。私の手許にや来なかつた。唯是だけが判然して居る。で些とも分らん。但し私は世の英雄か、弱者か、半ば神か、全然獸か、何にしろ私と云ふものは、太陽の前に曝しものの子で、従つて其の生れ故郷を憧憬れ慕ふ人の子なんだ。處で、まるで助けるものなしに、不幸、苦痛を堪へ忍んで、「空中から、黄金の腕を伸ばして私をつかまへようとして、いつが世にも私に手の届かない、其の母親」を尋ねて、今に尙ほ尋ね逢はないものが、其が、其の私なんだ。お姥さん何をして居る。

山姥 追附け、なう、お約束の時節が来ると、何事も分らうぞいの。

鑄鐘師 (衝と身を起して) いや、差當り、其のお前、燈火の血の光で、私の前途の、此の斷崖、頂へ上る路を照らして貰はう。昨日までも昨夜までも、私は其處の巔で、この一山を支配して居たんだもの。いま隱遁者となつたからには、以來は、孤影寂しく獨り住んで、支配せず、服従もしないものとなる。

山姥 氣の毒の、私には然うは見えぬがなう。其の山の巔で、主が身に附かうずものは、なかなか其のやうなのではないがの。

鑄鐘師 何だか知らんが、又何うして分る。

山姥 何處も見透し、知らぬといふものはない私ぢや。その、麓のものどもは、こゝへ主を追うて來せたや。ゆゆゆ。處で人の子、人間の兒が浮世に榮えて、火と働いて居る時には、人間は獅子の兒いの、なう、獅子の兒。が、一度それ無常の風が手を出いて、ぼう／＼と寄せ來るかいなう、はや立處に人間は狼に追ひかけらる、羊の群いの、なうわかつたか。羊を守護する羊牧者と云ふものが、又其を、氣の毒とも不便とも思はうでか、頼母しうない寄合での、唯徒に遠くへ退きながら、「逃げや」、「逃げや」と言ふばかり、喚くばかり、叱々と犬をかけて、狼を追ふなど思ひも寄らぬが、却つて、てん／＼が飼ふ羊を、狼の咽喉へ投げるわや、抛り込むぞの。今主が身の一生も、他さまの一生にくらべて見て、些とも優つた吉い事ござらぬ。見やしやれ／＼、主といふものは、盛りな、軽い、生命に追つこともならず、さればとて、勇ましく無常の前に立つ事もなるまいがなう。

鑄鐘師 あ、堪らん、まあ、聞いて貰はう。一體どうして、こんな身の上になつたか。自分にも些とも解らん。私は光明ある生を我身から突き放し、名人だつた事業を打棄つて、大工の小僧のやうに敗亡して逃出して、自分、我が手に、制作して、魂を鑄込んだ、其の我が鐘の鳴る聲に、たわいもなく敗亡するとは何事だらう。あ、あ、然も一々皆事實だ。鐘の音は鑄の胸の中から、山の此處まで響き渡つて、樹々の梢に響を返して、責め驚かす恐しい威嚇の聲は、四方から輪を擴げて、一緊め緊めては迫つて來た。其でさへ、私は立派な以前の名人、

名家だつた。其の私は、鐘を作つたと同じ、此の手で、鐘の前にへたばる前に、え、あの鐘一層、破壊して了へば可かつたものを……

山姥 過ぎた事は過ぎた事、逃げたものは逃げたもの、未練らしい措かされ。何としても最う、主は、舊の主の高さには登られぬ。登れはせぬ。の、言うて聞かす事がある。コナ人、主は眞直に伸びた芽生の芽ぢやつた、其の芽は強い芽にござつた、ぢやが、十分に強うはなかつた。主は、呼び出された人なれど、選り出された人ではなかつた。な、分つたか、やれ南無阿彌陀、こゝへ来て、腰でも掛けされ。

鑄鐘師 ぢやあ、お姥さん。

山姥 コナ人は、これの、これの、こゝへ来て腰を掛けさい。やれも笑止や、然なやうに血眼して、主が捜しに行かしやる者は、何ぢや知らねど、其の者は、積つた灰の外にはないぞの。ない苦ぢやが。存在へる身にこそ生命欲しからう、が、主には、其の生命が、決して決して、望む事は出来ぬぞよ。

鑄鐘師 ぢやあ、それぢや此の場で殺してくれ。さあ、即座に生命を取つたへ。

山姥 然れば、其の事い、可哀や、コナ人は死ぬである。主がやうに、登つたもの、光の中へ高らかと昇つたものが、眞逆様に下界に落つると、五體は微塵にならねば濟まぬが。

鑄鐘師 おゝ、濟むまい、私も思ふ。確に思ふ。途々路のドン詰りだ、ちよツ、もう所詮駄目だ。

山姥 然うとも、最後までい。

鑄鐘師 あゝ、實に不思議なほど、何事も知つて居る。お前に問ひたい。蹠に血を出してまでも捜し出さなければならぬものが唯一人、私にある。死ぬ前に一度見せて欲しい。何うか返事をして下さい、お姥さん、お姥さん、あゝ、夜の底から、夜の底へ消えて行く光明のなごりにさへ、仰いで見られないで死ななければならんか、迎も、もう、見ることは……

山姥 誰を見たい、誰に逢ひたい、のや、誰の事い。

鑄鐘師 彼の女を、え、知らないのか、分つて居よう、誰に逢ひたい、彼の女の外に、誰がある。

山姥 何と主に、これが最後の願があるなら、言はしやれ、肯かう、叶へようぞ。最後の願望、唯一つ。

鑄鐘師 今言つたのが、直ぐに其が、いまはの願、一生の。

山姥 コナ人よ、姫に逢はせう。

鑄鐘師 南無、母上、刀自に其が。何たる神通を、お持ちなさる。おゝ、何故、今お前をお母さんと云つた、自分にも分らない。今にはじめず、これまでも、一度私は今のやうに、覺悟した

覺がある。其の一呼吸ごとに、いよ／＼是が最後の息だと、覺悟した事があつた。其の時だつた、あゝ、其の時だつた。あの姫がフイと來たんだ。すると何うだ、回復の氣は春風の如く惱める手足に吹き渡つて、私は直ぐに健かになつた。が……今……また、此の五體が一時に、お、更に、再び、その高さに飛び得るやうに軽々となつた氣がする。

山姥 最う濟んだ、何事も言うて歸らぬ。主をの、下界にの、引落す荷物のがの、荷が勝つて重うござる、何うして飛べよう。今は早やこなたが村の若ものどもは、こなたより、すつと強い、迎も／＼彼等づれにも勝ち得ぬのぢや。

能う聞かされ。私のが、これからの、卓子の上に杯を三ツ置く。可いか。一の杯に白い酒、二の杯に赤い酒、三の終りの杯には黄色な酒を注ぐぞいの。さてコナ人よ、主が其の一番の杯を飲む時は、再び舊の力が出る。二の杯を飲む時は、これを最後に、いま一度、御身を見棄てた光明の靈を拜まう。けれどもなう、一二の杯飲つたあとを、必らず／＼、三の杯、三の、三の杯を嘗めて死なねばならぬぞや。

小屋の中に入らむとして、立ち止まり、深き／＼意味ありげに、呼び懸けて、飲まねばならぬ約束ぞよ、こゝを、能う覺悟させられ。

入り行く。

鑄鐘師 (はじめは、雀躍して、大歡喜の體したるが、山姥が言ふ、「最早や過去なり」の言葉を開

くより、顔色青ざめ、はたと倒れて氣を失ふ。しばらくして失神の境より覺め來りて、石の椅子の上に沈み恚る。)一切夢だ、過去つた夢となつた。「過去だ」と山姥が私に言つた。待て、我が、此の我が心、つひに覺えぬ聰明なる我が此の心、自ら心の往く處、返る處の分つた心、此の心で何を迷つて、何爲人にもものを訊ねた。否、それよりも、運命を告げた山姥の今の言葉は、我が生命を斷切るべく、斬首斧のやうに落ち下つた。宣告は下つたり。餘す處は猶豫に過ぎん。

猶豫、が、此の猶豫は、俺に今はの思出ぢや。谿から吹く、冷い風が颯と吹く。今宵が明ける。明け行く初めの光明を以て、立顯る、日、昇る旭、恚く深き雲の線を青白く染め出す太陽、あゝ、今は最早や我ものではない。是までの我が一生涯、その日、其の日の日輪を仰いだけれども、今顯る、日天の、第一の曙光はもはや、我がためにとては輝き給はぬ。

一の杯を手執りて、

御身來れ、杯の君よ、時刻迫りて大恐怖を我に齎らす、其の前に、いざ、汝と接吻せん。うむ、黒い點滴が、おまへの底に光つて居るな。一雫の名残の露か。やあ、山姥、唯是だけの滴なんか。可し、可し。(と飲む。)

次は御身、二の杯の君、來れ。いざや。

二の杯を手に執りて、

君あればこそ私は第一の杯を飲んだのだ。美しき貴き、御身、我を酔はす力と香とを有てる君、君微りせば、何の、たとひ、おん神が此の世界に誘ひたまふ——宴會とても、如何に寂しく、みすぼらしいものであらう。君もしあらざれば、客になる人間も、君にふさはしく飲む事はしない。あはれ、美しき貴き君よ、私は貴下に、感謝する。

この杯を飲みて、

あゝ、美味い、此の酒は。あゝ。

エオリアの豎琴より響くが如き、幽に妙なる音、何處ともなく空中に染み渡る。

此の間に飲み畢る。

山姫、面影太く疲れたるが、然も眞實に池の中より露れ、池の縁に腰打掛け、長き捌いたる

髪を梳る。

残月、姫の顔ともに蒼し。

單身にて歌ふ。

山姫 (低聲にて、)

夜の、夜中に、唯一人して、

解きます、梳きます、黄金の此の髪、

美しや、朗姫は美しや。

鳥は旅する、狭霧も歩行く、

草の彼方に火が燃えて、原に幽に火が燃えて、……

池の精 (池の中より、聲のみして) ラウテンライン! [朗姫]

山姫 はい、今行きます。

池の精 疾う來んがか、何さらすがか、

山姫 (唱ふ。)

悲し悲し、棲合はぬ、

あゝ、胸合はぬ小夜衣、

あゝ、あはれ呪詛はれた、池の女に成果てた。

池の精 ラウテンライン!

山姫 今、行くのに、ねえ。

鐘 沈
池の精 疾うせんがか、遅いぞ、がくがく。

山姫 (唱ふ。)

明月の、月の、あかりで、髪梳る、

解くにも梳くにも、戀しい御方。

吊鐘草の、あの歌は、

嬉しいとてか、悲しいとてか、

二つを一所、

と私は聞いた。

下りよ、入らう、時刻が移る。

あゝ、水の中、藻の中へ、

此處に居過ぎた、長過ぎた。

下りよ、入らう、藻の中へ、

再び池に隠れむとして、

山姫 あら、誰か、幽に、幽に、私を。

鑄鐘師 おゝ、私だ、朗、私だよ、朗、私なんだ。

山姫 ど、な、た、なの？

鑄鐘師 私だと言ふに、傍へおいで、此方へ来て見い、直に誰だか分かるから。

山姫 否、お傍へは行かれない。私、貴下を存じません。お歸んなさい。よう、私と口を利くと、

人間は死んで了ふ。

鑄鐘師 えゝ、駄々を言つて弱らせる。まあ、来い、私の手に觸つて御覽、誰だか分かる。

山姫 私一度も、お目に懸つた覺はないもの。

鑄鐘師 知らない、お前が私を知らんと……

山姫 然え。

鑄鐘師 見たこともないと……

山姫 ありません。

鑄鐘師 何うしよう、あゝ死んだが増だ。

それ、痛いほど、お前の唇に口つけたことはなかつたか。

山姫 無いの、眞個に、そんな、あの。

鑄鐘師 ぢや、何か、お前は何か、曾て一度も、お前の口を私には。

池の精 (池の中より、尙ほ形は見えず) ラウテンデライン！

鐘 沈
山姫 は、はい、唯今。

池の精 歸れ、え、。

鑄鐘師 呀、誰か呼ぶのか。

山姫 池の中の、私の良人よ。

鑄鐘師 拜む、此の私の悶躁き苦むのを見てくれろ。姫、世の中の生活の戦争の苦みぐらるでは決して見られないほどの、恐しい瘰癧を起して、空を掴む、此、此、え、此の言はうやうな
い苦痛を。

後生だ、これ、失敗した敗残の人を苦しめてくれるな。救つて、救つてくれ、私を救つて。

山姫 救へつて、私に、何うして貴下を？

鑄鐘師 まあ、此處へ、此處へ来てくれれば可い。

山姫 其は出来ない事だのに。ねえ。

鑄鐘師 何、出来ない？

山姫 はい。

鑄鐘師 何爲だ、何爲だ、何爲だ。

山姫 あの、私たちはね、池の中で、りん／＼／＼と踊つて居る、面白い踊りの。私、踊が大好き、でね、兩方の脚の重い時も、燃えるやうな時も、踊を躍ると、直ぐ治るの。さやうな

ら、御機嫌宜う。

鑄鐘師 何處で踊る、え、何處に居るんだ。な、何處へもいつちやくくれるなよ。

山姫 (池のへりまで、逃げながら) 何時の世までも、遠い、遠い處に。

鑄鐘師 あ、あ、其の、其處の……三ツ目の杯を取つてくれ。マグダ「玉木」杯を、玉木、

お前か。お、お前の顔の色の悪いこと、其の青さは何うだ。……玉木、其の杯を私に。杯を

さへくれるものなら、私は、偏に、其の人を祝福するんだ、取つてくれ、構はん、誰でも、誰
でも。……

山姫 (衝と鑄鐘師の身近に寄りて) 私で可いの！

鑄鐘師 お前が？ 取つて、くれるか。

山姫 所詮、それなら、私が然うして上げたいの。亡くなる人を安らかに眠らして上げたいの。

鑄鐘師 祝福する、お前を感じる、お前の月の顔を。

山姫 (次第に遠く彼方へ) 然やうなら、然やうなら！ 私は貴下のものではない、いつかは、

貴下の戀だつたの。ねえ。あ、五月に、あ、五月に。今はむかしとなりました。

鑄鐘師 過去つたつて！

山姫 はあ、過ぎりました。毎晩々々、歌を唄つて、貴郎を寝かしたのは誰だつたの。不思議な

音楽を聞かせては、毎朝、毎朝、貴郎の夢を覚したのは誰だったの？

鑄鐘師 言はないでも、誰なものか。

山姫 誰？ 私なの？

鑄鐘師 ラウテンデライン！

山姫 新しい、手と手と、足と、身体まで、貴郎に上げたは何處の誰？ 池の石を突落したのは、

何處の誰なの？

鑄鐘師 お前でなくて、誰なものか。

山姫 誰？ 私なの？

鑄鐘師 ラウテンデライン！

山姫 もう、然やうなら、然やうなら。

鑄鐘師 私を静に、後生だ、下に連れて行け。今来る、夜が今来る、夜が来ると、何者も隠れね

ばならないのだ。

山姫 (堪へず、鑄鐘師の許に飛び来りて、其の膝をしかと抱きたるが、フト歡呼の聲高らかに)

日が出ました。

鑄鐘師 太陽！

山姫 (半ば歎歎しつゝ、半ば歡喜しつゝ、)

ハインリヒ!!!

鑄鐘師 あり、がたう。

山姫 (鑄鐘師を抱きつゝ、其の唇を、鑄鐘師の唇に觸れて、じつと接吻する——死に行く人を、

心優しく、淺茅生の旭の露の玉敷かせて、)

ハインリヒ!!

鑄鐘師 空に高く、日輪の鐘鳴動く、轟!

おゝ、太陽……日の出、日の出!——あゝ、夜は長い。

曙 光。

かきぬき

白鷺の一二節

連引の一節

雛子表口より入り来り、女中のお澤に、

雛子 今晚は、澤ちゃん、どちら、

お澤 下の六疊ですよ。

雛子 さう。

と内へ入る。

雛子 入らつしやい。

孝 おい、あやかりものと云ふのが一人、ぼツねんとして居るんだぜ、頼むよ、姐さん。

雛子 お待遠さまでしたね、だから早速駈けて来たわ、お、熱い。

と耳をおさへる。孝、其の頬を一寸突いて、

孝 ヘン、十七八ぢやあるまいし、いやに初心ぶるない。いや但し三代目の若旦那、ちよびと其處へ迷つたね、此方も、お、熱い、お、熱い。

額を叩いて、頤なでの、すべりと顔をしごきながら、わざと後を向く。其時思はず伊達氏の畫に目を着ける。

孝 や、伊達先生の畫だ、不思議な處に、(とジツと見て) あ、あざやかだ、雛子見な。

と繪の講釋をする。

雛子 あまえるやうに、

雛子 そんな事より此方を書いて頂戴よう、顔を見せて下さいなねえ。

孝 これ、手前も自前の姐さんだ、ひい／＼たもれぢやあるまいし、些と世帯氣を出さないか。近頃は何にでも主義と言つてな、諸事其の勤儉貯蓄がはやる。早い話が八ツ九ツの小學校の生徒にも、一錢、五厘と貯めさせらあ。色事も其の通り、ぱツぱと使ふと、もと金がなくなるからね。惚込んだ男の顔もなりたけ少しづゝ見るがよし、可愛い女の顔だつてなし崩しに見るが可い。私も其の主義でね、かう水入らずに逢つた時でも、わざとうしろ向きになつて居て、けちにチビ／＼と其のお美しい處を拜見します。可いかね、眞に以つてお目出たい、お正月の色事といふ、ソレ、背中合せのウ松飾り。(と節で行く。)

雛子 あら貴方は薄情ねえ、朝から晩まで恚うして居ても、私は貴方を見あきはしないわ。

孝 あ、然もさうす、然もありなん。私は一寸其處へ出りや……其年増よし、新姐よし、地も

の、いき事、勝手次第、浮氣筋が突張るたんびに、顔色が何と、可愛くなつたり、り、しくなつたり、或は苦み走つたり、然うかと思ふと、蕩けたり、紫陽花ぢやないけれど、せつ／＼に變るから、其處で見飽きはしないんですがね、お前といふものは融通が利かない、勝田の孝ちやん一點張と言ふもんだから、顔色に變りがない。お目とめられて見た處で、いつでも雛子は雛子さね。こゝで取つときにして置かないと、ぢきに飽きて了ひます。飽きちやお前が困るだらう。乃ち見たいのを我慢して、顔の貯金をするんだね。あゝ、此の位世帯氣がある男に、親仁はなぜ身上を渡さなからう、雛ちやん以つて如何となす。

とそつぽを向きながら言ふ。

雛子 えゝ、憎らしい。

孝 誰かは可愛いと言つたつけ。

雛子 あゝ、口惜しい。

孝 此の蚊遣火の工合を見な、お前の妬くやうなもんぢやない。

雛子 黙つてつねる。

孝 あいつゝ、酷い藪蚊だ。(と繪に向ひ手をついて) 伊達先生、繪のおん功德をもちまして、藪蚊を退散なさしめたまへ。……

といふ處へ、けはひして小篠二階から下りる。

孝、目くばせして雛子と障子をしめる。

天王寺

津川 これは、伊達さんの奥さん。

邦子 まあ、津川さん、お珍しい。

津川 何とも申譯ございません。御不沙汰ばかりいたして居ります。しかしおそくさいで何より

でございますな、お兒様は。

邦子 もう、わんぱくにばかりなりましてね、手が懸りまして困るんですよ。

津川 今日、先生のお墓まりで在らつしやいますな。

邦子 唯今歸ります處です。あなたは。

津川 いや、私は、今日は先生の御命日ですから、一寸お参りをいたしました。

邦子 それは、まあ、貴方もお事おほの中を難有う存じます、伊達も嘸ぞ喜びませう。

津川 何の、お喜び處か、御生前もあゝやつて、お客が朝晩つめかけて、お忙しい時はお弱りなすつた。おなくなり成りまして、絶えずおまゐりがありますさうで。唯今なんぞも私と

もに三人、向うへ二人、左へ一人、來るのも歸るのもありますやうな次第。いや、手前など參るのは、定めし御迷惑と存じますくらゐな事で、は、は、(とさみしくわらひ)しかし、お喜びなさいまし。

邦子 お恥しい、おきに胸が迫ります。

此の時木魚きこえる。

津川 あ、早いもので、昨日今日と存じます中、最うこれ、四年に成りました、上のお嬢さんがお十……一でございませぬ、失禮ながら奥様は。

邦子 あの、津川さんが御懇意の、内の稲木さんと同じでございませぬよ。

津川 成程、道理こそ稲木君もまだ若い、女房もちのやうには見えませぬ。あひかはらず、一寸一寸……お伺ひ申しますか。

邦子 どなた。

津川 稲木君でございませぬ。

邦子 宅へは久しく見えませぬよ。ですが、評判も悪くないやうで、私も嬉しいんでございませぬ。

津川 餘りいゝ事はありません。お宅へ御不沙汰をするなんて、それは不都合でございませぬ。

邦子 否、雜司ヶ谷と根岸です、もう世帯持ですもの、隙のないのは察して居ります。あの、津川さん。

津川 は、

邦子 ですけども、餘り築地邊へは行かないやうに、些と然う言つてお上げなさいまし。額に手をあて、

津川 何とも、然うおつしやられますと、當人より、はたの私が冷汗でございませぬ。

邦子 どんな藝者、津川さん。

津川 何、貴女、一向詰らない。

邦子 大層御様子が可いんですつてね。

津川 どういたしまして、いやもう。

邦子 そんなにおかくし遊ばすやうでは、貴下もおむかうのお味方でございませぬ。

津川 や何うも、實はそれが、自然おき、およびでもありませんが、唯今は板新道の、以前は濱町の辰巳屋の娘で、お篠と言ひます、先生が御眞眞だつた婦人なのでございましてな。

邦子 あ、私も聞いて居ります、評判の美しいんですつて、……つい此の間も墓詣りに來てくれましてつて、……此の店のお婆さんが、店を了つて、晩方歸りがけに墓の前を通りますと、

女學生の方やなんか然うした處は、いつも見掛けますさうですが、吃驚するやうな様子やうすのい、
 のが、お花の前に、眞白な手を合せて泣いて居て、漸々立つて、お線香の煙を見返りく寂し
 さうに歸るんですとさ。横から出た代議士風の二人連のが見送つて、あゝ、小篠だ、新橋の、
 と然う言つたのを聞覚えて私に話して聞せました。津川さん、伊達が達者で居ます時分、まだ
 あちらが料理屋さんで居た頃も初終心がけてはね、重詰ものを届けてよこす、初物を持たせて
 よこす、つい亡くなります二日前には、其年はじめて拵へた新ぐりのきんとんだつて、使つかに持
 して寄越したんですよ。何て氣のい、優しい、と私然う思つて居る人です。其が、あの。稻木
 さんの。

津川 いや、最う、妙な譯でございましてな。恚う申しては奥さんの前ですが、小篠は實に御生
 前から、伊達先生にはぞつこん生命がけて居りましたんで。御存じの、先生はあゝ、酒張りした
 御氣象なり、茶屋小屋の姐さんでも惚れたとなりや生娘同然、婦の方から、どうの、恚うのと、
 そりや淨瑠璃のやうな譯にや参りません。精々お汁粉のお取膳。杯洗がなくつちや、ついお杯
 も差上げられない、と云つた處でおかくれになりました。それから此方、客もなし、いろもな
 し、かたはか、と人が言つて不思議がるほど操を立てます。まあ、今時にやない事で、本人尼
 に成つた氣でございませう。誰も居ないと、一人で二階にぼんやりして、嫁にゆきたての娘の

やうに、自分の箆たんすにくつついて、主人や他人の中なれば、床の間も使へません。で、其の箆
 等の環くわんに先生に描いて頂いたと云ふ、はんせつものを掛物にしたのを掛けて、うつとりして居
 ると成つた日にや、黙つては居られせん。
 餘り可哀相でございませうから、私餘計な事ながら、せめてもの心ゆかし、稻木君はアンナ人、
 逢はして話をさせて遣つたら、兩方が先生の事で氣が合はう、小篠もどんなにか嬉しからうと、
 實は、なりたけ近づけるやうに、近づくやうに計らひました。分別盛が不心得、奥さんに冷汗
 と申しますのは此處を言ふのでございませう。で、然う言ふ次第でありますから、今以て二人の
 中に關係があるやらないやら、私は、先づ、あるまいと思ふくらんで。恚う言つちや勝田の孝
 さんなんざ、一口に、ナニ關係がないなんて、ソナナ事があるものかと笑ひますが、私は何う
 とも判じられせん。しかしとも角、兩方ものぼつた事はのぼりました。申すまでもありま
 せんが、男も女も身の詰り。早い話が、打棄つて置きますと、情死しなけりや女一人で死にか
 ねない羽目に成つて居るのでございませう。私が意見しようにも、ゆきがかり上、如何に何でも、
 些とはこれでも江戸生まれ、娑婆氣もある男が、五百と千と懷中に入れて居ないと、捌き役に
 中へ入つて、ボンと灰吹が叩けません。で一方が遠ざかり、一方が我慢をしますやうに、どち
 らか一人、奥さん恐縮でございませうが、あなたから、御意見を下さいますやうに、ありやうは、

其の御相談に、これからお宅へ上りませうと、其のつもりで出て参つたのでございませう。

邦子、じつと聞いて居て、すつと立ち、

邦子 津川さん。

津川 え、

邦子 お供まをませう、御一所に入らしつて下さい。御相談がしたうござんす。實は私も心配で、今日あたり見えますやうに、孝さんも呼んであるのでございませうよ。

津川 いや、そりや、よくお心が付きました。お情深い。

と云ふ處へ、孝いそいで来て、つと行きぬけようとする。

津川 よぶ。

津川 勝田の、勝田の。

孝 はてな、婦の聲なら知らぬ事、谷中くんだり墓近で、野郎の聲で呼びとめるは高利貸の亡者ぢやないか。

とわざと饒舌つて、

孝 やあ、娑婆以來だね、津川の叔父さん。

津川 叔父さんはひどいね。(とにがわりひ。)

邦子 叔母さんも居りますよ。

孝 あつ、(と驚き)奥さん、何うもこりや、何うも失禮。昨日は又お手紙で。早速昨夜にもお伺ひ申します處、些と其の、些と其の外出を。

邦子 夜分。

孝 は。

津川 何方へ。

孝、濫い顔する。

邦子 築地邊ですか。

孝 はあ、はあ、え、相曳橋あたりへ、近頃其の獺が出ますと言ふ評判だものですから、坂田の金時、探検に参りましたやうなわけ。

邦子 順一さんも御一所なの。

孝 え、何、兄哥は早や、あれは早や、奥さんがおなかうどを下さいました、私、姉じや人お稻と云ふのと、唯もう雜司ヶ谷の森に巢をくつて、梟の鳴聲にさへ、ぶる／＼ものでくつついたつ切。何うしてあなた、獺の探検處ぢやありません。え、何うぞ其の邊は御安堵遊ばし、え、下しおかれませうやうに——ねえ、津川さん。

津川 如何ですか。

孝 如何ですかつて、知つてる癖に。然うく然う！ 久しく雜司ヶ谷へもお見えに成らないつて、姉が怨んで居りましたつけ。津川さん、いや私もしばらく。さて、奥さん、結構なお天氣で。

津川 孝さん、孝さん。

孝 は。

津川 君のやうでもないぢやないか。誰だと思つてさ。伊達さんの奥さんだ、皆もう御存じなんだよ。

孝 皆、御存じ。はあ、姉の奴がいつ、け口、奥さんに。卑怯未練な、だから言はないこつちやない、絶交です、最う、妬くなんてそんな奴あ、姉とは言はせない、勘當だ。

津川 勘當されてるのは君だらう。時々小遣をねだるつて、お稲さんが言つてましたぜ。勘當されるとなりや、姉さんの方が仕合せだね。

孝 あつあ、勘平、かくまで、武運に……

邦子 孝さんはのんきで可いのね。

眞面目に成り、

孝 奥さん、のん気なものですか、私は血眼なんですよ。

邦子 何うしてね。

孝 馬鹿兄の事についてですよ。津川さん、いやはや、あいつと言ふものは。

津川 君、君、奥さんのお手紙も、實は其の事について君に御相談がおあんなさる。……奥さん、此處で御話し遊ばしませんか。

邦子 落合しましたね、伊達が引合せたのかも知れませんが。

孝 先生がお引合せ、は。

とかたくなる。

夫人、しんみりと、

邦子 あのね、孝さん。

孝 恐入ります。

邦子 いえ、そんなにおとなしくおんななさるとお話がいたしにくくつて不可ません。何にも言ふことはないんですがね。それは若い方ですもの、順一さんだつて遊ぶのは當前。だけれども、此の頃は何ですつてね、方々へ出歩行いて、知合ひの顔を見ると、繪を描かしてくれ、安くする、いくらでも可いなんのつて、人の風説ちやあるけれど、押賣とまで悪口つく。どうか、お

き、なすつたら、先生は先生で、何うお思ひなさるか知りませんが、内の人が、然う言はれると、女の私は口惜いのよ。孝さん。

孝 だから、だから言はないこつちやない。姉に身賣をさしたつて、要る金子なら拵へる、押賣なんざあ、なさんなつて、私は兄哥に言ふんだのに。

邦子 あ、孝さん、姉さんに身賣をさせるなんて、お稲さんは私がかうどした大事な人です。

津川 奥さん、申戯でございます。

孝 申戯ぢやありません。

津川 申戯でなくつて何うするのさ。

孝 實際です、眞剣です。殊に此の二三日は血眼です。一晚の内に三度、勘當された親仁の内へ盗賊に入つて、三度も見附かつたんです、だらしはない。津川さん、何を何うとつちたか、幾千か纏めて拵へろつて、雛の奴にもいひましたかね、あまもこれにやかぶりをふる。恚う云ふ中にも鬼の牙は、小篠の、あの頸にかゝつて、爪が縋子の帯を掴んでます。ぐい、と引きやほどけるばかり。すんでに一昨日の夜なんぞ、青巖入道にせりつめられて、待合の裏堀からはだして遁出した一件でせう。遁げたが遁げたに成りますか。一度は帯でのがれても、二度目は扱帯へ手がかゝる。八方からくもの巢がらみで、金子で縛つてある身體。血を吸はれるのは今

の間で、然うすりや活きては居ますまい。奥さん、何だつて世の中に、藝者が操を守るほど、無慙な事はありません。

邦子 孝さん、其の入道つて、どんな人、矢張り清盛のやうなんですか。

孝 清盛にも、やもりにも、あなた、狒々と鮓をでつちて、狼のころもあげた、……しやこのてんぶらのやうな奴ですよ。

邦子 孝さん、どれだけあれば助けられます。

孝 え、。(と解しかねる。)

津川は静に、

津川 君、お篠さんの借金は。

孝 雛子の奴にも探らせたがね、雑と千圓ばかりあると、商賣だけはやめられるんです。

邦子 私立替へて上げませう。

孝 何とおつしやる。(と孝驚く。)

邦子 話を聞いても憎らしい、其の入道とか云ふ奴に、私が自分で、帯の端でも引かれたやうで、慄然として、人の事とは思はれない。可哀相に……お篠さん。伊達が眞にした人を、死ぬほど嫌ふ可厭な奴に、玩弄物にさして可いものですか。孝さん、私が出します。ですが、兒ども

たちへ、伊達がのこした金子ですから、私の自由には参りません、貸しますわ。順一さんを取りよこして下さいまし。

孝、目を拭ひつゝ、黙つてうつむく。

津川 奥さん、何とも申しやうはありません、私も、如何にも思案に餘りましたが、これはお救ひを仰ぎます。處で、其のお金子でございます。稻木君へとおつしやらずに、孝君にお貸しほどの願ひたう存じます。もう、此の思召をき、ますと、稻木君は腹切道具、お篠も餘りの忝なさに、喜び死に死にませう。で、孝君にお貸し下さい。及ばずながら津川三策、近頃不工面でございますが、生き香奠を集めましても、やがて、お返し申します。

孝 奥さん、親仁が死んだら〜と其ばかりを待つてます、怪しからぬ其の私も、お志で涙が出ます。私にお貸し下さいまし。兄の奴におつしやれば、申譯なさに死にませう。が、あゝした男でもなかつたが、…近頃のうろたへ方ぢや、悪くすると、手を出さないと限りません、けんのだ。然うしてのめ〜あなたの袖から、小篠の身の代を受取りますやうだと、義理の兄でも兄哥は兄哥、そんな料簡のくさつた奴は、弟として刺違へなけりや成りません。孝にお貸し下さいまし、いつまでも死ななけりや、私が手で、ちやんころを殺しましても、吃とお返し申します。

邦子 否、お返しには及びません。が、女の私が差上げるとは申されません。無理をしないで、孝さん。津川さん。御心配なさらないで、ある時ばらひになさいましよ。やどには私がよく然う申します。(と肅然と立つて、遠く墓ある方に向ひ)あなた、あなた、御遺産の中から一千圓、邦が拜借いたします。何に使ふと、つかひ道を、お問ひ遊ばす方ではない。何うぞお貸し下さいまし。

孝下(たかし)に居て、うなだれる、津川(つがは)立つて禮拜する。

邦子 あゝ、達者でおいで遊ばしたら、(と涙ながら氣をかへて)孝さん、お篠さんは三味線が上手ですつてね、話が濟んだら、遊びにつれて来て下さいよ。お佛壇の前で、先生がおすきだつた歌澤を御無心ませう。一寸、孝さんの咽喉か何かで。(と莞爾する。)

孝 はつ。(と恐縮。)

津川(つがは)が、

津川 色男、當りましたね。

若鮎の一節

孝、雛子とともに、遮るものを突退けながら、飛んで入る。

孝 や、自殺した、え、何をまごく早く醫者を。(と待合の女房を追やつて) 小篠、小篠、小篠さん、孝が来たよ、お篠さん。氣をつけろ、お雛……さあ、此の婆々、どかねえか。(とお蟹をつきのける。)

お蟹 何だねえ、何ですねえ、お前さんは、竹家の藝者をわが物顔に。こりや内の商ひ物でございますよ。はい、大枚七百兩といふ資本が出た抱へです。此の人の生死は七百兩の分け目だから、私が介抱をしないぢや、御主人へ申譯がありませんのさ。

孝 喧しい、三途河め。江戸前とりたてのお兄いさんが夕河岸から跳込んだんだ。初松魚の懸値ぢやねえが、其の七百兩承知だ。言句をいふな、ばりくと音がす。ソレ、指の先に唾をつけるな、きれいに敷へて、器用に受取れ。

お蟹 チャツと手を出す。

孝 待ちな、其處に居る五坂ぢやねえ、出し手が曾我の弟だ。若宮口で拾つたなんぞと怪しむと不可いから確な出處を言つて聞かせる。これ、旦那取をしないために、小遣ひに困つてな、可いか、車屋に出す祝儀もない、お篠さんが、竹家へ返す金子の爲に冥土へ住替へて拵へた身代金だ。分つたか。娑婆の奴にや分るめえ、閻魔様の御祝儀だ、七百兩、地獄の祝儀は豪勢だぜ。懐へ入れて見ろ、金の湯氣で、ぼつくとほてらあ、手を出せ。さあ。

お蟹、おくめんもなく又ぬいと手を出す。

孝 お、出したな。(とグイと引いて、孝、お蟹の襟首を取つて引伏せ、お篠に向ひて) 常日頃可哀相に、どんなに口惜しかつたらう……伊達の奥さんのお情で、お前さんをひかせるんだ、安心おしよ。

雛子 嬉しうでせう。姐さん、姐さんはもう藝者ぢやない。辰巳屋のお嬢さん、憎らしい奴が大勢居る。毒づいてお遣んなさいよ、口を利いて下さいよ。(と泣く。)

孝 さあ、小刀針で、突いたり、揉んだり、さんざ、お前さんを苛みやがった、此奴の面を、紙幣の束で、叩いて遣んな。(と手を引張る。)

雛子 あれ、動しちや不可い事よ。(と雛子とめる。)

孝 む、と心付いて、其ま、代つてお蟹の横顔を金子で打つ。

お蟹 どうぞ、もつとお打ち下さいませ。打たれても叩かれても、こればかりは悪い氣のしなないものさ。

とお蟹へらす口をきき、倒れて居ながら紙幣をつかむ。

孝 え、血のない蟲だ、放して遣れ、盆になつたら禮に來い。

と引立てて、突放す。お蟹金子を一寸頂く。

お蟹 大切な御主人に損をさせまいばかりに、打たれるやら、踏まれるやら、御見物には憎まれる。こんな座敷は箱屋なみの御祝儀五十錢ぢや、うまらない。

と引込む。其の時、先刻から、かつとなりて、身もだえをして居た五坂が、

熊次郎 酒だ、酒だ、酒もて来い。

と怒鳴る。襖の蔭に女ども立ちかゝりながら、ドキマギして、誰もとり合はぬにむツとして、突立つて、襖から出ようとする。

孝、見て、

孝 待て、野郎。待て、待ち給へ、紳士。お待ち遊ばせ旦那。(と言ふ。)

お蟹 何だ。(と立ちはだかる。)

孝 卑怯だ、遁げるな。

熊次郎 黙れ、血を見て顛倒するやうな五坂でない、酒を取りに御足勞ぢや。

孝 ぢやあ、御隨意になさいまし。

五坂、一度入る。

孝、こらへた涙を一度に泣いて、

孝 刃物は何だ、あ、懐中の萬能鉋か。(と其處にある懐中鏡に目をつける)お、はな紙へ紅筆で、お雛、早く見な、書置ぢやないか。

雛子 あ。(と取つて、捻つたのを解く、鼻紙の中に五十錢の銀貨あり)年ちゃん、さくらんぼを買つてお食べ(と讀んで、ハツと泣く)兄さんが途中でお上げなすつたつて、貴方がお話しのおたからよ。あれからすぐに連れて來られて、まだ年ちゃんの顔を見る隙もなかつたんだわねえ。

これより以前に五坂出て居て、獨でビールを呷りながら、

熊次郎 いや、ほえるわ、泣くわ。フワハ、ハ、。

とやけに嘲笑ふ。孝、向直つて、

孝 手前に遣るものがある。いや、御前、お肴を獻じませう。おい、何だと思ふ。三寸ばかりでキラリと光る、若鮎のやうでもあるし、一目見ると悚然とする、男の魂に肖たものよ、ソレ。(とトギくした小刀を取つて、懐中から投げて出す。)

五坂、片膝立て、手に取つて熟と見る。

孝、構はず小篠の背に手をかけて、

孝 お篠さん、確りおしよ、死ぬんぢやないぜ。……死、死んでも生きて居ておくれ。幽霊にな

つても、化けて出ても、屹と私たちに逢ふんだよ。

熊次郎　へ、ン、状を見ろ。女郎、口惜しくば化けて来い。鐵如意で、一撃ぢや。(と小刀を擲つ。)

孝、振返つて、

孝　贅澤なことを言ふな。うらめしいの、口惜しいのツて、敵の内へ取着くのは、田舎もののお化に限る。江戸兒の幽霊が、嫌な奴の門端へも寄附くもんかい。恚う、そして折角、遣つたものだ。棄てちや下可え、卑怯な奴だ、其の小刀を受取んなよ。

熊次郎　む、受取つたが、さあ汝、何うする、切る氣なら、さあ、切つて見ろ、見事切れ。(とどしと詰寄る。)

孝　慌てなさんな、慌てなさんな、小篠が無事で居る内なら、汝を初め、めすをすの死人の山を築いてなりと、引背負つて連出さうと、其の、覺悟で飛込んだが、一足おくれて残念だ。最うかうなつちや世間並よ、人を殺しや自分も死ぬ。汝たちと江戸兒が生命を取替へて堪るものか。汝も會社の重役なら、商賣人だ、考ろ。算盤珠に合やあしない。私が生命をくれて遣るのは、惚れた女と鐵砲汁よ。……懨か、汝の息の根を止めるとな、くさり魚の臭のする人魂になつてぶらつきやがつて、お篠さんが自動車に乗つて通る、冥土の路の目障だ。うぬが手で首を切つ

たつて、あれ髻を見や、やにの下つた煙管も同然、眞鍮の雁首なんぞ、早織の粉で繼いで遣ら。畜生、くたばつても土性骨を踏んでよみがへらせるぞ。安心して早々と歸れ。これ、稻木の順一、勝田の孝ちゃん……なんぞが、ちら／＼目につく江戸へ来て、女を口説くも凄じい。汝のやうな肥料桶かつぎに自由になるのは、女の子の身に取つちや、雲隠の中へ投身げをするも同じだ。ねえ、お篠さん。……これにこりろ、溝漬茄子。よその女に手を出す隙に、日本中にたつた一人の大事な噂々の番をしろ。これ、虎まだらのふとつちよはな、あの圖體で浮氣だだよ。大阪仁輪加や浪花節を買つてるさうだ。不便や、女の食ひあげしようぜ、ぐ／＼しねえで早く歸つて間男されねえ用心しろい。

熊次郎　二才め。(と五坂、いまの小刀をグツと構へて威す。)

稻木順一　つ、と入る。五坂これにて猶豫ふ。

孝　兄さん。

雛子　おそかつたわねえ、小篠さんが、こんなになつたわ。(と雛子泣伏す。)

順一　お篠をしつかと抱き、五坂と屹と顔を合せて、

順一　五坂さん、暫くだつた。更めて紹介せる、こりや私の女房だ。

五坂小刀でつつかゝる。

小篠 夢見るやうに、皆、聞いて居ました。あゝ、嬉しい——御機嫌よう。

順一 さあ、突け、突けるなら突いて見ろ。君には家がある、邸がある、地所がある、財産があ

る。其に未練のあるものが、何うして人を殺し得よう。君の貯めた銅と鐵が、私の爲には楯と
なる、鎧となつて、私を庇ふ。切ものなんぞ愚な事、手も足も出るものか、何處からでも懸つ
て来い、金錢に目の眩んだ奴が、繪工の顔も見えるものか。
五坂これにて又ためらふ。

孝 さつさと歸れ、汝が居ちや、お篠さんの疵口が汚れるんだ。

思ひ切つて、

熊次郎 覺えてをれ。(と襖を蹴て出る。)

順一 お篠。

孝 お篠さん。

雛子 小篠姐さん——姐さん。

時の鐘寂しく響く。

小篠 あ……い。

と、これまで人事不省の小篠、うつとりと幽に目をあく。
順一の手をじつと取つて、

稽古扇

札所長屋
雁々松

人物

お藤 (扇橋の踊娘)

船蟲の紋次 (地まはり)

お光 (娘)

一次。二九郎。三十 (ごろつき)

喜藏 (車夫)

兩換屋勘右衛門 (地主)

おせき (差配の娘)

川邊旬作 (區役所のやとひ)

長三郎 (大工)

お三輪 (地主の娘)

柏木信夫 (子爵家の世子)

鐵砲の平碌 (按摩)

お綱 (女髮結)

上、札所長屋

團扇太鼓の音にて幕開く。

お光 お、賑かだ、講中が通るんだよ。一寸、かみゆひさん、此處から見えるでせう。

竹格子の出窓の戸を開ける。此の窓の下に、川邊旬作の机、本箱、葛籠などあり。

お綱 (お藤の藤色のきれ、ふつさりした結綿の鬢を撫でつけながら) 戸外を通るんぢやありませんよ、お光さん、角の地主様の内で、近所の人たちが集つて敲いてるんですよ。

お光 おや、然う。何かあるの？

お綱 あ、ね、地主様のお嬢さんが、頼母しいぢやないか、三年越の戀が叶つて、其方がお婿さんに極つたものだから、豫て願掛けをなすつた、池上のお祖師様へ願ほどきのお禮に、見事なね、繪の額を上げなされるの。旦那も洒落た方だわね。それが大びらなんでせう。近所の少い衆が類似るとつて、あの通りさ。額を取巻いて囃立てるんだよ。而して今夜、皆で池上へ送るんですよ。

お藤 (姿見に向ひながら、聞いて居て) 一寸、待つて下さい。(とお綱の櫛の手をとめる。)

お綱 何うしたの。

お藤 急に煙草が喫みなくなつたの。是非喫まなくちやならないの。

お綱 我儘だねえ。

お光 随分だわ。

お藤 堪忍して下さい、濟みません。(と長羅宇で吸ひつける。煙草入は自分の帯から抜く。)

お光 あら、何うしよう。随分だつて、私、貴女の事を云つたんぢやないの。其の地主様のお嬢

さんの事なんですよ。皆に然うやつて囃されて、まあ、どんな顔をしておいでだらうねえ。

お綱 土地ツ子だもの、お祭の屋臺に乗つたやうでせうよ。

お光 歸りがけに覗いて遣らうや、貴女、お先へ。

お藤 失禮。

お光 然やうなら、髮結さん。

お綱 然やうなら……光ちゃんも、あやかりに行つたら可いでせう。

お光 お生憎様。あばよ。(と蓮葉に出て行く。)

お藤 (立つて、お光があけた、其の出窓の左右を胸しながら、しめる時、匂作の机の上を見る。)

春色梅曆……まあ、學者ですなえ。

お綱 學者が嚏をしゃあしないか。

と裏口を指して、別の鏡臺の前に片づけものをして居る梳手のお兼と顔を見合せて笑ふ。川

邊匂作は、此の折から水道端で冷水摩擦をして居る。……但し其の體は見えず。

お藤 濟みませんでした。何うぞ。……(と前の座に着いて、肩をすぼめる。)

お綱 寒い。

お藤 悚然しましたものですから。

お綱 襟へ毛でも入つたかねえ。

お藤 否。

お綱 煙草は最う可いんですか。

お藤 否ね、おかみさん。私は、實は、急に一服したく成つたんでも何でもないので。今歸つた方

が、お開けなすつた窓ですから……然う云つちや悪うござんすからね……急に煙草がのみたい

と云つて、此方を向いたんです。……ふつと、あの、氣に成る事があつたものですから、つい。

……

お綱 まあ。何麼事? 少いお師匠さん。

お藤 あれ、後生だから、お師匠さんは止して頂戴。あの……別に、今日に限つたと云ふんぢやありませんけれど、お内ぢや、恚うやつて姿見が立つて、鏡臺が並んで居るでせう。おかみさん、昔、寅待をしたと云ふ話がありますわねえ。

お兼 寅待つて？ 姐さん。(と梳手、不思議さう。)

お綱 あ、寅の年の、寅の月の、寅の日に、紅を點けない鐵漿ばかりの片化粧、捌髪、白装束で！

お兼 可厭な、氣味の悪い、何うするつて云ふんでせうねえ。

お藤 夜よ、夜中ですよ。寅童子、寅童子と心に念じて、熟と姿見を凝視めて居ると、其の丁ど寅の刻に、自分の顔のほかに、最う一つ、違つた顔が、屹と歴々と映つて、スーツと消えますと云ふ。

お兼 まあ。……(と擦り寄る。)

お藤 其の顔が、前世からの約束事で、其の婦の御亭主に成るんですつて。

お綱 其の男に添ふんだとさ、お前。(と梳手に) 澤山古い事でもないとさ。仲之町の遊女が、其の寅待をして、姿見の裡へ、塵紙のやうな顔をした屑屋の影が映つたのを見て、氣が違つたつて話さへあるんだよ。

お藤 私なんぞが、何も、屑屋さんを嫌ふと云つたわけではありませんけれど……でも、塵紙のやうな顔ぢやねえ。……ですから、今窓が開くと、直ぐに其處は拔裏の露地でせう——種々なものが通るでせう。豆腐屋だつて、屑屋だつて——又、どんな氣味の悪い顔が映らないとも限らない、と然う思つたら悚然しました。目を塞いで居りや見えないうですけれども、さあ、氣に成ると、其の癖、なほ、姿見の裡へずつと氣を取つて引張り込まれさうで堪らなく成つたもんですから。

お綱 あ、よく、傍へどいて、お前さん、一服しなすつた。そんな心持のする時は、悪くすると、日中、ひっそりとした、露地の隅ツ子を、魔が通るんだよ。どんな不思議なものが映つて、一生忘れられない、可厭な思ひをしなさらうも知れなかつたんだよ。其の遊女なんぞも、考へて見れば、通魔が魅したんだわね。

お藤 (身震ひして) 最う澤山。それだし……おかみさんも知つて在らつしやる通り、私もねえ……四年越、遠い親類の、踊のお師匠さんの許へ、内弟子に行つて居たけれど、それでなくつてさへ困る中を、親父が飛んだ遣り損ひをする、母様は大病だし——迎もお稽古どころの騒ぎぢやないのですから、家へ歸つて、而してまあ、一時凌ぎに私が藝妓をする事に成つたでせう。……お金子は最う借りてあるし、……先月末までにも、柳橋の其の主人へ、行かなけりやなら

ない處を、母さんの容體が容體ですから、一日のぼしに無理を頼んで、恚うやつて、内に居るんですけれど、中へ入つて、世話をした人の義理にも、然うまで遊んでは居られません。……あつちやならない事だけれどね、母さんに、もしもの事のあつた時、更めて内へ歸して貰ふまでも、明日は、是非披露と云ふ事に極つたんですもの。——黄道吉日なんですつて——願が叶つて、池上様へ額を納める方もあるんだわね。勤めをするのに、何が吉日なんですせう。おまけに、まる抱へなんでせう。……(としんみりして)ですもの、娘と云ふのも今日限——どんな可厭らしい客に逢つて、死ぬほどな思ひをしようやら。……手拭と扇子を持つて、大いお師匠さんのお供をして、お邸や町方のお座敷を勤めたやうなわけには行きますまい。……そんな、こんなで、自分でも、不思議なほど、窓が開くと、私と一所に姿見に可厭な顔が寫りさうで、氣味が悪くつてならなかつたんです。

お綱 おなじ流れの身だつても、おもしろづくに、浮いた人もある中に、お前さんの氣象ぢや、眞個ねえ。私はお察し申しますよ。

お藤 ありがたう存じます、おかみさん、それにね、此の間からお頼み申して置きました、あの方ねえ。

お綱 む、お前さんの情人かい。

お藤 まあ、知らない。(と云つて、傍の梳手に一寸氣をかねる。)

お綱 (心付き)可厭だ。話に引込まれて浮つかりして居た。お兼坊、ぢや、お前、出掛けな。

お兼 はあ、お師匠さん、何方から……

お綱 廻りぢやない、遊びだよ。(云ひかけてお藤に目ませで)……來なさるんだらうね、其の方向が。……明日披露をするくらゐぢや、おなごりに、今日のうち。

お藤 え、ですから今夜……

お綱 可ござんすとも、其の段取は丁と出來て居るんだよ。——お兼坊、何時も云つてるお前、お友達の處へ遊びに行つて、活動寫眞でも見るが可い。日が暮れたら寄席へおいで、私が行つてるから。

お兼 では、遣つて頂きます。

お綱 おや、お前、着換へなくつても可いのかい。

お兼 あの……一寸前掛けをとりますばかり、今日あたり遊ばして遣るつておツしやつてでしたから、今朝から、着換へて居りましたわ。

お綱 お聞きなさいよ。呆れたもんだ。

お兼 少いお師匠さん、御緩り。

お藤 お兼さん。お樂み。

お兼 あら、貴女こそ、おほ、ほ。

お藤 (唯莞爾する。)

お綱 生意氣お云ひでないよ。

お兼 (門口を出る。)

と其處へ、川邊句作。木綿の綿入を裾長に、井戸端から來て行逢ふ。

お兼 まあ、長いわねえ。

句作 然うか。……(となまぬるく引張つて) 髪かね、(とあたまに手を遣り) 裾かね。(と帯の下を覗く。)

お兼 鼻の下ぢやない事よ。

句作 何かい、(と顔を撫でて) 何處へ行くかね。

お兼 (突然にドンと背中を一つくらはして) お樂み!……(とばたく、駈出す。)

句作 (けろりとして) へ、へ、へ。

と大な襟の附いた紀州ねるの縞の襦衣。だらりと太く手の甲へか、つて長し。其袖口の釦をはめながら、件の裾長にて、むんじりと内へ入つて、一目、お藤を見ると、棒を呑んだやう

に、しやつきりばつて、舞臺の眞中へ突立つて、じろり、じろりと見る。

お綱 (此のうち長火鉢の火を見て、鐵瓶を掛けなどする。)

お藤 (髪ゆひたて、水が垂りさう。艶麗な顔を上げて) 今日は、……(と會釋する。)

句作 やあ、別嬪さん、失禮。(と突拍子。)

お藤 (顔を背ける。)

お綱 川邊さん、長湯だわねえ。今箆を持って迎ひに行かうと思つた處さ。

句作 然うか、箆を持つて何うするですか。

お綱 しゃくひ上げるのさ、お前さん。

句作 僕が區役所に勤務する云うて、鱧扱ひにするちうは殘酷ですやろ。而してちや、風呂に行つたではないですが、冷水摩擦を遣るですよ。

お綱 だつて、それがお前さんのお湯なんぢやありませんか。日に二度くらゐ、大膚脱で、しゃ

ぼんで臍まで洗ふんだよ。——而して磨くの。……(とお藤に云ふ。)

お藤 然う……(と氣なし。)

お綱 おめかしつちやありやしない。其のかはりお湯ツたら、精々御勉強で月に二度。……然うね、暮には大晦日の晩を入れて……一度……三度の事があつたつけかね。

旬作 風呂は度々浴びるは、其の、衛生に害があるです。僕はめかすぢやないですが。冷水摩擦は身體を強壯にする唯一の方法ぢやね。貴女、何う思ひますか、え、別嬪さん。

お藤 結構ですわね。

お綱 身體を誰と競争するの、役者？（と低い聲でお藤に訊く。）

お藤 否、御丈夫になさるんですとさ。

お綱 お前さん、（と旬作に）瘦せちや居るが、そんなに脂肪ぎつてる癖に、其上丈夫に成つて何うおしなんだね。

旬作 飽くまで身體を強壯にして、大仕事を起さんならんで。

お綱 おや、……地形を起す……女護の島へかえ。

お藤 否、立派な事をなさるんですとさ。

お綱 無理心中は不可いねえ。

旬作 馬鹿な事言はんもん。

と机の前に行き、壁際の二枚折の屏風を取つて、引廻して、其の中にて、にきびとりを顔にべたく。だら／＼と頭髮に油を塗り、種々に櫛を入れる。

お藤 それでは、おかみさん、晩ほどに……

お綱 あ、其の方と御一所に。……お前さんの顔を見ると、立違つて私が出て、（と旬作に目を遣つて）皆留守にして……狭い處だけれど、明渡してあげますわ。

お藤 濟みません、それでは何うぞ。

お綱 お待ちなさいよ。丁どお茶が入つたから。……いえ、お前さん、好いてする事でなくつても、稼業となれば繁昌が可うござんす。祝つて故つとお出花さ。

お藤 折角ですから頂戴して。（と一寸坐直る。）

小取廻しにお綱茶を入れる。合方あり。——船蟲の紋次、薄汚れた袷、古浴衣をかさね、三尺帯。片手を矢藏、人相の悪い頬被りで、三尺ばかりの、つんどに切つた太い青竹の先へ、繪馬を一面ふらりと下げたを、肩に引掛け、花道から、さびた聲の陰氣な節にて、はなうた。

紋次 戀ゆるゑに、魂抜けてうか／＼と、來て見りや小春の人でなし、二十九枚の起誓文、投げた治兵衛が——（と唄ひさして）へッ、笑かしやがらあ。（と門口にかゝり、ひそ／＼と窺ひながら）へい、御免下せえまし。（と覗くやうに開けて入る。）

お綱 おや、お前さんは？

紋次 へい、私あ、其處等川端を這つて歩行く、蟲のやうな、けちな奴でござえす。向後お見知り置き下せえまし、へい、へい。（とおじぎをする。）

お綱 (可厭な奴と、座を立つて) 兄哥さん、何か用かい？

紋次 何ね、おかみさん、お宅様のこつちやねえんですよ。其方の、其處においてなせえます姐さんがね、扇橋裏の繪馬屋へ、此繪馬をお誂へなすつたんで。こりや、其の繪馬でね。

お藤 まあ、持つて来て下すつたんですか。

紋次 手を入れる所をすつかり拵へ上げておいておくれ。急いでだよ、後で取りに来るから。…ト恚う言置いておいでなすつたさうですが、私が通りかゝつたもんだから、繪馬屋のおん爺が、お前さん、私になまけて、日は永し、のらく／＼ほつき歩行く事を承知でね——別に用事もあるめえし、つい一寸届けて上げや。そらの、こゝに、願主、寅の二十一歳女と、書入れた姐さんは、お綱さんて髪結さんの許へ行つて居なさるから——と、恚う云ふもんですからね、へい、持つて参つたんでござえますよ。

お綱 それは何うも。

お藤 ね、おかみさん、まだお話しはしませんでしたけれど、此方の棟梁も、地主様の掛額の景氣附に、皆など池上様へお出掛けなさるつてことですから、私も、其の願がけのお叶ひなすつたお嬢さんに、蔭ながらあやかりたし、棟梁に、お邪魔でも、託かつて、繪馬を納めて頂きたいと思ひましてね、誂へて来たんですわ。——(紋次に)あの、若衆さん、御苦勞様。(と帯に

手を入れる。)

紋次 あ、もし、姐さん。出過ぎましたが、決してお駄賃、へい、御祝儀は頂けません。外の事と違えます。御信心のお使ひだ。銭金づくに成つちや御勿體ねえ。否、決して、何うして、何てつても頂けませんよ。

お綱 お藤さん、まあ、あゝ言ひなさるもんだから。

お藤 そりや、濟みませんねえ。(と繪馬を頂く。)

お綱 兄哥さん、一服おあがんなさいまし。

紋次 へい、ぢや何うぞ頂かして下せえまし。可いお住居でございますねえ。え、もし、姐さん、些と申兼ねましたが、それぢや一服頂かして下せえましな。

お綱 川邊さん、お前さん、巻煙草があるでせう。(と屏風の上から覗いて言ふ。)

旬作 胡蝶を持つとるですが。

お綱 え、胡蝶ですつて？ お前さんのなら蝙蝠でせう。貸して頂戴。

お藤 (煙草盆の世話をする。)

お綱 おや、唯た一本。

旬作 足りんですか。

お綱 何だねえ、箱ごとお出しなさいなね。(と引つたくつて、此方の紋次に) さあ、おあがんなさいまし。(とさし置いて、長火鉢の向うへ歸る。)

紋次 (もちくんと捻くりながら、お藤の顔と、見くらべ、見くらべ。) 一寸もし、……私もお恥かしい性分でごせえまして、慥う云つたハイカラな卷いた奴あ、一向に下さりません。刻みを何うぞ、次手にお煙管を……長えのを何うかね。

お綱 (可厭な奴、と云ふ顔つきにて) お藤さん其處にありませう、上げて下さい。

お藤 はい……めしあがれ。

紋次 へい、頂きますがね。姐さん、姐さん、迎も頂くらるなら、お前さん、一服吸ひつけておくんせえな。

お藤 え。

紋次 姉さん、其の、花の蕾に眞珠てツた處へ、一寸押着けて、あい、てつて、くの字なりに吸口を向けて寄越しておくんなせえよ。

お綱 何だつて。

紋次 ねえ、造作のねえ事ぢやござえませんか。不可せんかい。

お綱 不可せんよ。

紋次 そりや不人情と云ふもんだ。私だつてお前さん、お稻荷様が引越しをする様に、繪馬を擔いで来たんぢやありませんかね。

お藤 ですから。お前さん……

紋次 おつと！ 其の御駄賃は御無用だ。頂かねえと云つちや金輪際、一錢だつて頂かねえ。今日日は、死んだ母親の命日だ。一生涯に唯一度の追善供養の氣で背負つた繪馬さ。御布施の十錢ぐれえ此方から出して遣ら。

お綱 異う云ふね、(とすつと出て) お前さん何と云つたえ。死んだ母親の命日だつて。其のお前さん命日に、強請がましい事を云つちや、濟みさうもないもんだかねえ。

紋次 へ、此方人等式あ、間違つて、媒妁人入れた夫婦でも、阿爺や阿母と割床だ。死んだもの命日に、吸ひつけ煙草をのむなんざ、お線香のかかりになります。是非戴きてえね。不可せんか、不可ねえんですか、不可ねえのか。おい！ 雪の膚に緋縮緬。頼むつてんだ、姐さん、分らねえな。

お綱 お黙り。一寸、此處を何處だと思つてるんだ。髮結のお綱の内だよ。憚りながら御當節は、廓でも吸附煙草は御法度だよ。手前どもでも法度でござんす。

紋次 分りました。御華主の御新姐さん、娘さん徒が、いけえこと出入りをしなざる處だ。風儀

の悪い、吹附煙草なぞ、一切法度だと、慍うおつしやるんだ。
お綱 當然さ。

紋次 よく、お前さん口廣え事を云ひなさるねえ。其處等の姐えと、若え男を引摺込んで、逢引宿をなさるのは、風儀が悪くはねえのかね。

お綱 何だとえ——あ、彼れこれと面倒くさい、男が居ながら。……川邊なん、出て来て對手をおしなさいよ。

旬作 (ぐじくと、しり込して) 然う云ふものには、對手にならんが可えですよ。

紋次 然うだ、然うだ。可い料簡だ。引込んで居ねえ。お前は學者だと見えて先が見えらあ。解りが可いぜ。出る幕ぢやねえんだからな。え、もし何うでございますかね。

お綱 何だつけかね、覺えのない事は、つい忘れた、言へるものなら、最う一度言つて御覽。

紋次 言はねえでよ。若え男を引込んで、其の姐の宿をするのは、風儀が悪くはねえかと云ふのよ。吸つけ煙草が御法度なら、逢引宿は御禁制だ。慍う、八幡鐘ならきぬくの絲でからげて背負ひもしようが、使ひはやまに廻されて、繪馬をかつぐ兄哥ぢやねえ。此間から、其の姐さんに、首つたけで、影のついた様に入りは知つてるから、扇橋の繪馬屋のお爺も、私が威かして引摺つて持つて來たんだ。一服のみてえばわかりよ。惚れたが無理かえ、察してくんねえ。

慍うぶちまけて云つたからにや、お前が空耳を走らかして、輪に吹く煙が、眞圓な月になつて、日が暮れても、歸らねえから然う思へ。

お藤 (堪りかねて) 一寸一服。……

お綱 お止し！ こんな言懸りをされた上ぢや、たとへ、此の人がお前さんの情人だつて、煙草をつけさして成るものかね。私がさせない、お綱がさせない。あい、私が點けさせないが何うするえ。

紋次 何だ。(と立身上りに件のづんど切の青竹を引寄せる。)

些と前、よき程に、大工長三郎、腹掛、股引、印半纏、つつかけ草履、吉原かぶりにて出で、長三郎 あ、一貫三百ア何うでも可い。(と口拍手、團扇太鼓をたきながら、門口に來て、内の聲高なるに、様子を窺ひ、裏へ廻つて、臺所口の暖簾から此時ずつと出る。) や、船蟲、——蟲ぢやねえか。

紋次 え、

長三郎 豪勢、威張るな。

紋次 へい、こりや棟梁の内でごせえすかね。

長三郎 む、俺が小指の内だ、が、其が何うした。

紋次 え……驚いた。へい、結構な、お住居でござえすねえ。

長三郎 九尺二間の三間切よ。何も然う驚くほど結構な長屋ぢやねえ。

紋次 だが根太がしつかりしてまさあね。

長三郎 船ぢやあるめえし、お前に身もんだいをされてぐらつく様ぢや、雨降りの度に流されつちまはあ。いや、雨と云や、お天氣模様様が怪しく成つたぜ。汐の加減か、ためえ、妙な處まで游いで来たな。

紋次 這つて来た蟲でござえす、陽氣の所爲でね。へい、決して汐加減で泳ぎ出したわけぢやありません。這つて来たんだ、棟梁、何にもおつしやらねえで。……えい、もし、何方も、

こりやあ折角だから頂いて参りやす。次手に火を貸しておくんなせえまし、これでも癩病ぢやござえやせん。へい。(と小さくなつて、それでも圖々しく巻煙草を銜へて出て行く。)

お藤 (嬉しそうに、ほつとして) 棟梁、好い處へ。

長三郎 やあ、こりや、少いお師匠さん。

お藤 あれ又。……(とうつむく。)

長三郎 トヤツた處で、迷はせる奴さ。

お綱 申戯ぢやない、何だい、あれは?……

長三郎 水溜に湧いた蟲さ。しみつたれた奴だけれど、困つた事にや——お前見たか——何時でも持つて歩行きやがる、あの青竹の中へ、蚯蚓な、油蟲、毛蟲——船蟲は己が綽名だ。……申すにも不及よ。蜈蚣に、馬陸、青い蜥蜴、紫色の蜘蛛も交せて、どつさりこと拾ひためて、う

じやうじやと詰めて居て。……

お綱 え、。

お藤 まあ!

長三郎 何處でも強請り込んで言ふ目が出ねえと、歸りがけに、あの、それ、入れものの栓をはづして、疊とも言はず、敷居とも言はず、ほたくと蟲を落して仇をするのよ。から最う、其術に掛つちや。腕づくにも、力づくにもかなはねえ。時々は五錢と三錢、岡釣に俺が出た時なんか、煙草錢をくれて置くもんだから、仔細なしに歸りやがった。螞指で引捻つて、あの栓を抜きやあしめえかと、ありやうは俺もびくくしたのよ。意氣地はねえが、(ト胸をたいて)こゝで嫌ふんだから遺瀨がねえ。おまけにお前、あの青竹のな、處々、ぼちく斑の入つた、色の變つてる處と来た日にやあ、其の下に噛付いて、右の青蜥蜴や、紫蜘蛛が、可恐しい毒を吹いて居るんだつてな、誰も慄毛を震ふんだぜ。

お綱 如何な事でも……どれ、鹽花を振つて置かう。

とばらくと撒く。其處へお藤が立つて来て、

お藤 長居をしましたね。おかみさん、そして、(と茶棚の上に置いた繪馬を指して、お綱にさ、やく。)ね……ね……可……ござんすか……

お綱 む、む、(と頷きながら、唐突に故と調子高に)長さん、少いお師匠さんが情事の願掛、其の繪馬を池上様へ預かつて下さいとさ。(と一息に云ふ。)

お藤 棟梁、御生です——おかみさん覚えて在らつしやいよ。(と門をばつたり、空を視めて)些と曇りましたわね。

お綱 晩には、春雨さ。

お藤 あ、可い鹽梅に、先刻の奴の影も見えない。(と歸る。)

長三郎 (逸疾く繪馬を取つて見て居て、)願主、寅の二十一歳女、惱ませるぜ。なあ。

お綱 可哀相に、お藤さんも苦勞をするねえ。見なすつたかい、寔れたよ。

長三郎 また一倍とよくなつた、堪らねえなあ。(とすぐ出さうにする。)

お綱 御飯は？ 棟梁。

長三郎 飯所ぢやねえ。でんく太鼓で夢中になつて、今日は朝から怠けて居るが、一軒仕事場へ顔だけでも出さねえぢや、方げえしの着かねえ處がある。トすぐに引返して地主様で酒だ。其

勢で樽天王よ、お嬢さんをおみこしにして繰出すんだが、評議の模様で、品川迄船になるかも分らねえ。然うだ、お藤さんに見惚れて忘れて了つた。うまくなつたぜ、や、一貫三百アどうでも可い、と恚うお稽古の出来た處を、お前に見せようと思つて中返りをしたんだ。

お綱 泣かずに澤山お遊びなさい。

長三郎 何もお前だつて、俺の稼ぐ處へ惚れ込んだ譯ぢやあるめえ。聞きや、お藤さんの色男も

立派な華族の若様が、其の爲に勘當されて、下宿にくすぶつてると云ふぢやねえか。諸事、色事は勘當をされるに限る。なまけるに歸したもんだ。——いやあ、(と仰山に)大將、御勉強だ

ね。

旬作 ヘツヘツ。(と苦笑ひ。)

長三郎 ほかと来て花もちらほらと云ふ土曜日だ。お出かけなせえな、池上へ……一所、はどうですえ。

旬作 脚氣の氣味ぢやで、遠足は不可んですよ。

お綱 不景氣な病氣だねえ。

長三郎 船になつたらお出なせえな。

旬作 危険ぢやからね。

長三郎 何が危険だ、お前さん、學者の様でもねえ、日本は島だと云はあ……船に乗つても同一ぢやありませんかい。

旬作 けれどもです、引くりかへると堪らんですよ。

お綱 引くり返つたら泳ぎなさいなね。

旬作 僕は爛德利ぢや。

長三郎 爛德利は頼もしいね……何うしてですえ。

旬作 些とも泳げんです。入るとすぐにぶくぶくですが。

長三郎 何んのこつた、頼もしくねえ。

お綱 お前さんの方は、船は大丈夫だけれど、上つてから岡場所へお沈みなさんなよ。

長三郎 (雪駄をつっかけながら) 一人ぢや沈みつこなし。……だが恚う云ふのと、(繪馬をさして) 共々なら、奈落の底も厭はねえ。

お綱 悪い蟲だよ。

長三郎 また鹽ばなぢやねえか。(と格子をがらり。)

お綱 手まへどもは、世帯持、鹽はめつきり高値うござんす。

長三郎 しほが高いと鷗が泳ぐぜ。や、一貫三百ア何うでも可い。(と太鼓をたいて出て行く。)

お綱 悪い蟲だよ。

長三郎 また鹽ばなぢやねえか。(と格子をがらり。)

お綱 手まへどもは、世帯持、鹽はめつきり高値うござんす。

長三郎 しほが高いと鷗が泳ぐぜ。や、一貫三百ア何うでも可い。(と太鼓をたいて出て行く。)

お綱 悪い蟲だよ。

長三郎 また鹽ばなぢやねえか。(と格子をがらり。)

お綱 手まへどもは、世帯持、鹽はめつきり高値うござんす。

長三郎 しほが高いと鷗が泳ぐぜ。や、一貫三百ア何うでも可い。(と太鼓をたいて出て行く。)

お綱 悪い蟲だよ。

長三郎 また鹽ばなぢやねえか。(と格子をがらり。)

お綱 手まへどもは、世帯持、鹽はめつきり高値うござんす。

長三郎 しほが高いと鷗が泳ぐぜ。や、一貫三百ア何うでも可い。(と太鼓をたいて出て行く。)

お綱 悪い蟲だよ。

長三郎 また鹽ばなぢやねえか。(と格子をがらり。)

お綱 手まへどもは、世帯持、鹽はめつきり高値うござんす。

長三郎 しほが高いと鷗が泳ぐぜ。や、一貫三百ア何うでも可い。(と太鼓をたいて出て行く。)

お綱 悪い蟲だよ。

長三郎 また鹽ばなぢやねえか。(と格子をがらり。)

お綱 手まへどもは、世帯持、鹽はめつきり高値うござんす。

長三郎 しほが高いと鷗が泳ぐぜ。や、一貫三百ア何うでも可い。(と太鼓をたいて出て行く。)

お綱 悪い蟲だよ。

長三郎 また鹽ばなぢやねえか。(と格子をがらり。)

お綱 手まへどもは、世帯持、鹽はめつきり高値うござんす。

長三郎 しほが高いと鷗が泳ぐぜ。や、一貫三百ア何うでも可い。(と太鼓をたいて出て行く。)

お綱 悪い蟲だよ。

此の地内の、お長屋總體、世間で札所長屋と云ふ通り、三十三軒の、觀世音、辨財天、愛染様、すべて女體にておはします方々へ、すらりツと札を打つて、新姐、年増へお神酒を獻じて、俺もお流れを頂戴するわさ。中には三途川の婆と云ふのも居らなはなないがな、いや、又、此處の内やうに、堂守が留守の山寺は、信心が格別よ。一ツ祝つて飲んでおくれ。それ、お關坊、杯を出したり。

お關 一軒々々、お供なんでございますわ。(と笑ながら臺を据ゑる。)

お綱 お祝ひ申して頂きませう。旦那、恠うした處は、高砂でございますね。

勘右衛門 いや、其の高砂は尉と姥で、直ぐに、姥を思出すと、あの嬉しさうな娘の顔を見せたら、と涙で此處へつツかける。處で、四海波を諺ふ奴さ。

お綱 旦那のお話は長唄のやうでございますとさ。

勘右衛門 昔取つた杵つかさ。婆どのが、恰ど此のおせき坊くらいな年よ。何が、俺と云ふものに、ぞつこんでの、おまけに此の娘にそつくりな容色好し。

お關 又おはじめなさいました。それを云ふなら、もうお供はしないツて云つたちやありませんか。

勘右衛門 おつとあやまる。さてお重ね。……三杯くらゐは可からう。三つくらゐは溜めても可

いが、四月、五月と成るとかくされぬ、些と家賃の方も入れなさい。

お綱 恐れ入ります。

勘右衛門 は、は、扱てお着ぢや。それ、お關坊、婆さんの少い女、出さつせえ。

お關 知りませんよ。……あの、おかみさん。(と水引をかけた包を出す。)

お綱 まあ、これは、何うも。

勘右衛門 何と五月、恐れ入つたか！(と瓢箪の上へ突袖して) 處で、隣家の左官へ廻らう。あの又た媽が、塗る事、塗る事、白子の地藏と拜んで遣らう。

お綱 旦那、いつつけますよ。

勘右衛門 いつつけるなら、六月たまつたと云つてくれ。……もう此れ猶豫なし流れ月だ。おつと、川端の住人に流れるは禁句だつて。枝を鳴らさぬ御代なれや。

とおせきをつれて、のいと出で行く。

お綱 おもしろい旦那さねえ、川邊さん。

旬作 愚物ですなあ。

お綱 其の癡金佛様なんだよ。——さあ、片づけものをして置いて、(と鏡臺を置直してきちんとするうち。……)

句作本をおき、のぼせた顔して、大ためいき、袂からはながみを出して、顔のあぶらをべとべとと頬に拭き、眉をしかめながら、小形の姿見を出して覗き、やがて、小刀の背を返して、頬から頤を、べたりと扱いては、件のはながみに塗すつて居て

句作 おかみさん。(と呼ぶ。)

お綱 はあ。

句作 人間の顔と云ふものは、どうして恠う汚いもんですウ。(と歎息する。)

お綱 え、何故さ。(と妙な顔。)

句作 拭うてもく膏が浮く。……穿つても、潰いても、にきびが吹くで。

お綱 まあ、可厭だ。聞いても恐れる。(と眉を擗める。)

句作 迷信でも可い。何か、禁厭などないもんですかい。

お綱 ありますね……先刻、此處に居たでせう。あの綺麗な人に、撫でて貰へば、即座に治つて、玉子に目鼻に成りますわ。

句作 (生真面目に) しかしです、頼んでも背いてくれんですだらう。

お綱 まづ、不可ますまいね。(と背後向く。)

句作 両手で額を壓へる。ばたくとお藤駈出で、翻然と入つて、いきなりお綱の背中へ抱つ

お藤 おかみさん。

お綱 あら、吃驚した、何うしたの。

お藤 来たわ! 入つたのよ、何うしませう。

お綱 其の方?

お藤 はあ。……

お綱 はあもないもんだ、此人は。何うしませうツて、——此方へお通しなさいなね。

お藤 ですけども、何處に在らつしやるか分らないんですもの。

お綱 落着いて下さいよ、お前さん、何うしたと云ふんだね。

お藤 私が家へ歸らうとする……途中で出つくはしたものですから、急いで引返して來たんですけれど……一所に來た事は來たんですけれど……

お綱 馬鹿にしないねえ。い、人を途中へ落として來る人がありますか。

お藤 何うしたら可いでせう、一寸。……(とそはくする。)

露地を附いて入つた車夫、喜藏、お藤が開けたまゝの格子戸から、ぬいと顔を出して、喜藏へい、お駄賃を願ひます。

お綱 (立か、つて) おや、車でおいでかい。

お藤 否。

お綱 ぢや、お連様が其處へ入らしたのかい。(と車夫に云ふ。)

喜藏 お連様ですか、何ですか、お供をして来ました方は、何處へおいでなすつたか分らねえで。

お綱 一寸、じれつたい。誰の車賃さ。

喜藏 其の姐さんのでさあ。

お綱 矢張、お前さん乗つて来たの。(とお藤に云ふ。)

お藤 え、其は然うなのよ。

お綱 何を云つておいでだね、若衆さん、そして、如何ほど。

喜藏 濟みませんが、圓助頂かしておくんさいまし。

お綱 高いぢやないかね、何處から乗つたの。

お藤 ぢき其處の小名木川通からよ。

お綱 馬鹿にしないねえ、お前。

喜藏 ですがね、お二人分ですからね。

お綱 一寸、相乗かい。

喜藏 申戯ぢやありません、半分づゝ二人で、お乗んなすつたんで。

お綱 二人で？ 半分づゝ？……だから相乗かと聞くんぢやないか。

喜藏 否、お連の方は、初め兩國からお供をして、扇橋まで、と云ふお極めて参りましたんです

が、小名木川通へかゝりますと、向うから、其の姐さんがおいでなすつたんです。其奴を見る

と、突然お前さん、お連の方が、下ろせ、で以て、飛下りたんでせう。ひつたり附着いて、へ

へ、二人で何か云つておいでなさるかと思ふと、其の姐さんが、ぼつと櫻色になんなすつた。

……

お藤 (はつと片袖で顔を隠す。)

喜藏 と思ふと、お前さん、入交つて、姐さんがお乗んなすつたらうぢやありませんか、ねえ。

それから、其おさしづ通に、此方様まで参つたんで、へい。お駄賃の所は、どちらから頂くん

だか分りませんが、お連様は、からつきし、其ツ切、何處へ行きなすつたか知れませんか、

何うぞ此方様で願ひたいもんですが……吃驚賃を入れますと、一兩ぢや、お易いもんです、へ

い。

お綱 分りましたよ。(と立てかへて喜藏を返す。)

お藤 おかみさん、(と片手をがみをして) 後生、一生、出て見て、お連れ申して下さいな。

お綱 だつて、所番地も言はないで、一人で車に乗つて来たのかね。

お藤 え、。

お綱 え、ぢやないわ、しつかりおしよ。

お藤 だけれど、日が暮てからのつもりだつたのに、眞晝間、あの銚子通ひの川蒸汽に乗る……
下りる……人ごみの處でせう。私、くわつとして了つて、(と耳をおさへて) 夢中なの——四方
八方、見られては、知れては大變ばかりですもの。自分で目を塞いで来ましたわ。……町の名
ぐらゐは然う云つたやうに思ひますけれど、……露地ですから、知れますまいよ。私は出られ
ません。後生だから見て来て頂戴。(と息せいて云ふ。)

お綱 どんな方さ？ 私だつてお目にかつた事はないんだからねえ。一寸、どんな方さ、一寸？

お藤 どんな方つて……あの。(極の悪(う)う。)

お綱 焦つたいねえ。

お藤 堪忍して下さいな。……だつて、何時も然う云つてゐるぢやありませんか。

お綱 あ、色の白い、鼻筋の通つた。……

お藤 (頷く。)

お綱 目つきの凛々しい、口許の優しい。

お藤 (頷く。)

お綱 縞の着物に、緋の羽織で。……

お藤 (頷く。)

お綱 申分のない。

お藤 (頷く。)

お綱 勝手におしよ。(と門を出す。)

お藤 あとについて、地露を覗す。

お藤 うまく行逢つて下さると可いけれど、路が違ひはしないか知ら。

こゝに清元の合方あり。お藤、扇を露地に立てて方角を占ふ。やがて、心ゆかし。目じるし
のつもりにて、縮緬の手拭にくるくるとまいて帯にさしたる黄金の地の扇を開き、富士なり
に、俯向けにして、格子に掛け、手拭にて結び止めて、……

大分曇つたよ。(格子をしめる。)

と無臺薄暗くなる。お藤、上へ上り、鏡臺に向ひ、鬢のほつれを搔上げる。再び本を讀んで
居て、句作、のそくと立ち、じたくと震へるばかり、音をひそめて、お藤の背後から肩

越しに姿見を覗く。顔映る。

お藤 あれ、可厭な顔が、あれえ。

ふり返りさま、句作を突飛ばす。不意をくらつて尻持をつきながら、

句作 へ、へ、へ、。(と笑つて、机の前へ摺戻る。)

お藤 (身震ひして、鏡臺に面を伏せる。)

お綱 (信夫を連れて出で、扇に目をつけ、莞爾と信夫の顔を見て) さあ、何うぞ。

信夫 (無言にて會釋しながら、扇は其のまゝにして、ともなはる。)

お綱 お藤さん。

お藤 あ。(と顔を上げる。)

お綱 町の曲角の處に立ていらしつたよ。

お藤 (笑顔に成る。)

信夫 驚いた、何うも弱つたよ。(と許り。)

お綱 貴方、何うぞ、こんな所でございますから、お氣味が悪うございませうが、まあ、お敷き

なすつて下さいましな。

お藤 おかみさん、何うぞ、もう。

お綱 さあ、貴方、お召ものが汚れますからさ。

信夫 否、(と云ひながら、蒲團を敷く) お邪魔をいたします。

お綱 飛んだ事を、貴方、何ういたしましたして。まあ、お茶を一つ入れませうね。

お藤 おかみさん、何うぞ、……あの、私がありますから。

お綱 なさりたいでせう、然うでせう。ほ、は、ではなさいまし。私は臺所の用が少々。……洋

燈掃除をして、直に出掛けますから。……お藤さん、精々働くんですよ。(と笑ひながら立つ。)

お藤 (うつとりと成つて、思はず、信夫の袖に手を置く。)

と、句作、湧出る額の汗を拭ひながら、ぬいと頭を上げて覗く。信夫、これを見て、屹と拂

ひのける。お藤心づき黙つて茶をつぎ、茶臺にのせて、そつと出す。信夫黙つて取つて、目

で句作の方を教へ、顔でさしづする。お藤かぶりをふる。信夫目で叱る。お藤打撃みながら、

又一ツ茶臺にのせて、信夫の背後から句作の前へ持つて行く。

お藤 如何です。

句作 はあ。

お藤 貴方、前刻から、詰めて御勉強でございますね。

句作 (慌しく本をかくして) えらく、怠けて居るですが。

お藤 否、御勉強よ、毒だわ、貴方、そんなになすつちや。而して、晝間そんなになさいまして

も、晩方から御近所の娘さんを迷はしちや不可ませんねえ。

旬作 些とも迷はんですなあ。

お藤 あら、嘘おつしやい。

旬作 わはは。(とだしぬけに、はめをはづした高笑。片隅の葛籠の上へ頭を抱へて寝倒れる。)

お藤 (呆れて、興さめ顔。)

座に戻ると、信夫、此の間に別に一個、茶碗を茶臺にのせて置く。お藤見て、

おや。(と嬉しがる。)

信夫 (済まして) お前もおあがり。

お綱 さあ、出かけよう。(と手拭に包んだ石鱗の箱を持って) 川邊さん、お前さん湯へ行かないか。

旬作 (むつくと起き、横すわりに成つて) 今日は止めぢや。

お綱 何故さ。

旬作 冷水摩擦で洗うたから。

お綱 何もおつきあひだね。一寸、湯はつけたり、……異な驕りと云ふのがあるんだから。

旬作 ふむ。

お藤 おかみさんが、お鰻を驕りますとさ。

旬作 いや、鰻は腹にもつて不可んですよ。

お綱 ぢや、軍鶏、……ね、軍鶏にしませう。

旬作 然うか。

お綱 然うかつて人があるものかね。

旬作 軍鶏なら、軍鶏なら可えが、僕はまだ腹がくちいでなあ。

お綱 贅澤な事をお言ひでないよ。

旬作 だつて時刻が早いぞ。

お綱 だから一風呂浴びてさ、薩張りした處で、濡手拭を提げて、お前さんと吉野屋の二階で差向ひに成らうと云ふ、こゝに一人粹な年増が居るんだあね。

旬作 然うか。

お綱 然うかは困つたね。さあ、お出掛けなさいよ。

旬作 だが、何も一所に出んでも可えではないかね。

お綱 ですから、お前さんは格子戸から、私や勝手口から、可いかい、兩花道の出としようよ。

旬作 然うか。

お綱 一寸、串戯ぢやない。然うかは弱りましたね。よう、川邊さん、それから中仕切をトント
ン、番臺で顔を見合せて、兩方の戸をぐわら〜、淺くとも清き流れの、とか何とか云ふので
出てさ。吉野屋で一重櫻。あとで寄席へ行きませうよ。

旬作 然うか。けれども、寄席もつまらんもんなあ。

お藤 貴方、そんなお附合の悪い事云ふもんぢやありませんわ。

旬作 ぢや、まあ先へ行くさ。僕は最う些と經つてから。

お綱 そんなに長湯ぢやありません。

旬作 然うか。けれども、まあ緩りでも可からうが。(とぬすみ目にて、信夫とお藤をじろり〜)

お綱 否さ、焦つたいねえ。

信夫 (居住居を直して) お藤、私は最う歸らう。

お藤 まあ、(と顔を見る、目がうるんで怨めしうに) 罪になりますよ。(と笑顔をつくる。)

お綱 え、もう、川邊さん、粹事の眞似をするよ云ふのに、分らない人だねえ。

旬作 然うか、あ、あ、それぢや出ようかな。何だか、脚氣で、氣が重いで。

お藤 貴方、内にはかりいらつしやると、蟲が湧きますよ。

旬作 何、其かはり、冷水摩擦をやつとるですよ。(と漸つとこごと尻を立て、さて、つゞらの蓋

をあけて、たゝんだ、めりやすの襦衣を引出し、古足袋、汚れた靴足袋などを引散らかして見

て居る。)

お綱 (まづよしと) 早々となさいよ。門へ廻るから。——御免なさいまし。(と氣早に臺所に入

る。)

旬作 (小首を傾け) はてな、靴にしようかな。(と茶色の靴足袋をはき、あとを片づけ、羽織を

着て、衣紋を直し、袖口を引張る。)

お藤 (泣出しさうに成つて、身もだえして、信夫の袖を握つて居る。)

旬作 (また、唐縮緬大巾の帯を解いて、胸高にしめ直し、本箱の上の石鹼箱を、手拭にくるん

で袂に入れ、柱の折釘へ引つかけた古い山高帽を取つて、ソツと指のさきで頂邊を弾いて頭に

頂き、古新聞に包んだ、靴を出して、ふツ〜と吹いて、土間へ、ポカンと置く。)

お藤 (勇みをなし) お出かけですか。

と出しなに信夫の背中を、しめたと云ふ心、一つたゝいて、旬作の背後に立つて、押出す身

振。

お綱 (もう廻つて出て居て、此時覗く) 何をしてるのさ。おや、(と吃驚して) へえ、靴を穿い

て来るの、お前さん、湯へ行くのに。

旬作 然うか、しかし湯からすぐに軍鶏屋へ行くぢやないですか。

お藤 大層、面倒なんでございますこと。(と旬作が「い、紐をかゝるので、堪らなく氣を揉む。)

旬作 はあ、加減をして、だましく遣らん事には、此の紐がよぢれるです。

お藤 お手傳ひ申しませうね。

お綱 早くなさいよ、川邊さん、先へ行つて待つてるよ。(と見かねてついと行く。)

お藤 (白い指で、旬作の靴につかまり紐を結ぶ。……)

合方あり。——香水の薫ゆかしき鬢の毛をかきあげしま、横櫛に、さすや窓もる月の影。——

信夫 (じつと、これを見詰める。)

旬作 これは。(片手で帽を脱ぎ、据ゑて持つて、片手を開けて結ばせる。)

お藤 結びながら、ト信夫と顔を見合せて、両方、おもてを背ける。

お藤 さ、貴方。

旬作 やあ、面倒でありました。

お藤 お楽しみ。(と背中をトンと叩いて出し、格子をばつたり、信夫の傍へ、飛び寄つて) え、生命が縮まるやうだつた。何だらう、まあ、お綱さんも氣が利かないぢやないか。親類うちに

都合があつて、當分一人預かつて置くんだつて。……大抵分つた人の癖に、今日あたりは、何處かへ逐出して置けば可いのだ。……尤も、日が暮れてから来るつもりぢやあつただけだ。……も、んぢいッたらありやしない。

信夫 一寸、も、んぢいは、さしがあるよ。

お藤 氣樂ねえ。憎らしい。(と心付いて) お忘れもの？(と格子へ云ふ。)

旬作 (此の時小戻りして来て、扇と手拭を、ひこくと嗅いで居て) いや、何、別に。……(とのそく引込む。)

お藤 あ、驚いた、動悸がこんなんですよ。

信夫 (更めてじつと顔を見て) お藤、お前、あの、あいつの靴の紐を結んでくれたか。私の爲に。……(とほろりとする。)

お藤 小指一つも貴方のものを、勝手に使つて濟みません。

信夫 あ、濟まんよ、濟まないとも。

お藤 だつて。……

信夫 だつてぢやない、小指どころか、他に口を利くんでも、一々斷つてくれないぢや。

お藤 ですけど、些とも早く、慍うして二人に成りたいんですもの。私や餘り焦つたくつて、

あの邪魔ものさへ拂へれば、死んでも可いと思ふほど、氣が違ひさうに成りました。

信夫 あ邪魔ものばかりなものか。世間が皆んな邪魔をす。勝手にしろ！ 何を！ 今日の思ひばかりでも、添ひ遂げないで置くものか。

お藤 添へるでせうか。

信夫 添つて居らあね。

お藤 それでも、思ふやうに、話さへ出来ないんですもの、果敢ないわねえ。

信夫 辛抱するんだ、辛抱するんだ、お互に。……待つ間が花だと云ふぢやないか。

お藤 其の花も咲いたのに、藝妓に成つて私や何うせう。雨だの、風だの、可厭な顔だの、……

(と云ひかけて、心付き) あ、一寸、……(と立つて) 明るい處へ。(と鏡臺を直す。)

信夫 何をするんだよ。

お藤 一所に顔を映して頂戴。先刻、可厭なもの、顔が映つて、私、氣に成つて、氣に成つて、

仕様がないんですから。……

信夫 何をくだらない。

お藤 ねえ、また此上に、藝妓に成つて、苦勞をするんぢやありませんか。一度ぐらゐは、言ふ

ことを聞くものよ。

信夫 はい、〜畏まつたよ。

二人ならぶと、臺所から廻つて、匂作、そつと入り、ぬつくりと背後に突立つ。

お藤 あれえ。(と振向く。)

信夫 (吃驚して) 何だ。(とお藤に) 何うしたんですか。(と匂作を見る。)

匂作 忘れものをしたんですから。

と机のまはりを搔探し、本箱を覗き、やがて又葛籠の蓋を開けて、悠々と雜物を引出す。

お藤 (震へながら) 見上げてませうか、何なんです。

匂作 貴女には分らんですな。僕の心と同じものです。

お藤 (むつとして) 一生、ここに居てお探しなさいませよ。

匂作 やあ、熱いです。

と額を拭ひながら、羽織を脱いで、ぐつたりと胡坐をかき、壁に凭懸つて目を眠る。

信夫 (屹と成つて、つつと立ち) お藤。

お藤 あい。(とよろ／＼して絶奇る。)

信夫 面倒だ、私は歸る。(云ひなり門を出る。)

お藤 一所に行くの、よう。(と追絶る。)

信夫 並んで晝間歩けるかい、馬鹿。

と突戻して、衝と花道にかゝる時、若衆大勢、揃ひのなり、一同、團扇太鼓をたゝきながら。

伊助 さあ、様子の可い處を、町内の娘子に見せて廻らうぜ。

呂八 迷はせろ、迷はせろ。

波太郎 やあ、ぼつり／＼降つて来た。

仁造 花の雨だ、構はねえ。

穂之助 濡れる事、濡れる事。

と口々に騒ぎ立てて、練つて来る。信夫の姿、其の間に亂れて入る。お藤、駈出さうとして、此に憚つて、一旦格子の内へ小隠れる、どや／＼と通つて一同入る。

お藤 (そつと出て、信夫のあとを遙々との如く見詰めながら、目を扇子に返し、手拭を解き、

扇の面を顔に當て、はら／＼と落涙する。)

鶯啼く。櫻の花片ちら／＼と其姿にかゝる。

句作 (うそ／＼とうか／＼ひ出で、下からお藤を覗込む。)

紋次 (ひそんで、出窓から、内の状をさし窺ふ。)

お藤 え、。(と云つて、開いたまゝ、扇で句作の顔を打つ。)

句作 (顔をふせられたまゝ、めんない千鳥で、よろ／＼と膝を支く。)

お藤 口惜しいねえ。(と其のまゝ、手拭の端を皓齒で噛む。)

櫻ばら／＼と靜に、颯と雨の音。——幕。

新内のながしにてつなぎ、雨の音し／＼と直ぐに幕あく。

下、雁々松

舞臺、向つて右の方、暗き水、流を見せず、波を立てず。水の外は、凡て掘割の土手模様。

松の木立すく／＼あり、松の色なりたけ黒きがよし。あとにて此の間へ月出で、櫻の花びら

散かゝる。苦船一艘、苦をかけ、土手より離し、棹を深く立てて此に纜ひあり。岸より船べ

りに歩みの板を渡す。奥へ此の板とならべて橋をかける。お綱と信夫、橋を渡りて出づ。此

の場面の時、汐満ち船高し。はじめ、そぼ降る雨、やがて朧、のちに凄きまで月の色澄渡る。

尙ほ勝手よき松の根に、荷車一臺あり。水の彼方に木場の景色、松のむかうは灯入りにて、

遠見の廓

幕あく、と件の荷車に、土地のごろつき三人、一人は腰かけ、一人は踞み、一人は立かゝり

て、頬杖つき、どれも蓑と、笠と、炭の明俵にて風體をかへながら、額を交へ、無言にてひ

そまりつゝ、一方へ目をそろへて、獲もの来る、と囁き頷く。

お綱 (信夫をともしなひ、吉野屋とかいた番傘をさしかけて) 貴方、此土手を一つ眞直に越しますと、直きに大門でございます。其の近所に、些ともさしのない、極、あの、安心な家がありますからね。

信夫 かさねく、御迷惑をかけて、實に濟まない。

お綱 私は何の造作もあるんぢやありません。ですが、貴方。貴方は、もしか、私がお留め申さなかつたら、お藤さんをあれなり残して、歸つておしまひなさるおつもりだつたんでございますか。餘りですわねえ。ですが、それと云ふのも私が不行届きから起つたんでございますかね。

信夫 そんな事はありやしない。おかみさんの方は、日が暮れてからと云ふ手筈に成つて居たんださうで。忍んで逢ふのに、眞晝間は何事だらうと、お藤にも散々こゝとを言はれたんです。でも、さあ、と成ると、矢も楯も……(苦笑) そんなこんなで、焦つたさの餘り、痲癢が起つて、つい、ね。

お綱 御尤でございますとも。否ね、お湯屋へ入つて、帯を解きかけましたも、まだ、番臺越に、あの、川邊むつちり殿の形が見えますまい。氣に成りますから、半纏を脱いだまんま、戸外へ

出ても、まだ見えませんから、一足づゝ内の方まで歸つた處で、貴方が噴々して駈出しておいでなすつた。……と其始末で、何でもお歸りなさると云ふ。歸しちや私が濟まない。立話しても出来ませんから、吉野屋で一口さしあげて、お引留め申したんですが、あの娘とは違つて、怨みつらみは私の方がうまいでせう。ほゝ、(と微醉) 大分お困なすつたやうですな。其のかはり、これから好い處へ貴方をお連れ申しますと、すぐに私が引つ返して、……殊によるとお藤さんは、私の處から、最う扇橋の内の方へ歸つて居るかも知れませんが、其のまんま連れ出して、私が前刻の入れ合せに、ゆつくり明日までお逢はせ申しますから、澤山可愛がつてお貰ひなさいませよ。

と來かゝると、三人、件の荷車を、狭い土手の眞中へ引き摺り出し、横に木戸を築いて通さず。行違ひに、つけまはして、千鳥がけに行途を遮ぎる。二三度搦んで、

信夫 何をするんだ。

一次 何だと。

二九郎 何にもしねえ。

お綱 通しておくれ。

三十 勝手に通りやがれ、往來だ。

信夫 車を横にするから通れんぢやないか。

一次 黙つて口をきけ。何處だと思ふ。此方人等の車は、横に引くと極つてるんだい。

お綱 あゝ、分つた。お前たちは喧嘩を賣つて、どぶろくを買ふ氣だね。

二九郎 巫山戯た事を。

三十 遣つて了へ。

一次 白壁の樂がきめら。

と五人入亂れる。三人は、蓑と笠と、あき俵にて、おのゝ顔をかかし、片手のみにて亂暴するゆる抄がゆかず。お綱、信夫、それゝあしらふ。面倒だ、と三人、蓑など棄てて立ちかゝると、一たまりもなく、お綱は荷車にかけて仰向けに、信夫は松の樹に押しつけられる。

お綱 (其の時、奴等の顔を透かし見て) おや! お前たちは、一や三十ぢやないか。

一次 えゝ、おかみさん。

三十 や、お綱さんか。

二九郎 こりや、堪らねえ。

一次 棟梁にや、内證で、内證で。

と吃驚敗亡で、一目散にばらゝ逃げる。

お綱 呆れた奴等だよ。まさか、お茶番の氣ぢやあるまいねえ。

信夫 おかみさん。

お綱 あゝ、貴方、お怪我をなさりはしませんか。

信夫 私は何うもしやあしない。其方が婦だからひやくした。

お綱 雁々松の此の丁場は、いやな、貴方、凄い處でございましてねえ。

信夫 雁々松と云ふのかい。

お綱 すらゝ、松の樹が、霞の中に並びました景色が、雁が飛ぶやうに見えるんですつて。寂い處で、暮れると人通りもありませんがね、土地ツ子が御一所ですから、大丈夫でございます。あゝ、丁ど雨もあがりました。さあ、出かけませう。(と入る。)

其のあとへ、貸本屋利吉、焼芋をかじりながら黙つて通つて、これも入る。と花道から、按摩平碌、コトゝと杖を鳴らし、仰向けに、目を白く、舞臺へかゝる。お藤、氣のぼせのしたる風情、うろゝ早足にて出で、ばつたり行逢ふ。

お藤 あの、按摩さん。

平碌 へえ。

お藤 一寸、今しがた、此の雁々松で、喧嘩があつたつて、お前さん、見やしませんか。

平碌 見た? ……見えやしないねえ、私には、はあ。

お藤 あ、悪かつた、お聞きなさはりはしなくつて。

平碌 聞きましたよ。はあ、見たも同然だ、…お前さん。目の前で、え、……遣つたね、えらく遣つたねえ。くわツと、恚う、遣つけたねえ。

お藤 ひどい喧嘩。

平碌 ひどい喧嘩、大喧嘩! え、何うも、そりや、激しいの何のつて、戦だね。大砲を打た

ないと云ふまでの事たね、可恐しうがしたぜ。私あ、腰を抜かしたあ、お前さん、血みどろ血

ンがい。

お藤 え、血を出して、何方です。

平碌 何方つて…其…相手と…相手とでねえ。

お藤 何ですか、相手は七八人で、此方は二人とか、一人とか言ふんですけれど。

平碌 一人? ……

お藤 一人ですか。

平碌 一人、……だがね、其の何かね、お前さん、知合かね。

お藤 知合と云ふんでもないんですけれど、一寸、其の一人は、どんな人…

平碌 どんな人と云つて、其の、何だねえ。

お藤 學生さん風の方ぢやないか知ら。

平碌 學生さん風の、それ、少い人さ、少い、色の。

お藤 白い方よ。眉毛のすつきりした、目の凛々しい、緋の羽織をめした。

平碌 其の通り、瓜二つ!

お藤 え、何うしよう、私、屹と、柏木の若様だよ。

平碌 若様々々、若様と云つた、……さあ、大變。

お藤 而して、お怪我でもなすつたんですか。

平碌 怪我、怪我どころか、生命もあるめえ、怪我にも何にも、お前さん、大怪我だ。かう額が

眞二つ、衣服も何にもすたくだ。血みどれ血んがい。其處等にも、ぼたりくと、椿ぼどな

が落ちて居よう。私の下駄になんぞ着いて居はしないか。得て、こんな事からか、り合に成る

ものだ。あ、可恐え、可恐え、長居はおそれた。(と、きよとく入る。)

お藤 何うしたら可いだらう。……まさかと思ふけれど、信夫さんだつたら私何うしようねえ。

而して何處で、何うした喧嘩か知ら。(とうろくする。)

目の前へ人が見える。即ち川邊句作。薄暗がりなり、お藤、氣が急いで心付かず。

お藤 貴郎々々、一寸お尋ね申しますが、つい今しがた、大喧嘩がござんしたつて。
旬作 へ、へ、お藤さん、へ、名を知つとるでせう、僕ですが、川邊ですが。

お藤 あれ、又……（と怯えて）何うして貴方、此處へ。

旬作 何うして言うて、先刻、晩程にも、内で、あの通り、膏汗を流いて一生懸命に言うたです
が。恚う言うた上に成つたからには、此れからと云ふもの、川邊は、貴女の影法師同然ぢや思
うておくれえ。膠、漆で附着いて、死ぬまで離れはせんですよ。……僕がです、先きへ死ぬ時
は、貴女を噛み殺いて、冥土でも一所の釜にうだり、同じ血の池に沈み、同一針の山で、突き
刺されるまで離れぬ云うたでないですか。貴女、藝妓になると云ふ。僕買ひに行く金がなかつ
たら、區役所のかへりに寄つて、門へ立つとる。料理茶屋でも、待合でも一晩中……夜があけ
るまでも外に立つとる。湯に入れば……矢張立つとると誓つて云うたではないですか。前刻は、
貴女が聲を立てた——長屋がわやく／＼出て来るから放したですが、矢張り此の通り、貴女が來
る方へ、影に成つて、附着いて來とるですよ。此處では喚いても聞えんですぞ。（と袖を掴む。）
お藤 可厭。

と振放し、馳出すを、旬作追繼つて抱留める。

旬作 走れば走るです。飛べば飛ぶです。然うすると比翼の鳥ですなあ。……へ、へ、。

お藤 川邊さん、眞個に、串戲ぢやありませんよ。

旬作 串戲でないです。生命がけです。

お藤 否、串戲ぢやない、離して下さい。

旬作 放しはせんです。此の、此の、白粉ですか、香水ですか、此の香が堪らない、筋も骨も。

お藤 何んですね、路傍で見つともない。

旬作 恥も外聞もないですよ。

お藤 信夫さんはお怪我をなさるし……其處處ぢやないんだわ。放して下さい、よう。（困じて泣く。）

旬作 （其ま、身をおしに凭れながら、二人岸にのぞむ）然う言はんで、顔を見せておくれえ、
顔を見せておくれえ。（と袖でかくしたのを覗込むやうにする。）

お藤 （かぶりを掉る。）

旬作 わあ、血だらけのものが流れて來た。

お藤 （吃驚して水を見る。）

旬作 （すかさず、其の肩を抱きながら、同じやうに川の面に顔を映して）見なさい。貴女の影の
やうに見えて、僕の身體は離れんでせうが。（とにや／＼。）

お藤 (きつぱりと) 其の船へ行きませう。

旬作 船へ行くかね。而して、何うするかね。

お藤 分るやうに話をしませう。

旬作 可いねえ、船は可いねえ、へ、へ。

お藤 貴方、まあ、おいでなさいまし。

旬作 (前へ立つて、其船に岸から渡した板を渡る。) 手を引くかね。

お藤 危いわ、そんな事して、(と熟と見込んで、衝と膝を支くと、ソックに兩手に板を取つて引つくりかへす。)

旬作 わッ。(ざんぶと落込む。)

お藤 (手づかみに、二ツ三ツ、石を打込み、やがて、すつと立つ。時に拭へるが如く月出づ。

振り仰いで、松ヶ枝はづれに月を凝視めて、笑顔寂しく) あ、嬉しい。お月様には、可厭な影

が映らない。(其の時はらくらくと櫻散りかゝる) まあ、綺麗な、あれ、月の前を、花片が、

花片が花片が、あれさ、お前さんたち、汚い男の上に落ちや可厭。

と袖で掬ふやうに追つて、散るのをひらくと扇で圍ひ、花びらを受けて、杖をかへして、

うっかり視つめる。思ひがけぬ裳を掴むで、水中より、旬作の手、腕きながらぐいと引く。

お藤はたと横に倒れる。旬作呻き、一度あたまを出す。其の手、お藤の襟にかゝる。お藤ひかれながら肩を脱ぐ。片袖するりと、緋の長襦袢。扇を取つて、丁と旬作の手首を打つ。打てども離さず、次第に引込まれて、お藤の姿、汀に反返る。トタンに、もやひ船の苦を撥ねる、と胴の間に船蟲の紋次。

紋次 (それと見るや、枕にして居た、白丁を取つて、ドンと旬作にたゝきつける。急所に當る。)

旬作 (音もなく、これにて沈む。)

紋次 (其のまゝ、艦を取り、上段に大きく振かぶつて、黙つて水中を見込む。)

お藤 (身を起すと、よろゝとなつて、松に絶る。)

紋次 (其の時、艦をうしろへ投げて、又胴の間に、もぐり込む。)

お藤 あゝ、(とほつと息) 袖も濡れるやら、綻びるやら……此ぢや町へは出られない。

と、荷車の蓑を取つて引かける。手拭ひを、吹流しに、衝へ、少時打傾いて立ちながら、すたすたと行かうとするを、紋次船べりに頬杖して、覗ひ居る。

紋次 おい、姐さん、姐さん。

お藤 あゝ、私。

紋次 待ちねえ。……一寸、用がある。

お藤 え、！

紋次 いや、きづかひなもんぢやねえ。(といひく船から一跨ぎに、ひらりと上る。)

紋次 慥う、姉さん、何處へ行くんだ。

お藤 (見て) まあ、お前さんは前刻見えた。……

紋次 蟲だよ、船がありや船蟲も出らあな。吃驚するにや當らねえ。何處へ行くよ。

お藤 (おどくしながら) 一寸其處まで行きますわ。

紋次 交番へ自首するの。

お藤 い、え、はあ、あの、何ですつて？

紋次 慥う、とぼけちや不可え。お前は取逆上せて何にも知るめえが、私あ船に居て残らず見たんだ。蛆のやうな野郎だつて、人間一疋殺したからにや、お前もすつぱり身を投るか、松の枝へ扱帯でもぶら下るだらうと思つたら、かくれ蓑とおいでなすつた。呆れるぢやねえか、おい。

お藤 何にも言ひません。お前さん、後生です、見のがして下さいましな。

紋次 不可えよ。傍に居た私が、かゝり合に成つて迷惑だ。丁と極りを附けてくんねえ。人間は一疋取替、殺し度か殺すのよ。其のかはり自分も死ぬんだ。人殺しをしたあとで、のめく色男と長生をしようなんて、そんなつうくしい奴があるもんか。圖々しいより、汚ねえ了簡、

しみつたれた、けちな性根だ。そんな事は深川にや流行らねえ。

お藤 あの、……私のだいじな方も、酷い怪我をなすつたと言ひますし、もう、死にますつもりでいたしました事ですけれど。……

紋次 未練が出て、逢ひたくなつたか。

お藤 何うなすつたか、案じられてなりませんもの。

紋次 む、其の安否なら聞かして遣らう。お前、あの平碌按摩に、ゾドンと一發當てられたんだ。當世の火繩銃、古い嘘をつく名代な奴よ。私が見て知つて居ら。若え奴あ、すりむき疵も着けられやしねえ。

お藤 眞個ですか。

紋次 殺せ、活せの、かけあひ最中、嘘を云つてる隙はねえ。(と屹と云ふ。)

お藤 まあ、嬉しい。あの方は、御無事なのね、あ、難有う存じます。

と、あはれに、思はず手を合せて紋次を拜む。紋次じつと、もの思ふ。

紋次 拜んだな。さあ、此佛がついて居る。安心して往生しねえ。

お藤 何うぞ、あの、お前さんを、佛様と思ひます、手を合せて拜むから。……

紋次 見のがしてくれかね。いんや！ 助ける方ぢや佛にならねえ、拜まれねえよ。さつさと手

前で片づけねえか。おい、首をくくるか、身投げをするか、それなら佛で見物すらあ。おい、何うする。

お藤 はつ。(と泣崩れる。)

紋次 (石に片胡坐、青竹を支いて顔を撫で) 泣いたつて助けねえ。私なんざ、傾城の涙で藏がもつた擧句なんだ。見ねえ、い、月夜だぜ。雨さへ降らなきや、婦の涙で笠は着ねえよ。

お藤 (思ひ餘つて、遁げようと立上る。取つて引戻す。)

紋次 え、卑怯な奴だ。(と引据ゑる。)

お綱 (戻り道、これを見つると、駈けつけて、紋次を突遣り) 何をするんだえ。(とお藤を庇ふ。)

紋次 何もしねえ、月夜にや、船蟲がてんたう蟲よ。其姐さんが、お前許の、あの、むつつり野郎を、川へはめて殺した處を見て居たから、げしにんを取つて遣らうと云ふんだ。……言句はあるめえ。禮を云つて、煙草の一斤も驕んねえな。

お綱 川邊を、こ、ころしたつて、お藤さんが。(とお藤を、抱くやうにして、仕うちにて聞取り、一度川の面を凝と見る。) え、まあ、お藤さん、飛んだ事をしてくれたねえ。

お藤 堪忍して……おかみさん。

お綱 堪忍するもしないもないけれど、さし當つた當惑より、お前さんの身の上が危さに、私は身體が震へるよ。まあ、何より自首をして出る事におしなね。後は何とも相談しよう。おい、紋次か、卑怯な遁隠れなんぞしやあしないよ。私がついて、出る所へ丁と然う申して出るが、何うしたえ。言句はなからうね。

紋次 能うかし、其奴に自首なんか。雪隠へでも隠れる氣だらう。てんたう蟲が然うはさせねえ。

お綱 黙つておいで。(お藤に) 自首するね、名のつて出るわね。

お藤 おかみさん、見遁がして下さいませよ。

お綱 見遁がすにも何にも、私は夢なら覺めて欲しい、と唇を噛んで居る。……髪の毛を引張つても、目が覺めないもの、何うしよう。人一人殺しちや遁げおふせられはしないから、思切つて名告つてお出よ。向うにはね、町の方にはね、お藤は來ないか、最う來さうなものだと、旦那が、……可いかい、其の筋の若旦那が、立つたり、居たり、待つておいでだよ。さあ、行かう。私と一所に、名のつて出ようね。

お藤 (はじめて頷く。)

お綱 見たか、船蟲、潔く自首して出るのに、いざこざがあるなら、言つて御覽。

紋次 可、いざこざはねえから行きねえ。一所に附いて行つて見届けようから。

お綱 あれさ、お前も、御苦勞な、附いて來るには及ばないわね。

紋次 べらぼうめ、人間の歩行く通り、お月様の歩行くを見ねえ。何處までも、てんたう蟲はついで廻らあ。お前たちが出る處にや、責道具に酒を並べて、緋の羽織のお奉行が、ほつれた鬢の御詮議だらうが、然うは問屋でおろさねえとよ。

お綱 (はつと腰を落して) 然うまで知つておいでだもの、此の上は隠さない。何うか、此處は、情で見遁してあげておくれ。家財道具を賣つてなり、半纏を脱いでなり、お前さんの酒代は、屹度私が拵へるから。お前さんもし、若いものぢやないか、後生だ、察しておやんなさいよ。

長三郎 (出で、小がくれで、うかゞひ居る。)

紋次 錢金ぢや、人の命は買はれねえ。川邊匂作を殺したんだ。どの道助かりやしねえぢやねえか。

お綱 私手をつくよ、手をついて頼むから。

紋次 煩えな。

お綱 では、恠うしよう。とに角一時でも、半時でも、お前さん、猶豫をして、お藤さんを、生命にかけた大事な人に逢はせておくれ、ね、それだけなら可いだらう。

紋次 然うまで云ふのに、嵩にかゝつて、阿漕な事も言はれめえ。それだけの事なら。……

お綱 背いておくれかい。

紋次 まあ、應さ。恠う、其のかはり唯ぢや不可え。お藤さんが、一寸逢ひに行つて歸るまで、貧乏ゆるぎもさせねえで、おかみさん、お前を此處に留めて置くが、それでも可いかね。

お綱 あゝ、可いとも、人質に成らうよ。さあ、お藤さん、はやくおいで。

紋次 其處で、おい、其の間、松の下に二人で立つても居られめえ。苦船の中へ連れて入るが、それでも可いか。おまけに見ねえ、蜈蚣に蚯蚓、青い蜥蜴に、紫の蜘蛛の、うじやと詰つた、此青竹と膝組だが構はねえか。

お綱 (分別して) 覺悟をしています。可うござんす。(と二人立ちかゝる。)

長三郎 (黙つて、頷き／＼見て居る。)

お綱 さあ、お藤さん、おいでなさい、さつきの方は、叶屋の二階だよ。

お藤 おかみさん、私、おきに戻らねばならないんですか。(とおろ／＼して云ふ。)

お綱 (其の顔を熟と見て) 察しておくんねえ。

お藤 可厭、おかみさん、自首するのも可厭、牢屋へなんか、私、死ぬより尙つらい。然うかつて、死にたくないんですもの、助けて下さいませよ。お前さん、見遁しておくんねえよ。

紋次 狀あ見やがれ、あの通りだ。

お綱 (つ、と寄つて、お藤をおさへ) 分らない人だねえ。お轉婆ものの我儘から、此の體裁に成つたけれど、自分で云つては恥かしいが、私は此でも、……死ぬ場合には死んで見せるよ。覺悟をおしなね、お藤さん、氣をはつきりとおもちなさいよ。

と落ちた舞扇を取つて、二ツ三ツ、蓑の上から續け打ちに打つて、丁と振りあげる。長三郎躍り出でて、其の腕を支へ、ぐいと取つて引く。

長三郎 何をしやる。船から見た、土手の様子が尋常ぢやねえ。お前たちのやうでもあるし、……一人であがつて来て様子は聞いた。此ン畜生、お綱、てめえ、人質に成るくらゐな事を恩に被せて、聞分けがないと焦れ込んで、打ちた、きをしやがつたな。些とばかりの達引を賣ものにしやあがる、けちな土根性、踏みのめしてくれる。(と突放す。)

お綱 あ、棟梁、お前の氣にも可恥かしい。何の恩になぞ被せるものかね。餘りお藤さんが可哀相、ものの色も見えないやうに、恚う狼狽した心だと、私が身に代へて逃さうたつて、逃げおふせるものぢやない。交番の前ぢや倒れます。氣をはつきりとさせようと思つたばかり。此の手の冷めたさ見ておくれ。扇子を上げた、と思つたら、指に覺えも何んにもないもの。(と紋次にお前さんは、又た餘まりな。鷲の羽を撈るやうな、恚うした處を、見て居ながら、些ツとでも、いぢらしいと思はないかい。眞に今年三十四まで、隨分のんきに暮したけれど、たゞ

時の心配に、肉を殺いで瘦せるやうな、お藤さん、堪忍して頂戴。

と肩を抱いて、はつと泣く。お藤、其の膝にしつかと、取継りて、顔を見まもり、

お藤 おかみさん、棟梁、私、人殺しをして置いて遁げたい、みれんな根性と、おさげすみなすつちや、口惜しいわ。はづかしい。柏木の若様が、怪我をなすつたと、夫だけ、見ず知らずの按摩さんに聞いた時さへ、生きて居る氣はしませんでした。川へ人を落してから、急に死ぬのが可厭に成つた。……御覽なさいな、汚ならしい、可厭らしい、川邊が、冥土に待つて居るぢやありませんか。母さんは大病でも、まだ冥土ぢやありません。父さん、大きいお師匠さん、棟梁、おかみさん、誰も居ない……川邊一人が居る處へ、何うして私が行かれます。そればかりで、私は死ぬのは可厭なんです。死にたくないわ、助けて下さい。よう、棟梁、おかみさん。

長三郎 (さしうつむいて居て) だつて、人殺しをしたものを、助けやうがないぢやないか。

お綱 長さん、何とか分別をしておやんなね。無理はない。川邊さんが待つて居るなら、私だつて死ねないよ。

長三郎 おれも分別に餘つたなあ。

紋次 (澄まして、石にうしろむきに腰をかけ、巻蓑をのんで居て、此の時、鷹揚に向直る。) お

い、お前さん方、いま、お藤さんか、其の姉さんの言つた事を、尤と思ふか、何う思ふ。

長三郎 (目をひらき) 尤だ！ 地獄、極楽あるなしは知らねえが、嫌ひ抜いた男と一所に、あの世へ行くのをいやだと云ふ。女心だ。可哀さうに。……私は無理はねえと思ふ。悪なお前も察してくんねえ。

お綱 眞個、無理はないわねえ。

紋次 (煙草を棄て、靜に腕をくんで) 私も思ふ。……何だか、暗え、だゞつ廣え、ばうくくと、風の吹く中で、其の姉さんが、あの涎に、追廻されさうな氣がしてならねえ。今夜は私がてんたう蟲だ。何うにかして遣る！ おい、棟梁、これを見ねえ。あッ、(と咽喉を掠つて吐いて、鼻紙にうけて) 此奴を見ねえ。(と云ふ。)

長三郎 たんつばなんか突出しやがれ、活しちや置かねえぞ。(と寄つて見て) や、青竹から金魚でも出しやがつたと思つたら、血だ、血だ。

紋次 (振りかぶつて、其の時、川岸の石をハタと打つ、颯と竹破る。長三郎思はず退さる。)
此の通りよ。臍物を搔拂へば、人間の腹も綺麗なものだ。東海道は蒼空よ。八ッ橋の古跡のあたりを、紫の蜘蛛と青蜥蜴が、きりくると這廻つて、血の中へ、藤の花を、ゆかし戀し、と織込んでるぜ。私あ毒蟲を二疋と呑んだ。呆れるない！ 一目お藤さんの顔を見てから、惚れて

惚れて惚れ抜いたが、竹に封じた蟲同然、毒な私の身體だから、吸つけ煙草の無心ぐれえが精一杯で居た處よ。

長三郎 其のお前がまた何だつて、毒蟲を呑んだんだ。

紋次 棟梁、おかみさん、意氣な人たちが聞いてくんねえ。恚う云つちや、のろいやうだが、手前で惚れた婦にや、柄の可い半襟の一筋も買て遣つて、喜ぶ顔が見てえものよ。……が、俺の身體で何が出来る。くされ袷にすたく三尺、婦の子に遣る物てツちや、此の生命の外にや何にもねえ。

長三郎 む、其奴あ、お互だ。

紋次 よし、くれてやらう持つてけ生命、と、其氣で居たと思ひねえ。え、お前さんたち、川邊の奴ア川へ落した、落したはお藤さんが落したが、申戲ぢやねえ、いくら相手が、あんな奴でも、所作事でボンと投る奴ぢやあるめえし、……踊の扇子で打たくらるで、人間がくたばるかい。周章なさんな。急所を狙つて、白丁徳利を、ぐわん、と一番船の中からおみまひ申して、彼畜生の、留めを刺したは、此の紋次だ。それ、見ねえ。お藤さんのために、人殺しをした俺ぢやねえか。覺悟がなくツて出来るものか。

長三郎 や、眞個か、船蟲。こいつは暗夜だか、月夜だか、見當がつかなく成つた。

紋次 む、それと云ふのが、お藤さんが川邊を落したあとで、月からこぼれる花びらを、同じ流れに浮くな、と云つて、袖で庇つた緋縮緬。玉で拵へた姿を見たら、餘りと云へば美しくさ、辛抱が仕切れねえ。吸つけ煙草の服さへ嫌はれる身體ぢや、長生するのも厭だからよ。

お綱 お前さん、そんなに、まあ、生命に掛けてお藤さんを手に入れようと思つたのかね。

紋次 申戲を云つちや不可え。算盤珠に當つてよ、生命を遣るから、俺の思を叶へてくれる、と云つた日にや、金子を遣るから、轉べと吐す。……下根性も同一だ。江戸ッ兒が、そんなけちな了簡を持つものか。たゞで遣る氣よ。たゞ遣るが、其の半襟の一件だ。喜ぶ顔が一度見てえ。其の姉さんの様子ぢや、人を一人殺したから、すぐに自分も死ぬだらう。首を縊るか、身を投げるか。飛出して、……其處を一番抱留めて、いや、身代りには俺が成る、待ちねえ、川邊を殺したのは紋次だ、と云つて聞かして、一目で可い、俺の顔を見て莞爾するのを見てえ、と思つた。處を、未練らしく逃げるぢやねえか。俺の方ぢや、おつかひものの生命を包んだ風呂敷包を開けられねえから、故とな、のつびきさせず責めたのよ。分つたかね。——お藤さん、お藤さん。(お藤、傍へ縋り寄る) 呂律も些と、怪しくなつた、怒う後生だ、俺の遣る生命、……やすい半襟は氣に入つた、不斷がけにする、と一言云つて聞かしてくんねえ。

お綱 お藤さん。(と涙聲にて呼ぶ。)

お藤 其の、お前さんの半襟は、腕まもりの袋に縫つて、一生膚身を離しません。何うしたら可いでせう、……お前さん、死なないで下さいまし、私や、たよりのない身體ですもの。

紋次 可愛いな、(と其の背に手をかけて) お藤さん、俺が達者で居て見ねえ。川邊が待つてるのが可厭らしさに、此の後百年たつた處で、壽命でも死なれめえぜ。……安心しねえ。俺が冥土へ行つてるからな、川邊の五人や十人、禪を旗に立てて押寄せたつて、氣づけえねえ。千年も、萬年も色男と添つたあとで、壽命でゆつくり遣つて來ねえ。其の時は、眞個の半襟を買つて遣らあ、な、嬉しいか。

お藤 ……………

長三郎 嬉しからう、お藤さん、俺も一度此のくらゐに惚れて見てえ。

お藤 嬉しいよ、お前さん。(と紋次に縋る。)

紋次 俺も嬉しい。え、棟梁、惚れたと云ふ一念にや、人間何をするか知れねえな。我身に我身が分らねえ。苦痛々々、賽の目は六と出て、人間の道中は上りらしいぜ。あ、苦しい、が素敵に可い心持ちだ。

長三郎 道理だ。

紋次 待ちねえ。下手人の方は片がついたが、可愛い人を藝者にして此上苦勞はさしたくねえ。

棟梁、おい、其の繪馬を貸しねえ。此の青竹に引挾んでよ。可いか。繪馬を奉げて思ふ人に添

へるやうに願がけをすると云つたな。佛に願書差出しながら、まだるツこい。死んだものには見えるだらう。いつれ其處等に世帯を持つてる、むすぶの神に直訴をして遣る。(としつかと取つてどうと手をつき) お藤さん。たゞ殘惜いのは、お前の踊を見ないで死ぬんだ、お藤さん。

お藤 あい、あい、何うしよう、私、何にも言はれない。

紋次 それからな、死骸の見得を張るんぢやねえ、私も舊は身分があつた。親兄弟に恥かしい。蓑を着せてかくしてくんねえ。よう、お前の膚に着いたもんだ。畜生の淺ましさ、矢張り揚錢をかする奴か。おい、引かぶせてくんねえよ。

お藤 あい。(と着せかけ、兩袖で肩を抱いて、顔をふせる。)

お綱 お藤さん、親身の兄さんとお思ひよ。お前さんは、容色のいゝのが仇に成つたが、また其の美しさで助かつたよ、安心おしよ。

お藤 否、おかみさん、紋次さんが、私のために、冥土へ行つて下さいます。其處は川邊の居る處でも、些とも可恐い事はないんですもの。……最う何時でも死ぬますわ、私一所に死にたいわ。

長三郎 ひゝ、人情だ、人情だ。

紋次 (苦笑ひして、切なさうに) 馬鹿を云つちや不可え、一所に死なれて堪るものか。俺とお前と見當違えな道行をして見ねえ、地獄へ行つて此から世話に成らうと云ふ、肝心な閻魔が吃驚して目をまはさあ。……そんな事より、引導がはりに、踊を一つ見せてくんねえ。

お藤 まあ、お前さん、私が何うして……

紋次 扇を持つて川岸へ立つたツ切、其で可いよ。散る花びらを扇で受けた。……あの姿がもう一度見てえと思ふ。

長三郎 お藤さん、死ぬ氣で一つ立ちねえな。——や、地主のお嬢さんが皆を連れて、船から来たぜ。(と云ふ。)

大萬燈花々しく、團扇太鼓を手にく持ち、そろひの扮装にて多人數出づ。其の中にお三輪、髪は三ツ輪に緋ながら、平打の簪、このみの帯、黒で格子、黄八丈、えりつきの一枚小袖、緋の紋縮緬の長襦袢。片褌を端折り、雪駄ばきなり。

紋次 (最後の顔を上げて) おう、土地の兄哥か、若衆徒、船蟲の紋次ア人殺をして自分も死ぬんだ。見届けてくんねえよ。あッ! お藤さん、さらばだぜ。

とばつたりのめる。お藤ががる。

お綱 まあ、お嬢さん。

お三輪 おかみさん、あの姉さんは。

長三郎 へい、船でお話しいたしました、あれが扇橋のお藤さんでございます。

お三輪 (此のうち、舞扇を拾ひ、開いて見つゝ) 貴女、貴女、お藤さん、澤山苦勞がおあんな
さいますッてね。出過ぎましたやうですが、お金子で済む事だけは、私が何うにかいたしませ
う。……もう御心配なさいますな。そして、あの、其のうち、お落着きなすつたら、お上手だ
つて評判の踊を見せて下さいな。(といひつゝ、お藤に扇を渡す。)

お綱 (一寸、頂き、黙つて取る。)

お綱 まあ、お藤さん、聞いたかい。あゝ、もう一人、些とも早く、喜ばしい人がある。一寸

勘太さん。……

勘太 おい。(と云ふ。)

お綱 濟まないが、お前さん、一走り、大門前の叶屋へ行つてね、私が云つた、と然う云つて、
柏木さんと云ふ方に、急いで此處までおいで下さいましたッて、頼まれておくんない。

勘太 然う云や分るね。

お綱 あゝ、直ぐにッて。

勘太 よしきた、東は辰巳の廓……(と駈けて行く。)

お綱 若い衆さん、皆で會向をしようねえ。(一同太鼓をたゞく。)

長三郎 おい、静に、少し待ちねえ。(と更まつて) お藤さん、紋次が、あんなに焦れたんだ。一
ッ、扇をお開きなせえ。……お嬢さんも、今のやうにおつしやるんだ……

お綱 まあ、お前さん、何うしてそんな事が。……お嬢さんも、今が今、とおつしやるんぢやな
いぢやないか。

長三郎 いや、何よりの功德に成る。……死出の山も鼻唄で越すッてよ。……こゝろ意氣だ。紋
次の心は、俺に分つた。……さあ、お藤さん、恩返しに立つて遣んねえ。

お藤 はい、(と頷き) お前さん、(と蓑に縋つて) 兄さん、兄さんと思ひます。……妹と一言云
つて下さいな。(と扇を構へて、向直る。風の音颯と、月あをく、花びらかゝる。) おゝ……枝
ならば手向きたいねえ、花びらなり。(と此を受けつゝ、きりくゝと扇を開く。)

お綱 あれ、風が出て、——薄ら寒い。

お三輪 ゴツとするわねえ。……

長三郎 あゝ、まだ宵だらうに、夜半のやうだ。

お藤 (唄) 曉の明星は、西へ、(とさす手、ひく手をためらひ、中空を凝と視て、細く透る聲
しめやかに) 魂は何處においでだらうねえ。(と恍惚する。)

夜叉ヶ池

此の間頻に花ふる。
こあひだしきり
はな

長三郎真前に、いづれも團扇太鼓賑かに。
ちやうざぶろうまことまへ
うちははだいこにぎや

(—幕)

黒和尚鯨入（劍ヶ峰の使者）
 與 十（鹿見村百姓）
 其の他大勢
 鹿見宅膳（神官）
 權藤管八（村會議員）
 齋田初雄（小學教師）
 畑上嘉傳次（村長）
 傳 吉（博徒）
 小鳥風呂助（小相撲）
 穴隈鑛藏（縣の代議士）
 劇中名をいふもの。——（白山劍ヶ峰、千蛇ヶ池の公達）

場所 越前國大野郡鹿見村琴彈谷
 時 現代。——盛夏
 人名 萩原晃（鐘樓守）
 百 合（娘）
 山澤學圓（文學士）
 白雪姫（夜又ヶ池の主）
 湯尾峠の萬年姥（眷屬）
 白男の鯉七
 大蟹五郎
 木の芽峠の山椿
 鯖江太郎
 鯖波次郎
 虎杖の入道
 十三塚の骨
 夥多の影法師

三國獄の麓の里に、暮六つの鐘きこゆ。——幕を開く。

秋原晃此の時白髪につくり、鐘樓の上に立ちて夕陽を望みつゝあり。鐘樓は柱に蔦からまり、高き石段に苔蒸し、棟には草生ゆ。晃やがて徐に段を下りて、清水に米を磨ぐお百合の背後に行く。

晃 水は、美しい。何時見ても……美しいな。

百合 え。

其の水の岸に菖蒲あり二三輪小さき花咲く。

晃 綺麗な水だよ。(微笑む。)

百合 (白髪の鬢に手を當てて) でも、白いのでございませぬもの。

晃 そりや、米を磨いで居るからさ。……(框の縁に腰を掛く) お勝手働き御苦勞、せつかくの
お手を手仕事で臺なしは恐多い、些とお手傳ひと行かうかな。

百合 可うございませぬよ。

晃 否……お手傳ひと云ふ處だが、お百合さんの然うした處は、咲残つた菖蒲を透いて、水に影

が映したやうで尙ほ綺麗だ。

百合 存じませぬ。

晃 賞めるに怒る奴がありますか。

百合 おなぶり遊ばすんでございませぬものを。——そして旦那様は、こんな臺所へ出ていらつし
やるものではありません。早くお机の所へおいでなさいまし。

晃 鐘を撞く旦那はをかしい。實は權助と名を替へて、早速お飯にありつきたい。何とも可恐く
腹が空いて、今、鐘を撞いた撞木が、杖になれば可いと思つた。處で居催促と云ふ形もある。

百合 ほ、又お極り。……すぐお夕飯にいたしませうねえ。

晃 手品ぢやあるまいし、磨いで居る米が、飯に早變りはしさうもないぜ。

百合 まあ、あんな事を——これは翌朝の分を仕掛けて置くのでございませぬよ。

晃 翌朝の分——あ、お世帯もち、然もあるべき事です。いや、其を聞いて安心したら、がつ
かりして餘計空いた。

百合 何でございませぬねえ。……お菜も、あの、お好きな鳴焼をして上げますから、おとなしく
していらつしやいませ。お腹が空いたつて、人が聞くと笑ひます。

晃 (縁を上る) 誰に遠慮があるものか、人が笑ふのは、ね、お前。

百合 はい。

晃 お互に朝寝の時――

百合 知りませんよ。(莞爾俯向く。)

晃 頗く藪蚊が押寄せた。裏縁で燻して遣らう。(納戸、背後むきに山を仰ぐ)……雲の峰を焼落した、三國ヶ嶽は火のやうだ。西は近江、北は加賀、幽に美濃の山々峰々、數萬の松明を列ねたやうに早の焰で取巻いた。夜叉ヶ池へも映るらしい。丁ど其の水の上あたり、宵の明星の色さへ赤い。……なかく雨らしい影もないな。

百合 ……其の龍が棲む、夜叉ヶ池からお池の水が續くと申します。此處の清水も氣の故やら、流が澤山瘦せました。頃は村方で大騒ぎをして居ます。……暑さは強し……貴方、お身體に觸りはしますまいかと、――めしあがりもの不自由な片山里は心細い。私は其が心配でなりません。

晃 流が細つたつて構ふものか。お前こそ、其の上夏瘦せをしないが可い。お百合さん、其の夕顔の花に、一寸手を觸つて見ないか。

百合 はい、怎ういたすのでございますか。

晃 花にも葉にも露があらうね。

百合 あ、冷い。水の手にも涼しいほど、しつとり花が濡れましたよ。

晃 世間の人には金が要らう、田地も要らう、雨もなければなるまいが、我々二人活きるには、百日照つても乾きはしない。其の、露があれば澤山なんだ。(戸外に向へる障子を閉す。)

百合 貴方、お暑うございませう。開けてお置きなさいまして、既う、其方此方人も通りますまい。

晃 何、更つて、そんな心配をするものか。……晩方閉込んで一燻し燻して置くと、蚊が大分樂になるよ。

時に蚊遣の煙なびく、

學圓 日に焼けたるバナマ帽子、背廣の服、落着のある人體也。風呂敷包を斜に背ひ、脚絆草鞋穿、杖づくりの洋傘をついて、鐘樓の下に出づ。打仰ぎ鐘を眺め、

學圓 今朝、明六つの橋を渡つて、こゝで暮六つの鐘を聞いた。……お百合は笹に米をうつす。

學圓 やあ、お精が出ます。(と聲を掛く。)

百合 はい。(見向く。)

學圓 途中、畷の竹藪の處へ出て……暗く成つた處で、今しがた聞きました。時を打つたは此の

鐘でせうな。

百合 然やうでございます。

學圓 音も尊い!……立派な鐘ぢや。鐘樓へ上つて見ても差支へはありませんか。

百合 (衆を抱へて立つ) え、大事ござんせん。けれども貴客、御申戯に、お杖やなんぞでお敲き遊ばしては不可ません。

學圓 西瓜を買ふのではありません。決して敲いては見ますまい。(笑ふ。)

百合 御申戯おつしやいます。……否、悪戯を遊ばすやうなお方とは、お見受け申しはしませんけれど、其の鐘は、明六つと、暮六つと、夜中丑満に一度、——三度のほかは鳴らさない事になつて居りますから、失禮とは存じましたが、一寸申上げたのでございます。さあ、何うぞ御遠慮なく、上つて御覽なさいまし。(夕顔の垣根について入むとす。)

學圓 あ、一寸……お待ち下さい。鐘も見ようと思ひますが、ふと言を交はしたを御縁に、餘り不躰がましい事ぢやが、茶なりと湯なりと、一杯お振舞ひ下さらんか。

百合 お易い事でございます。さあ、貴客、此へお掛けなさいまし。

學圓 御免下さいよ。

百合 眞に見苦しうございます。

學圓 此は——お寺の庫裡とも見受ません。御本堂は離れて居ますか。

百合 否、最う昔、焼けたと申しまして、以前から、寺はないのでございます。

學圓 鐘ばかり……

百合 はい。

學圓 鐘ばかり……成程、處で西瓜の一件ぢや。(帽子を脱ぐ、殆ど剃髪したる如き一分刈の額を撫でて) や、西瓜と云へば、内に甜瓜でもありますまいか。——茶店でもない様子——(見廻す。)

片山家の暮れ行く風情、茅屋の低き納戸の障子に灯影映る。

學圓 此の上、晩飯の御難題は言出しませんか、如何とも腹が空いた。

百合 ほ、。(と打笑み) 寛の下に、梨が冷してござんす、上げませう。(と夕顔の蔭に立廻る。)

學圓 (がぶく)と茶を呑み、衣兜から扇子を取つて、煽いだのを、と翳して見つ、) お、咲きました。貴女の顔を見るやうに。

百合 え、? (聞返す。)

學圓 いや、髪の色を見るやうに。

百合 もう、年をとりますと、花どころではございませぬ。早く干瓢にでもなりますれば、……

と其ばかりを待つて居ります。

學圓 小刀を此へお遣はし……私が剥きます。——お世話を掛けては却つて氣遣ひな。どれく……旅の事缺け、不器用ながら、梨の皮ぐらるは、うまく剥きます。お、く氷よりよく冷えた。玉を削るとは此の事ぢやらう。

百合 旅を遊ばす御様子にお見受け申します……貴客は、どれから、どれへお越しなさいませう？

學圓 扱て名告りを揚げて、何の峠を越すと云ふでもありません。御覽の通り、學校に勤めるもので、暑中休暇に見物學問と云ふ處を、遣つて歩行く……尤も、歸途です。——涼しくば木の芽峠、音に聞えた中の河内か、(廂はづれに山見る肩)峰の茶店に茶汲女が赤前垂と云ふのが事實なら、疱瘡の神の建場でも差支へん。湯の尾峠を越さうとも思ひます。——落着く前は京都ですわ。

百合 お泊りは？ 貴客、今晚の。

學圓 あ、浮かり泊りなぞお聞きなさらぬが可い。言尻に着いて、宿の御無心申さんとも限らんぞ。は、は、いや、申戯ぢや。御心配には及ばんが、何と、其の湯の尾峠の茶汲女は、今でも赤前垂ぢやらうかね。

百合 山また山の峠の中に、嘘のやうにもお思ひなさいませうが、眞個だと申します。

學圓 谷の姫百合も緋色に咲けば、何も其に不思議はない。が、此の通り、山ばかり、重り累る、あの、巔を思ふにつけて、……夕焼雲が、めらくと巖に焼込むやうにも見える。こりや、赤前垂より、雪女郎で凄うても、中の河内が可いかも分らん。何にしる、暑い事ぢやね。——漸つと此處で呼吸をついた。

百合 里では人死もありませう……酷い旱でございますもの。

學圓 今朝から難行苦行の體で、暑さに八九里惱みましたか——可恐しい事には、水らしい水と云ふのを、此處へ来てはじめて見ました。此は清水と見えます。

百合 裏の峠から湧きますのを、笥にうけて落します……細い流でございませうが、石に當つて、りんくくと佳い音がしますので、此の谷を、あの琴弾谷と申します。貴客、それは、おいしい冷い清水。……一杯汲んで差上げませうか。

學圓 何が今まで我慢が出来よう、鐘堂も知らない前に、此の美しい水を見ると、逆蜻蛉で口をつけて、手で引摺んでがぶくと。

百合 まあ、私は何うしませう、知らずにお米を磨ぎました。

學圓 いや、しらげ水は菖蒲の紋、夕顔の花の化粧に成つたと見えて、下流の水は矢張水晶さ

さ濁りもしなかつた。が、村里一統、飲む水にも困るらしく見受けたに、此處の源まで来ないのは格別、流れを汲取るものもなかつたやうに思ふ……何ぞ仔細のある事ぢやらうか。

百合 あの、湧きますのは、裏の畦でござんすけれど。

學圓 はあ、はあ。……

百合 水の源は此の山奥に、夜叉ヶ池と申します。凄く大池がございます。其の水底には龍が棲む、其處へ通ふと云ひまして——毒があると可恐がります。——最う薄暗くて見えますまいけれども、其の貴客、流の石には、水がかゝつて、紫だの、緑だの、口紅ほどな小粒も交つて、其は綺麗でございますのを、お池の主の眷屬の鱗がこぼれたなんのツて、氣味が悪いと申すんでございますから。……

學圓 綺麗な石が毒蛇の鱗？ や、がぶ／＼と、豪いことを遣つて了うた。(と扇子を以て胸を打つ。)

百合 まあ、(と微笑み)私どもが此の年まで朝夕飲んで何ともない、其をあの、人は疑ふのでございます。

學圓 尤も、尤も。ものを疑ふのは人間の習ひですよ。私は今のお言で、決して心配はしません。現に朝夕飲んで居らるゝ、——此の年紀まで——(と打ち瞻り)お幾歳ぢやな。

百合 ……………

學圓 まあさ、失禮ぢやが、お幾歳です？

百合 御免なさいまし、……忘れまして。……

學圓 はゝゝ、俚言にも、婦人に對して、貴女は何時死ぬとは問うても可い。が、何時生れた、とは聞くな——とある。此は無遠慮に出過ぎました。……お幾歳ぢやと年紀は尋ねますまい。時に幾干ですか。

百合 幾干かとおつしやつて？

學圓 代價ぢや。

百合 あの、お代、何の？……お寶……ま、滅相な。お茶代なぞ頂くのではないのでござんす。學圓 茶も茶ぢやが、いや此は、髻のやうにもじやくと聞えてをかしい。茶も勿論、梨を十分に頂いた。お商賣でなうても無代價では心苦しい。すばりと餘計なら黙つても差置きますが、旅空なり、御覽の通りの風體。丁と云うて取つて下さい。

百合 然うまでお氣が済みませんなら、少々お代を頂きませうか。

學圓 勿論ともな。

百合 でも、あの、お代とさへ申しますもの、お寶には限りません。其のかはり、短いでも可